

419

14.5-248



\*1200501215717\*

島根縣史蹟名勝天然紀念物調查報告

(隱岐號)

第八輯



始



昭和十年度



島根縣史蹟名勝天然紀念物調查報告第八輯

(隱岐號)



島根縣

14.5-248

### 凡例

一、本冊ニ収録セル所ノ報告ハ本縣史蹟名勝天然紀念物調査委員ガ昭和九年度ヨリ昭和十年度ニ亘ル調査資料中隱岐島ニ關スルモノノミヲ掲載セル隱岐號ヲ發刊スルコトトセリ

一、本報告ノ調査ニ從事セラレタル調査委員ノ氏名及擔當ハ左ノ如シ

史蹟 擔當

後藤藏四郎

名勝 擔當

園山市太郎

一、本報告ノ調査ニ關シテハ隱岐支廳關係町村當局ハ勿論學校職員並有志各位ヨリ特別ノ援助ヲ受ケタルコトヲ深ク感謝スルト共ニ地元町村ニ於テハ寫真ノ提供等多大ノ便宜ヲ與ヘラレテ遺憾ナク調査ヲ遂行セシメラレタル好意ヲ茲ニ記シテ深ク謝意ヲ表ス

昭和十一年二月

島根縣學務部學務課



# 調査報告目次

## 一、史蹟

第一、隱岐の排佛……………調査委員 後藤藏四郎……………一

## 一、名勝・天然紀念物

第一、隱岐布施海岸……………	調査委員	園山市太郎……………元
第二、隱岐海苔田ノ鼻……………	同	園山市太郎……………三
第三、隱岐白島海岸……………	同	園山市太郎……………元
第四、重柄の岩壁……………	同	園山市太郎……………四
第五、油井ノ池……………	同	園山市太郎……………四
第六、壇鏡ノ瀧……………	同	園山市太郎……………五
第七、隱岐國賀海岸……………	同	園山市太郎……………五
第八、隱岐知夫灣……………	同	園山市太郎……………六
第九、隱岐知夫赤壁……………	同	園山市太郎……………七

挿入圖版目次

- |      |         |                     |
|------|---------|---------------------|
| 第一、  | 隱岐布施海岸  | 崎山岬ヨリ長島ニ至ル海岸        |
| 第二、  | 同       | 崎山岬ヨリ長島ニ至ル海岸        |
| 第三、  | 同       | 飯美港口ノ飯美崎            |
| 第四、  | 同       | 小峯島ヲ南端ヨリ見ル          |
| 第五、  | 隱岐海苔田ノ鼻 | 海苔田ノ鼻ニ在ル佐水の崖        |
| 第六、  | 同       | 海苔田ノ鼻ヨリ中村灣岸ヲ望ム      |
| 第七、  | 同       | 崎山鼻ニ近キ烏帽子島、龜島、釜島ヲ望ム |
| 第八、  | 同       | 海苔田ノ鼻ニ在ル琴島          |
| 第九、  | 同       | 海苔田ノ鼻ニ在ル兜岩          |
| 第十、  | 同       | 海苔田ノ鼻ニ在ル岩脈          |
| 第十一、 | 同       | 海苔田ノ鼻北側ニアル鏡島        |
| 第十二、 | 隱岐白島海岸  | 中村灣岸山頂ヨリ遙ニ白島海岸ヲ望ム   |
| 第十三、 | 同       | 白島粗面岩上ノ海蝕           |
| 第十四、 | 同       | 白島ノ海蝕               |
| 第十五、 | 同       | 田島ノ一端ヨリ松島水道ヲ望ム      |

- 第十六、同
- 第十七、同
- 第十八、同
- 第十九、同
- 第二十、重栖の岩壁
- 第二十一、同
- 第二十二、油井ノ池
- 第二十三、壇鏡ノ瀧
- 第二十四、同
- 第二十五、隠岐國賀海岸
- 第二十六、同
- 第二十七、同
- 第二十八、同
- 第二十九、同
- 第三十、同
- 第三十一、同
- 第三十二、同

白島ノ海蝕  
 松島水道ヨリ沖白島ヲ望ム  
 壽山崖ト不老濱  
 白色ノ岩島(板狀流紋岩)ガ節理面カラ波蝕ヲ受ケテ分解セル有様  
 重栖港内辨天島ヨリ黒曜石ノ絶壁ヲ望ム  
 黒曜石ノ絶壁  
 爆裂口ノ跡  
 壇鏡瀧(雄瀑)ノ全景  
 雄瀧背面ノ絶壁下部  
 断層崖ノ一部「鬼ヶ城」ノ大觀ト金棒岩  
 通天橋(天然石橋)ヲ南方ノ天上界方面ヨリ見ル  
 摩天崖ノ大觀  
 天上界ノ鎧岩ト摩天崖ノ遠望  
 通天橋附近ヨリ天上界ノ外廓一帯ト絶壁  
 天上界ノ小島群  
 「明暗の窟」ト大神ノ立岩  
 波蝕洞窟「矢走の二十六穴」

- 第三十三、同
- 第三十四、同
- 第三十五、同
- 第三十六、隠岐知夫灣
- 第三十七、同
- 第三十八、同
- 第三十九、同
- 第四十、隠岐知夫赤壁
- 第四十一、同
- 第四十二、同
- 第四十三、同

通天橋附近ノ小島群  
 天上界ノ小島群ト大神ノ立岩遠望  
 天上界ノ佛岩  
 「瀨レ谷」ニヨル全景ヲ望ム  
 渡津島及附近海岸一帯  
 渡津島ニ於ケル第三紀層中ノ粗面岩岩脈  
 渡津島ニ於ケル第三紀層  
 断層崖ノ大觀  
 昇龍岩(粗面岩岩脈)ノ上部  
 臥龍岩(断層地塊)  
 昇龍岩下部ト凝灰岩トノ間ニ波蝕セル状態

史

蹟

## 第一 隱岐の排佛

### 甲、概 説

排佛または廢佛毀釋といふことは明治維新の頃諸國に行はれたことであるが、中にも隱岐國の排佛は極端であつて、其國內にある寺院を或は焼き或は毀ち一旦之を無くしてしまつた。

排佛事件の起因を稽へるに遠因としては平安朝時代に佛教が盛んになり、本地垂迹説によつて日本固有の神の信仰を佛教の内に包容したが併し神道固有の精神はなかなか滅するものでない。大智が進み神道が自覺するに至れば終に佛教と分離する。既に分離して對立するに至れば恰も回教人に脅がされたキリスト教徒が十字軍を起したり、蒙古襲來に驚かされた日本人が倭寇に出でたりする如く、矢しく佛教に壓へられた神道が佛教を外來の宗教として攘夷の「御接待」をせよとするは自然の順序である。

僧侶の墮落も一つの原因であらう、勿論すべての僧侶が墮落したといふのでは無い。徳川幕府は支利斯丹宗を嚴禁するため宗門改めといつて日本人としての人格の登録を寺院に任せ、随つて僧侶は其権力を振りまはすことが出来るから、中には我儘も出で、墮落も生じ、世人に擯斥せられる様なこともあつた。

それよりも、隱岐の排佛のはげしかった主な原因はかの隱岐一揆の首謀者等が神職および皇典學者の薰陶を受けた壯士であつたことである。嘉永の頃から我國にて外國船に對する警備を



殿にせねばならぬことになつたが出雲藩では多数の兵士を常に隠岐に駐屯させて置くこと費用多くてむづかしいから隠岐に於いて農兵を組織することにし、文久三年三月十九日農兵の募集令を發し、尊王攘夷の大義を説き、島後に於いて四百八十人の農兵を得た。既に農兵といつて募つて置いて數年の後に、各もとの農業に歸つて専心に働けといつたとて、それが餘憤を漏すことなしにをさまるものでない。

是より先、文久元年二月朝廷より因幡藩主へ次の命令が下つた。

此頃英夷攝海ニ渡來モ難計ニ付大阪海軍當分總督之心得ヲ以凡軍政ニ預リ諸事致差圖候様、猶又手配行届候上者、國許防禦隱岐應援等之儀可心得、且一先致歸國候様被仰出候事

かくて、元治元年四月因幡藩の儒官景山龍藏等其藩命を奉じ、隠岐の島後に渡り、蛸木、西郷等の海岸を調査し地圖をつくつた。其月の十五日に偶々外國船が西郷灣に投錨したが、出雲藩の代官枝元喜左衛門は逡巡して爲す所を辨へなかつたのに、景山が來て援けた爲めに僅かに外人に應接することが出來た。こんなことで出雲藩の役人は島民の信頼を失ふこと甚しく、一方因幡藩士はひそかに島民を唆かす所もあつたらしい。

慶應二年七月出雲藩は隠岐國內の身元確實な青年三十人を選抜し新農兵と稱へ藩より扶持を給し鐵砲操縦の技術を練習させた。農兵は村々の有力者が指揮し、新農兵は出雲藩士によつて教練せられた。

中沼了三の弟子等が上方より歸國するに至り、隠岐の壯士等は尊王攘夷の論に勵まされ、又大

和國十津川の郷士等が文武館に教練せられて禁衛兵となつたことを聞いてこれを羨み、隠岐にも文武館を設置し、鐵砲を下渡しせられる様に出雲藩の郡代に願出でた。最初の願出は慶應三年五月であつて、署名者は島後諸村の壯士七十三人であつた。

郡代山郡宇右衛門は或は壯士等が因幡藩士と結托して出雲藩に抗する武器を得るための口實と見たかも知れぬが、願を却下し、農民は農業に専心する様に諭した。是に於いて壯士等は出雲藩を以つて、徳川家の親藩で因循姑息であるとし、自ら正義黨と稱し、其議にしたがはぬものを因循黨と嘲り、少壯過激のものは漸く狂激な態度を取るに至り、明治元年三月十五日壯士等は上西村横地官三郎宅に同志大會を開き、同日同時に島後の庄屋等は池田村國分寺に庄屋大會を開き、共に郡代打取りを議した。庄屋大會にては上に反抗するの不穩當を論ずるものがあつて議を決するに至らなかつたが、壯士等は終に溫和派を威嚇して郡代追拂ひの議に随はしめ、檄を飛ばせて同志を糾合したれば、來り會したものの三千人に及んだ。そこで壯士等は武器を以て郡代にせまり、隠岐はもと幕府より出雲藩へ預けたものであつたが、今は鎮撫使御飛檄の表にて朝廷御領となつたから、徳川家よりの預り役の支配を受けぬ、よつて出雲藩役人は陣屋を立退かるべしと談判に及んだ。郡代は終に陣屋を明渡したから、あとは壯士等の勝手な世となり、一宮の神職忌部正弘を總指揮役とし、總會所を西郷に置いて公務一切を處理することにした。

出雲藩は此事情を太政官に具申して指揮を請うたれば、明治元年四月十三日太政官から出雲少將への指令に

兼て舊幕より預置し隱岐國の儀當今其藩へ取締向被仰付候事

とあつた。そこで出雲藩は一揆鎮壓の爲め兵士を遣はし陣屋の明渡しを島後の壯士等に談判したけれども壯士等は之に應じなかつたから、明治元年五月十日終に武力によつて陣屋を奪回した。壯士等には死者十四人、負傷八人、氣勢忽ち挫けて潰散してしまつた。

偶々長州藩の軍艦と薩摩藩の軍艦とが奥羽地方の戦争に赴く途中、西郷灣に投錨した。又ひそかに壯士等に聲援する因幡藩士も西郷に到着した。壯士等は是等に哀訴し、是等の藩士は出雲の藩兵を威嚇し、跡の處置を自分等に委せて撤退する様強要した。出雲藩兵は力及ばず出雲へ歸つたので、あとはまた壯士等の世となつた。

明治元年十一月、隱岐國は因幡藩の管轄となり、明治二年二月、隱岐縣が設置せられ、久留米藩の眞木直人が知縣事に任せられた。壯士等は出雲藩に復讐しようと思へども仕方が無く、遂に鬱憤ばらしは寺院へ向けられた。

壯士等はもと神職及び皇典學者によつて指導せられたものであるから、寺院は壓迫せられがちであつた。故に勢出雲藩に訴へて其の保護を受ける様にせねばならぬ。之を壯士等の方から見れば、出雲藩に内通して壯士等の密謀を洩らすものと見える。壯士等の横行の世となり、其の知縣事眞木は壯士に好意を有つてゐたから、その在職中、明治二年三月から同年七月までの間に於いて寺院の破壊は徹底的に行はれた。

太政官は神佛分離のことを達したことはある。明治元年三月二十八日の太政官布告に

中古以來某權現或は牛頭天王之類其外佛語を以て神號に相稱候神社不少候何れも其神社之由緒委細に書付早々可申出候事

一、佛像を以て神體と致候神社は以來相改可申候事

附、本地杯と唱へ佛像を社前に掛或は鰐口、梵鐘、佛具之類差置候分は早々取除き可申事とあり、決して堂宇を毀ちたり佛像佛具を焼き棄てよとは命じてない。故に隱岐の壯士等の排佛の暴舉は混雜の時代に法外なことをなしたものである。明治四年、政府は隱岐の一揆の發頭人横地官三郎を徒刑一年半、忌部正弘を自宅謹慎一箇年、他九名を各百タ、キの刑に處したが、隱岐一揆鎮壓にゆきた出雲藩兵の隊長等も畧同様の刑に處せられてゐるを以て見れば、横地等の罰は寺院破壊のことよりも寧ろ騷擾を起したことが主であつたらう。

概していへば排佛の暴舉は島後に於いて烈しかつたが、島前に於いては土民はさほど出雲藩に敵意をもたず、島後の壯士等に強ひられて其の行動に従つたものであるから、佛像を隠したり、寺院を破壊せずに残し得たものもある。

明治四年正月、島民は盡く神道に歸することになり、公文所に血判狀を出した。是は固より壯士等の強制によることであつて、僧侶は還俗するか、又は追放せられた。

鳥取縣管轄の時には隱岐に於いて僧侶の布教は禁ぜられてあつたが、島根縣管轄となつてから明治十年八月二十七日左の布告があつた。

隱岐國布教の儀に付ては明治七年舊鳥取縣所轄中相達候趣も有之候處、自今僧侶之布教差

許候條此旨隱岐國へ布達候事

そこで明治十二年頃から寺の復興するものや新に説教所の新設せられるものがあつた、尤もその初期には佛教の説教も警官の保護のもとになされた程であつた。昭和十年五月この調査の時、公稱の寺號あるもの知夫郡に七寺、海士郡に七寺、周吉郡に九寺、穩地郡に三寺、合せて二十六寺であつた。其中海士郡の正源寺の如きは本山から寺號を許されてゐて縣の明細帳に漏れてゐる。この外に知夫郡の松養寺、願成寺の如く實際に寺の働きを爲し得ながら未だ再興の公許を得ぬものがある。排佛の時、隱岐人は一旦皆神道に歸したが追々佛教に復するものがある。

乙、各 説

排佛事件の時、寺院にかゝる記録はすべて焼き棄てられたから、今古いことは明瞭でない、若い人々は各自の村にもと、どんな寺があつたかを知らぬものが多い。

以下固有名詞の傍訓は發音の通りとする。

一、知 夫 郡

イ、知 夫 村

願成寺 眞言宗 隱岐古記集には「寺領一石、宇類美の山上にあり」とある。もと本堂は五間四方のも

のであつたが伽藍や仁王門は排佛の時に毀され、寺僧は還俗し千五百圓に値するものを與へられた。本尊はひそかに奥谷豊四郎といふ檀家に隠されて厄を免れ、復舊の後再び本堂に据えた。今は本堂庫裏合棟であつて、いまだ公許の寺號がない。復興計畫中である。

往昔、赤平山、赤ハゲ山ともいふに二つの坊があつて、西の坊を仁夫里坊といひ、東の坊を宇類美坊といつた。願成寺は仁夫里坊の後身といふ。仁夫里坊から宇ガル床に移つた。其の頃のことであらうか。正中元年六月、西坊は一字を建立し、春光寺と稱し、盛んに眞言宗の教法をひろめた。後願成寺山に移り、火災にかゝり、正保二年願成寺山より今の宇大谷に移つた。

ガル床といふ名は明治初年に役場の帳に書かれたもので、其の名を知る人が少い、或は假床の意であらうかともいふ。一般には其處を地藏堂、地方の發音にて俗にヂダーダといふ。ガル床からすこし北へゆけば、今、地藏堂があるといふ。願成寺といふ名は願成寺山へ移つてからの名である。寛文七年の隱州視聽合記に願成寺は海士郡に書いてある。それが誤であるか、或は海士郡の願成寺の名を知夫里の願成寺山へ移して春光寺の後身となつたものか、今わからぬ。中興開山權大僧都法印快善は延寶二年三月二十三日歿した。此寺と宇類美坊の後身といはれる松養寺とは親密な關係がある。願成寺は排佛の時、既に大谷に移つてゐた。

松尾山 松養寺 眞言宗 隱岐古記集には「寺領五斗、郡の北にあり」とある。知夫里の部落より北、願成寺より東にあたり、宇天神原にある。

排佛の時、寺僧は還俗し、本堂は學校に使用するといつて破壊を免れた。本堂は慶應元年の造營

である。鐘樓や仁王門は毀はされた。本尊は野村家(屋號大上)に隠くして災厄を免れ、再興の時之を取り出して本堂に据えた。本尊地藏菩薩の像は地藏本願經にある本式の立像で雲慶の作と云ひ傳へる。

此寺は古の宇類美坊の後身といふ。或時は宇大江の聖田にあつた。山號の松尾山は後醍醐天皇より賜はつたものといつて居れども實は二百數十年前に寺を此處に移した時、其の西に隣りする松尾山の名を取つて山號としたものであらう。中興快意の代に開山の五百年忌、骨寄傳説には赤平にあつたのを今の地に寄せあつめたといふ。惣廻向をやつたところから創立は鎌倉時代の初期であらう。快意の先師快真は元祿七年に歿し其の墓は願成寺にある。快意の次の代の快存は寛延三年四月に歿した。寛文七年の隠州視聽合記には松養寺は海士郡に記され、今在知夫郡と註記してある。快意の時、海士郡にあつた松養寺を知夫里へ移してもとの宇類美坊の後身となつたものであらう。

松養寺の境内、竹名越の峠に文覺上人の墓といはれる五輪塔がある。重ね方は誤つて「火層」の上に「水層」が載せてある。場面は前面一丈、奥行一丈二尺許、石を平に積み上げた高二尺許、其の中にかの五輪塔がある。其の地層は敷きならべた石に隠れてゐる。「明治八年四月吉日奉新建立門學壹字諸願成就所」と記した札は文覺を音によつて充字に門學と書いたものらしいことは他の札によつて知れる。焼火山下にある文覺の窟はこゝより北々東にあつて相對してゐる。松養寺は寺院の務をなしてゐるが、まだ公許の寺號がない。復興計畫中である。

蓮光寺 眞宗 排佛の時本尊は民家に安置してあつて、寺といふ程のものでなかつたから災厄を免れた。

莊樂寺 淨土宗 排佛の時本堂は練兵舎に充てることにして取毀しを免れ、本尊は宇大江の佐藤國吉が隠して燒棄を免れた。創立は正保二年。復興の後本堂桁六間二尺、奥行六間、檀家二百である。

妙經寺 法華宗 是は排佛後に出來たもので、排佛事件に關係は無い。

□、浦 郷 村

大原山常福寺 眞言宗 大字浦之郷にある。隠岐古記集に「寺領二斗五升」とあるが排佛の時寺は毀はされた。寺はもと浦之郷部落より八町許上にあつたが排佛の時解き崩し、本尊の木像は海に投じたが石見國の海岸に流れ著き漁夫に拾ひ上げられた。其の像の裏に大原山常福寺と書いてあつた。

今の常福寺は其の後復興したものであつてもとの末寺の有光寺の建物を運び來つたもので、民家より北にあたる高所にある。本堂庫裏一棟、今は東寺の勤勝院の末寺となり、彌陀不動毘沙門の三尊を本尊とし、檀家は百十戸許となつた。

有光寺 眞言宗 寺領二斗五升常福寺の末寺であつたが、今は無い。

専念寺 淨土宗 大字浦之郷にある。隠岐古記集に高念寺とあるは専念寺の誤であらう。専念寺はもと海岸にあつて挾運社善譽上人哲道和尚(慶長十一年六月十四日歿)の創建であつた。明治

の初には約五百戸の檀家をもつてゐたが、排佛事件の時焼かれた。本尊は檀徒河内柳八といふもの、ひそかに之を自宅に隠し、一室に奉安した。明治十三年、中興第十七世謙譽須忍和尚舊専念寺を復興し、もとの本尊を迎へ、舊檀徒を復歸せしめた。位置は排佛の前とは異り、民家の北の高所にあつて浦之郷二百七十戸許を眼下に見おろす景勝の地である。明治二十四年十二月十日、日本堂を小學校舎に貸與中、失火したが、今は本堂兼庫裏一棟。檀家三百戸許。

赤尾山 福満寺といふ寺が赤之江にあつて排佛前に既に無くなり、赤之江のものは皆専念寺の檀徒であつたが排佛の時から神道となり、今は眞宗となり、そこに説教所がある。

ハ、黒木村

香嶋寺 眞言宗 もと大字宇賀の地、東ガ崎と茂野井との間、香嶋山といふ所にあつたが或は排佛の時よりも前に無くなつたものかも知れぬ、今は全く無い。

願成寺 眞言宗 大字宇賀にあつたが排佛の時毀して今は無い。

観音寺 淨土宗 大字宇賀にあつたが、今は無い。

長尾山飯田寺 淨土宗 大字別府にあつた。隠岐古記集に近年大破としてあるが、後に地福寺と稱し、排佛の時全く毀し、他の寺々と同様に佛像、佛具及び記録等はすべて焼捨てられた。今はもとの檀家の一部分が簸川郡大社町の所讃寺を買ひ取り、其本尊を移し來り、所讃寺といつて之を飯田寺の後身としてゐる。

荒尾山専福寺 眞言宗 大字別府にあつた。排佛の時之を毀した。其の跡は黒木神社の丘の北に

ある鞍部の東側に於いて新道の北側にある。今もこの境内にあつた石塔を寄せ集めて僅かの墓地がつくつてある。猶ほその崖の邊に五輪塔などの破片がある。隠州視聽合記に足利寺とあるものは専福寺の前身と思はれる。明和九年の帳に専福寺の位置を宇道場と記してある。土地の人の發音にては之を「ダーゼ」といふ、今は寺は無い。

専福寺の僧は排佛の時還俗した。今、伊藤清といふ人の家に専福寺の過去帳がある。専福寺にあつた、弘法大師御筆の名號といふものが、今、安藤國太郎の家にある。それに

弘法御筆名號 大樂院累代之什物附屬隠州千福寺者也 寶永二乙酉首夏閏月朔

大樂院第三十代花押

とある。又同家に後醍醐天皇守本尊毘沙門天を版畫にしたものがある。其の上部に

後醍醐天皇守本尊從隠州燒火山從御夢想奉納之尊像也

とある。

堂一字 排佛の時に焼いた。昭和十年、天皇山の北道路の北側の高い所に瑠璃閣を建立した。其記

瑠璃閣に安置する御藥師様はもともと高崎山の坊に安置せられしものなりしが、たまたま明治二年頃、廢佛の暴政の厄に會し、坊の伽藍竝に佛像もろともに焼きつくされんとされし折柄、此御藥師様は勿体なくも、提灯の臺に御乗りになり、空を舞ひ、災禍をのがれ、別府提灯が

峯(チヨーチガミネと發音する)に御避難遊ばされしを、たまたま中吉屋老母が發見し、ひそかに我家に勸請奉安申上げたるものなるが、たまたま美田の久良一靈感により感ずる所あり、陋穢なる在家に奉安するを遺憾とし、茲に堂宇を建立して奉安し、以て洽く衆生に利益を垂れ賜はんことを願ひ奉るまゝに茲に至りしもの也

昭和十年舊三月二十一日

黒木村美田 吉田久良一謹白

とある。

長福寺 眞言宗 安政五年の隱岐古記集に「寺領一石本郷石山の腰にあり」とあるが排佛の時に毀され今は再興してあるが場所はもとの位置とは異なる。

圓藏寺 眞言宗 大字美田にあつたが今は無い。

小山寺 眞言宗 大字美田字小山にあつたが排佛の時に毀され、其地は山崩に遭ひ、今は畑となつてゐる。其前に小學校がある。

道場寺 眞言宗 大字美田にあつたが今は無い。

焼火山雲上寺 眞言宗 大字美田にあつたが排佛の時から焼火神社となつた。

明治二年六月三日壯士五人登山して堅固な唐銅地藏竝に寺の本尊其外石地藏に至るまで一切の佛像を破砕した佛具は取上げとなり、梵鐘も取上げとなつたが是は明治三年非常報知の手當として下渡された。寺僧は還俗し松浦斌といひ、焼火神社の神職となつたから寺の建物は

焼かれずに残つた。また當時の役人に寺の縁者があつた爲めに壯士の來るを豫知することが出来、大切な佛具は森林中に隠すことが出来た。

松浦斌は明治五年十月鳥取縣より大山神社美田八幡宮、高田神社の三社の祠掌及び焼火神社、橋之里神社の二社の社務取扱を命ぜられた。此の人の書き記した「當國一新記」には排佛の當時の状況を記し、明治五年まで書いてある。寺院の僧侶は扶持米にて養はれた中に長福寺、常福寺、清樂寺、峯寺の住僧四人は脱走して京都へ伺に上つたことがいつてある。

## 二、海士郡

### イ、海士村

建興寺 嘉永年間、大字崎に於いて中良家の寄進により建興寺を建てたが、隱岐古記集には「大峯領畑共十二石、山伏」とある。明治二年排佛のとき、崎には建興寺と觀音寺との二箇寺があつたが共に毀して焼かれた。明治四十三年里民大峯神社の社殿を移轉し來つて今日に至る。いまだ公許の寺號は無い。僧は祭の時にのみ來る。

觀音寺 眞言宗 排佛の時毀はされて、今は何も無い。

願誓寺 是は觀音寺の後身であるが眞宗西本願寺派である。本尊は阿彌陀佛、本堂は五間四方。もと渡邊氏の書齋であつたのを同氏が寄附して本堂としたものである。明治十年頃説教所として用ゐられ、明治二十二年に石見國安濃郡吉永村より寺號を移したものである。檀家は約八十。善光寺、淨土宗、もと大字崎にあつたが排佛の時既に無くなつてゐた。

歡喜山 法久寺 大字崎にある。排佛事件より後に出来たもので排佛事件に關係は無い。明治十二年日蓮宗説教所がつくられ、信徒多くなり、官許を得て、大正二年十二月十五日神奈川縣足柄下郡酒匂村にあつた法久寺の寺號を買ひ取つたものである。

峯の地藏堂 排佛の時には無かつたが、今大字崎の本郷より北の方三町餘にある。

多々井の地藏堂 大字崎の本郷より東の方四町に今存する。

熊野山 寶光寺 眞言宗 大字布施にあつた。排佛の時取毀した。跡は畑となつてゐたが、後小い堂を建てた。

長福寺 淨土宗 大字布施の今浦にあつたが排佛の時毀した。

寶珠山 光明寺 眞言宗 大字布施字太井にあつたが排佛の時燒き拂つた。

一心山 蓮生寺 本派本願寺派 大字太井にある。是は排佛事件後、石見國大田町の蓮生寺の寺號と本尊とを住僧と共にこゝに移したものである。

太夫山 清水寺 眞言宗 大字知々井にあつたが排佛の時建物は毀つて燒かれた。本尊は聖觀音の立像で高六尺餘ある。排佛の時之を隠さうと取り出すとき像の手クビと足を毀損した、

それでも災厄を免れて今に存する。眞黒くなつてゐるが大切にすべき像である。こゝにある延命地藏菩薩の石像はもと知々井部落より北七、八町のネンダ(峯ノ堂)にあつたもので、隱岐古記集に「保々美より田畦を西に行き山の尾上に雜樹あり門の前に巨石出で、清水湧て冷々たり門を出て一堂あり則ち清水寺なり」とある。今は復興して知々井の部落にある。

此寺に小野尊俊の位牌がある。表面に  
秋林院殿前宮内大輔從五品殘露盡空  
とあり、裏面には  
延寶六戊午十月二日 雲州日御碕檢校  
寶永二年乙酉日御碕上官日置肥富御渡海ニ而新小社造立則尊俊靈神號  
とある。尊俊は驕侈の故を以つて隱岐へ流されたものである。小祠は後鳥羽院御火葬場の近くにたて、此位牌はもと源福寺にあつたが排佛の後清水寺に移した。

長尾山 峯寺 隱岐古記集には「眞言宗山伏とあるが排佛の時毀されて今は無い。北野神社より東北にあたる高所にあつた。是が所謂ネンダ(峯之堂)であつたらう。

西福寺 眞言宗 知々井部落にあつたが排佛の時毀されて今は無い。  
藤田山 幸福寺 眞言宗 是は源福寺の末寺で、大字豊田にあつたが排佛の時毀されて今は無い。

松尾山 金光寺 大字豊田にあつた。古昔、承和四年小野篁が謫居した寺であつて、篁が刻んだといはれる佛像があつたが排佛のとき燒かれて黒焦となつた。誰の作か問題にならぬ拙作の地藏をいつたものか。寺は今無い。

堂一字 大字豊田にあつた。今、堂は無い。  
高尾山 徳正寺 眞言宗 大字宇津賀にあつた。隱岐古記集に源勝寺とあるは或はこの徳正寺

の誤であらう。天保四年書寫の隱州風土記に源勝寺の名は無く、徳正寺がある。徳正寺は眞言宗古義派で源福寺の末寺であつたが排佛の時に毀された。再興のものは明治十四、五年の頃最明寺へ合併し最明寺へ移した。

最明寺 淨土宗 大字宇都賀にある。堂宇は排佛の時殘され、後に學校として使用した。明治二十年過ぎまで現今の位置より少し上にあつた。

堂一字 宇都賀に今は無い。

勝田山 源福寺 大字海士にある。隱岐古記集に「眞言宗寺領二十石、本郷より良の方、田園畦路を分過れば三町にして山下に至る。寺家堤坊來迎坊、二王門あり」とある。是は後鳥羽上皇の行在所で有名であるが排佛の時取毀し、仁王門や後鳥羽上皇の御手作といはれた仁王像も共に焼き棄てられた。今はもとの境内にあつた御火葬場と共に其跡が保存せられてある。今もとの地より西の方四町許に源福寺を復興したが、もとの規模は無い。

富春山 安國寺 大字海士にあつた。隱岐古記集に「眞言宗寺領三石」とある。後村上天皇の勅により日本六十六國に各一寺づゝ建立になつたものといつてあれども恐らくは足利尊氏の命によつて建立したものであらう。排佛の時取毀し、佛像は焼いたが、明治二十三年二月再興許可となり、字里に新に建て、昭和八年に排佛前の位置に新築してそこに移轉した。

最勝寺 眞言宗 大字海士にあつたが今無い。是は排佛の時よりも前に無くなつたものであらう。

極樂寺 淨土宗 大字海士にあつたが今は無い。

神光寺 淨土宗 大字海士東の天神原にあつたが排佛の時毀されて、今は無い。

日照山 正源寺 眞宗本願寺派 大字海士、字東にある。古くは蓮光寺といつた。隱州視聽合記に

海士郡の蓮光寺に本願寺徒改云正源寺と註記してある。明治二十年六月十八日、日照山正源寺と本山より寺號を許された。然るに縣の明細帳に載せてない。本堂は桁三間、奥行六間。本尊は阿彌陀如來である。

神宮寺 隱岐古記集に天臺宗とあり、大字海士、字西に眞言宗の寺であつたが今は無い。

峯の地藏堂 海士本郷より北へ六町、字北分の内峯の堂。ネンダと俗に發音するにあつて、地藏の像は後鳥羽上皇の御作といひ傳へて居るが頭の方は完全であるけれども下部は毀損せられた。同じく峯の地藏といつても知々井の石地藏とは別である。

教開寺 是は大字海士、北分の民家外れにある堂であつたが今は無い。弘法大師御作といはれた本尊も今は無い。

寶幢院 眞言宗 大字福井にあつたが排佛の時毀されて今無い。

常福寺 淨土宗 大字福井にあつたが排佛の時毀されて今無い。

三、周吉郡

イ、西郷町

金峯山 藏王權現 西郷の民家より南々東海を隔て、六町山の頂上にあつて地藏院持であつ





六條御殿御掛所
日照山大聽院
蓮光寺
引替所

(印)

御掛所は別院の意である。

かく西郷の蓮光寺は百文札を出し、隱岐全部に通用し、焼火山の雲上寺は五十文札を出して島前に通用させた。

堂二字 地藏堂と薬師堂とは今無い。

ロ、東郷村

惣藏山 地福寺 禪宗 排佛の時、焼いた。大正年間に、大字東郷字赤地に再興した。

惣藏山は古昔新穀を焼き煙を皇城の方へ送った跡といふ。

大寶山 円通寺 真言宗 排佛の時、毀したものであらう。今は無い。

幡秀山 円福寺 真言宗 排佛の時、毀したものであらう。今は無い。

湯崎山 西光寺 禪宗 今無い。

泉通庵 大字東郷字小田にあつたが排佛の時、毀して今無い。

堂二字 大字東郷にあつたが今無い。

泉養寺 大字飯田にあつたが今無い。

奥谷山 蓮華寺 真言宗 大字津井にあつたが排佛の時、毀したものであらう。今は無い。

寂光寺 真言宗 大字津井にあつたが今は無い。

松尾山 安養寺 真言宗 大字犬來にあつたが排佛の時、毀して今は無い。

極樂山 天然寺 淨土宗 大字犬來にあつたが今は無い。

堂二字 大字犬來にあつたが今は無い。

松尾山 円福寺 淨土宗 大字釜にあつたが安政年間に「大破、天然寺持にて堂となる」とあるから、寺としては排佛前に既に無くなつたと見える。今は堂も無い。

善名寺 真言宗 大字大久にあつたが排佛の時、毀されたと見え、明治二年十月調査には「農民住居」とある。庫裏を残したものが、今は無い。

海全寺 禪宗 大字大久にあつたが排佛のとき、住僧は放逐せられたと見え、「無住破損」とあつたが、明治三十九年再興した。

ハ、布施村

信樂寺 淨土宗 大字卯敷にあつたが排佛の時、寺は佛像佛具、記録と共に焼かれ、敷地はそのまゝになつて居るが、村民は之を耕地とすることを憚かつて居る。村民は全部、大社教に属したが、近來少しづつ、佛教に歸するものがある。

ニ、中村

元谷山 建福寺 禪宗 大字元屋にあつて、隱岐古記集に「寺領三石」とある。排佛の時、毀された。跡には天保六年の「三光國師塔」と刻した開山の石碑がある。昭和九年五月、堂を建て、建福寺と私稱して居る。

振鈴山 常樂寺 眞言宗 大字中村にあつて護國寺の末寺であつた。隱岐古記集には「寺領二石、堂に三大佛あり」とあるが排佛の時皆焼いて灰にしたと見え、今寺も佛像も無い。

信光寺 淨土宗 大字中村にあつたが今、全く無い。  
西明寺 眞言宗 大字湊にあつた。本尊は焼き棄て、住僧は還俗して民籍に入り、寺の建物は残されて今は民家となつ居る。

眞常院 禪宗 大字湊にあつたが排佛の時には既に無くなつて居た。  
松尾山 永久寺 禪宗 大字西村にあつたが、今何も無い。

石山堂 大字西村にあつたが今無い。

木、中、條、村

魔<sup>マ</sup>尾<sup>ニ</sup>山<sup>シ</sup> 大<sup>ダイ</sup>満<sup>マン</sup>寺<sup>ジ</sup> 禪宗 大字有木にあつて、隱岐古記集に「寺領十石本堂僧坊鐘樓あり」とあるが本堂も庫裏も残された。無住となり居りしが再興して大正十年頃に草葺を瓦葺となす。後焼亡して堂舎は無くなつた。住僧は今、有木部落に居る。

日輪寺 禪宗 大字有木にあつたが排佛のとき住僧は還俗民籍に入り、今、寺は無い。  
龜尾山 大光寺 眞言宗 字大光寺にあつたが、排佛の時建物のまゝ一切を焼き拂つた。

野中山 尼寺 眞言宗 字尼寺山にあつたが、明治二年の調査に「數十年來無住にて墮廢同様」と書いてある。是は排佛の時より前に無くなつたと見える。

禪尾山 國分寺 眞言宗 大字池田にある。是は紛れもない有名な寺である。隱岐古記集に「昔六

坊在り、所謂大乘坊、本藏坊、安樂坊、玉藏坊、大樂坊、岸本坊、今は一坊あり。五年に一度、蓮華といふ祭あり。六月晦日なり、西郷組一統懸り」とある。明治二年の調査に「眞言宗本寺構營頗る大、然れども無住破壊荒蕪とある。調査者等が破壊荒蕪にして置いて、おのづから荒蕪に歸した様に記したものである。

明治二年の排佛の前にはカヤ葺であつたといふ、其時之を取り崩してしまつた。佛像、佛具は焼かれたが、本尊と薬師佛不動明王、延命地藏、脇士の毘沙門天、觀音、大般若經、行法の式の次第書、藤原時代の面等は隠して残つた。明治十二年六月諸時に先つて復興、今本堂庫裏合棟、眞言宗東寺の末寺で中本寺である。妙光寺を末寺とする。

瑞麟山 護國寺 禪宗 字八田にあつて、隱岐國曹洞宗の惣録であつた。隱岐古記集には「寺領八石、爲清代々の牌所なり古は護獨寺といふ」とある。護獨寺の時には下西にあつた。排佛の時、建物のまゝに一切を焼いた。今は再興して大字原田字齋宮にある。

小谷山 神宮寺 眞言宗 もと大字原田にあつたが排佛の時には既に無かつた。  
銚子山 妙光寺 眞言宗 大字原田にあつた。排佛の時本尊は若林廣七によつて隠され、寺は廢寺として百姓居住となつたが、明治十二年頃復興し、位置を變へ、今は字田頭にある。

千福寺 眞言宗 大字原田にあつたが、多分排佛前に既に無くなつて居たらう。

正慶庵 大字原田にあつたが今は無い。

林上山 伴桂寺 禪宗 大字上西にあつたが排佛の時破壊した。

雨來山 西蓮寺 真言宗 大字上西にあつたが今は無い。  
 元曆寺 真言宗 大字上西にあつたが今は無い、或は排佛前に既に無くなつて居たかも知れぬ。  
 堂一字 大字上西にあつたが今無い。  
 清雲山 東養寺 禪宗 大字平にあつたが排佛の時住僧は還俗して、寺は今無い。

へ、磯村

長久山 妙福寺 法華宗 大字下西にあつたが排佛の時無住、百姓居住となつた、寺は今無い。  
 堂一字 大字下西にあつたが今無い。  
 白華山 觀音寺 禪宗 大字西田にあつたが排佛の時毀して今は無い。  
 堂二字 字西田にあつたが今無い。  
 飯尾山 完全寺 禪宗 大字今津にあつたが排佛の時破壊した。  
 松谷山 淨蓮寺 淨土宗 大字箕浦にあつたが今無い。  
 西蓮寺 淨土宗 大字箕浦にあつたが排佛前に無くなつて居たらう。  
 東福寺 淨土宗 大字加茂にあつたが排佛の時無住となり、今無い。

四、穩地郡

イ、都万村

潮音山 光明寺 淨土宗 字蛸木にあつたが今無い。  
 海照山 安樂寺 真言宗 字蛸木にあつたが今無い。

峯尾山法正寺 真言宗 大字津戸にあつた、隱岐古記集に清正寺とあるは法正寺の誤であらう。

排佛當時の調査に「無住原由不知、近來修理も無之、坊舎荒壞」とある、今無い。

丸尾山法恩寺 淨土宗 大字津戸にあつたが、今無い、排佛の時毀したものであらう。

堂一字 今無い。

繁瀧山千光寺 真言宗 大字都万にあつたが排佛の時毀した、住僧は還俗し、民籍に編入、本尊千

手觀音は雲慶作といはれてあつたが焼かれたらう、今、仁王門の礎石が残るばかりで、建物は無い。

田滿山地福寺 淨土宗 もと、大字都万にあつて、本尊阿彌陀佛は安阿彌の作といはれた、排佛の

時、住僧は還俗、民籍に編入せられた、大正年間に復興し、欣乘院と名づけ、淨土宗知恩院末である。

道成寺 大字都万にあつたが排佛の時毀した。

正樂寺 大字都万にあつたが排佛の時毀した。

松尾山光山寺 真言宗 大字那久にあつたが排佛の時毀した。

永福寺 真言宗 大字那久にあつたが今無い。

地福寺 真言宗 大字那久にあつたが今無い。

源成寺 淨土宗 大字那久にあつたが今無い。

長福寺 淨土宗 大字那久にあつたが今無い。

瑞泉寺 真言宗 大字油井にあつたが今無い。

松林庵 真言宗 大字油井にあつたが今無い。  
堂一字 今無い。

□、五箇村

五箇村は排佛の本場といつてもよい。

藏谷山禪静寺 天臺宗 大字南方にあつたが排佛の時破壊し、本尊地藏菩薩雲慶作といつて居たものも焼かれたらう。今は何も無い。

願成寺 真言宗 大字南方にあつた、今は無い。

岩尾山苗圃寺 真言宗 大字苗代田にあつた、排佛の時破壊した。

堂二字 大字那久路にあつたが今無い。

藏福山願満寺 真言宗 大字都万路にある。もと、本尊は千手観音と薬師如来で盛大な寺であつた。古は藤本坊寶壽坊成就坊吉祥坊東光坊があつたが、排佛の時毀はして焼いた。大正の終に復興した。

西雲山淨土寺 淨土宗 大字小路にある。排佛の時に毀され、大正の終に復興した。

松尾山幸福寺 真言宗 大字郡にあつたが排佛の時毀はされ、今は無い。

堂一字 大字郡にあつたが、今は無い。

長谷山報恩寺 大字山田にあつた。排佛の時毀はされ、今は無い。

竹林寺 真言宗 大字山田にあつたが、今は無い。

東福寺 真言宗 大字山田にあつたが、今は無い。

高源庵 大字山田にあつたが、今は無い。

堂一字 大字一宮にあつた。隠岐古記集に「古は極樂寺といふ今は堂となる」とあるが排佛の時毀してしまつた。

岩瀧山横山寺 真言宗 大字北方にあつたが、排佛の時全部を毀し、住僧は還俗した。本堂の左に

「岩瀧山」と銘を鐫た鐘があつたが今は是も無い。

満泉寺 禪宗 大字北方にあつたが、排佛の時毀した。

長福寺 真言宗 大字北方にあつたが、排佛の時建物は毀はし、住僧は還俗させられた。

堂一字 大字代にあつたが今は無い。

久養寺 禪宗 大字久見にあつたが、排佛の時毀はされた。

## 第一 隱岐布施海岸

### 一、位置及地域

島後布施村中心部落の北端から東へ突出した崎山岬の中、隱岐片麻岩の露出する東側に於て半島を横ぎり、之れが尖端までと、附近の諸島嶼を含む地域である。

### 二、交通

西郷町から東郷村を経て、現地に達する縣道もあるけれども、地質に由来して地勢上道路に屈曲が多く、又必しも平坦でないから、寧ろ海路發動船によるが便利である。

### 三、地質及地貌の概畧

隱岐島後の所謂基盤の中、地質時代に就て議論のある隱岐片麻岩は、輝石安山岩の迸發により、甚しく變質作用を受けて、恰も角礫岩のやうに粉碎せられ、安山岩自體も亦接觸部に於ては變質し、且珪酸分を増して堅牢な絶壁を現はするのである。そして其下には第三紀層が露出して殆ど水平層を爲し、凝灰岩、頁岩、及砂岩の累層であるが、頁岩の中から植物化石を産出する。依て安山岩は之れより後期のものであるは明である。然るに更に之れを被覆するは玄武岩で、柱狀節理は著しく發達する。

附近の島嶼には、突角の北側に長島、東側には大黒島、小峯島等が羅列する。そして長島は輝石安

山岩から成り、赤褐色の低い島であるが、之れに反して小峯島はアルカリ石英粗面岩に屬し、二體を爲すのであるが、共に槍を立てたやうに突兀として尖り、標高は二島の中、沖なるは六〇米、他の一は實に七〇米のものである。そして其中間に水道が通り、小形の船を通ずる。之れが内側に低く横はるは、大黒島と小黒島である。そして前者は輝石安山岩であり、黒褐色の島体には柱狀節理が發達した部分もある。後者の色彩は全じいけれども、熔岩式安山岩質集塊岩である。之れ等の島々を東郷村に屬する黒島と比べるならば、東郷のものは柱狀節理が特に雄大で、相揃ふて竝立する状態が、古代洋式の城壁のやうで頗る壯觀を呈する。之れに對して、この地の大小黒島が全く大觀を異にするは、岩石の種類そのものに依るのである。要は狭い地域にいろ／＼の岩石があり、各岩石は固有の色彩を保つにより、之れを粉飾する松樹の植物景觀と相俟つて、誠に好い光景を爲すのである。殊に半島の南にある松島は安山岩であるが、アルカリ粗面岩の岩脈を通じ、學術的に意義が多く、配置も亦宜しきを得て好い光景を呈する。

#### 四、保存の必要

布施村及之れに接續する中村の南東部地域は、地質上岩石の種類に富み、各種相互の時代關係等を見るには、全隱岐を通じて最も注意すべき地域と認めねばならぬ。依て今後とも學徒の研究資料を採集するに満足を興ふると共に、本地域の如く比較的纏つた狭い地域に於ては、活きた自然の標本として保存せねばならぬ。況や各岩石固有の構造や、性質とによつて特殊の風光を呈し、見

るべきものが多いから、名勝たるの價値充分である。

#### 五、保護上の注意

石材を採取せぬこと、樹木の伐採を禁ずることである。猶將來道路の改修を爲す場合あるも、前記の地域だけは、現状の儘保存することが絶対必要である。

## 第二 隱岐海苔田ノ鼻

### 一、位置及地域

島後中村の東北海岸海苔田鼻と、中間に中村灣を擁し、之れと相並んで、北東の方向に突出する崎山岬や、附近の島嶼を含む地域である。之れが中間に於て、海岸に聚落のある部分は、將來地上物件に異動を免れざるべきを察し、保護區域から除外するを妥當と信ずる。

### 二、交通

別稿「布施の海岸」と同じく海路發動船によつて、現地に達するが最も便利である。陸路から行くならば西郷町から自動車により中條村銚子まで進み、徒歩で時張山を過ぎり、現地に達するには約四時間を要する。

### 三、地域及地貌の概略

海苔田鼻は、第三紀層上に於て、アルカリ粗面岩が迸發し、熔岩流として地形を作つたものである。そして更に玄武岩が宇元屋附近から、此地域にまで連續して被覆したものが斷層や一般分解作用の爲め、切れくとなり、現在見る通り斑紋狀に存するのである。

之れが基盤を爲す第三紀層は、砂岩頁岩及凝灰岩の累層であり、頁岩の中からは植物化石を、又砂質凝灰岩の中からは、二枚貝の化石を産出する。粗面岩の中でも、半島の中程から突角までは、概



して大形の柱状節理を爲し、岩柱が陸上に又汀線附近に竝立する光景は、全隠岐中に於て求めても他に見られぬことである。玄武岩の現出に就ては、半島の基部下元屋シモグレンヤにあるは柱状節理が偉大であり、絶壁を作つて高さは約一〇〇米、地元の人々は之れを三水崖ミヅノイといふのである。三水といふは昔崖下に住居した庄屋某の屋號であり、崖といふは断崖の意である。

海苔田鼻附近にある島嶼及岩礁中特に奇態を以て鳴るは、鎧岩と兜岩とである。そして前者は半島との中間に於て、粗面岩や玄武岩の岩柱が脱離した爲め、海上から見て島の形に見えるのである。之れが位置は、俗稱から「の」突出に遮られて、道路上からは見えぬ。高さは約八〇米、粗面岩の凹が恰も壺のやうにあつた部分に於て、漸つた玄武岩の熔岩が凝固する時、冷却面に直角の向きに節理を爲したので、放斜状を爲すのである。之れを半島の高地から見れば、稍扁平で恰も槍の穂先きのやうである。寫真としたのは、半島の一高地中、畧同一標高の處で足場を求めたものである。所謂鎧島の上部には、磯馴松が幾本も奇態を爲して、景趣を添へるのは著しいことである。

此處から程遠からぬ高地に兜岩がある。成因は前者と同様であるが、全軀が少しく横に張り、頭が低くて圓く出来たものであつて、柱状節理の放斜状も亦同断である。その下には断層による割目があるから、海蝕が大に加はり、下にある粗面岩の部分を壊し去り、新に洞窟を作つたのである。現在洞窟の前後と天井には、之れが跡を遺し、大自然の偉大な力を物語るものである。之れを俗に「倭神のドボンコ」といふは、波浪が洞穴の一侧に衝き當る響きをいふのであるが、兜岩の真下に於て、斯る洞穴を見るのであるから、神秘的の意味を加へた命名であらう。現在船を通じ得るのみなら

ず之れを潜つて半島の背面に出で、岩石を攀ちて前記撮影の場所に達し得られる。依て洞門の稍不完全なものともいふべきである。

琴島といふは、海苔田鼻の突角から、少し離れてある粗面岩の島である。形が平いといふで命名したのである。柱状節理が著しく發達し、形よく揃ふてゐるのであるが、恐らくは上に玄武岩が被覆してあつたのが、後から脱離したのではあるまいかと察しられる。

中村灣の北に突出するは、崎山鼻である。粗面岩から成り立ち、下に基盤を爲す第三紀層を被ふのである。第三紀層中の頁岩は、粗面岩の迸發により接觸變質作用を受けて、中に含まれた炭質物は殆ど石墨状となり、俗に「ボタズミ」といふ粉末状のものとなつてゐる。此處の洞穴は小濱の窟と稱し、入口の廣さは左右は四五米、高さは僅に一六米であるけれども、内部は意外に廣く、燭火によつて進み得る。之れが成因を考察する時は、前記接觸變質の部から海水の浸蝕を受けて、洞窟を作り、後の地盤隆起によつて現在のやうに爲つたものである。それは所謂「ボタズミ」の産出する筋合を辿つて、窟の奥に行かれると、窟内の側壁に隆起の證據たるべき波浪の跡を遺すからのことである。

岬の突端を離れて、烏帽子島、龜島及釜島の三島が羅列する。いづれも海蝕や波浪の機械的作用を受けて、半島から離れたもので、更に柱状節理から岩石の柱状體が脱却して、特異の奇形を呈するのである。

海苔田鼻と崎山鼻との中間に於て、海上から眼を放つて背景を眺める時は、北東は渺々たる日

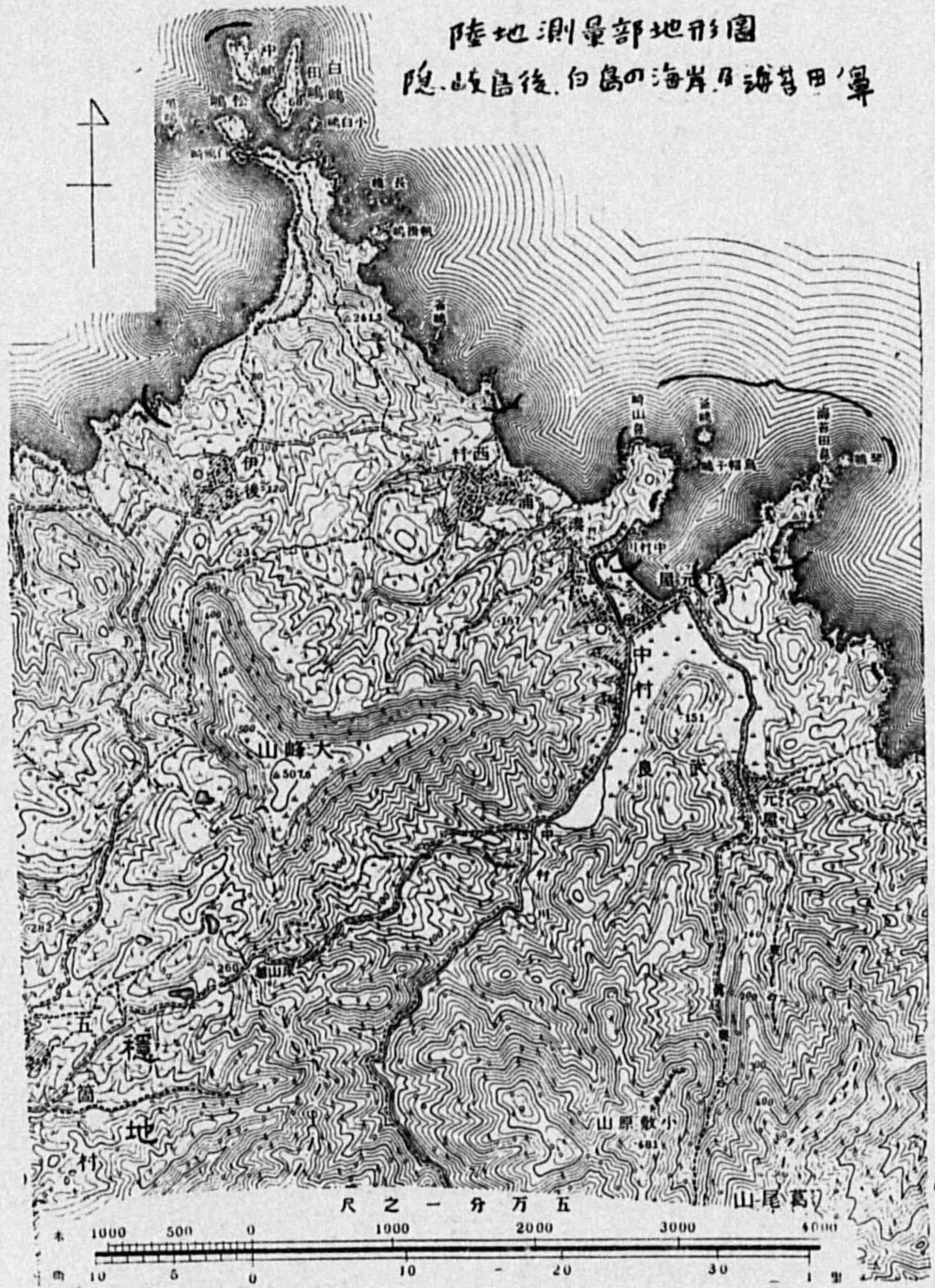
本海であるが、真西から稍南にかけて、玄武岩の雄大な岩臺を爲す大峯山が、如實に特色を著して、本地域を壓するものゝあるやうに見える。之れによつて少しく被覆せられた房後山（オホノサキ）は、輝石安山岩であるが爲め、山勢は稍急に植物景觀も亦一變するは當然の歸結である。海岸の道路を隔て、最も近く下元屋（シモグツヤ）を瞰下する位置にあるは向山である。之れが形狀は恰も乳房山のやうに見えるけれども、前記三水崖と全様に玄武岩が柱狀節理から壞れた結果に外ならぬ。南に當り群山を抜いて奇抜な山勢を現はすは標高六〇〇米の葛尾山（ツクラノサキ）で、流紋岩の特性として峻峻を極めるのである。要するに遠近の山々は各特色ある山形を保つて相競ふものゝやうに見え、背景としては充分である。

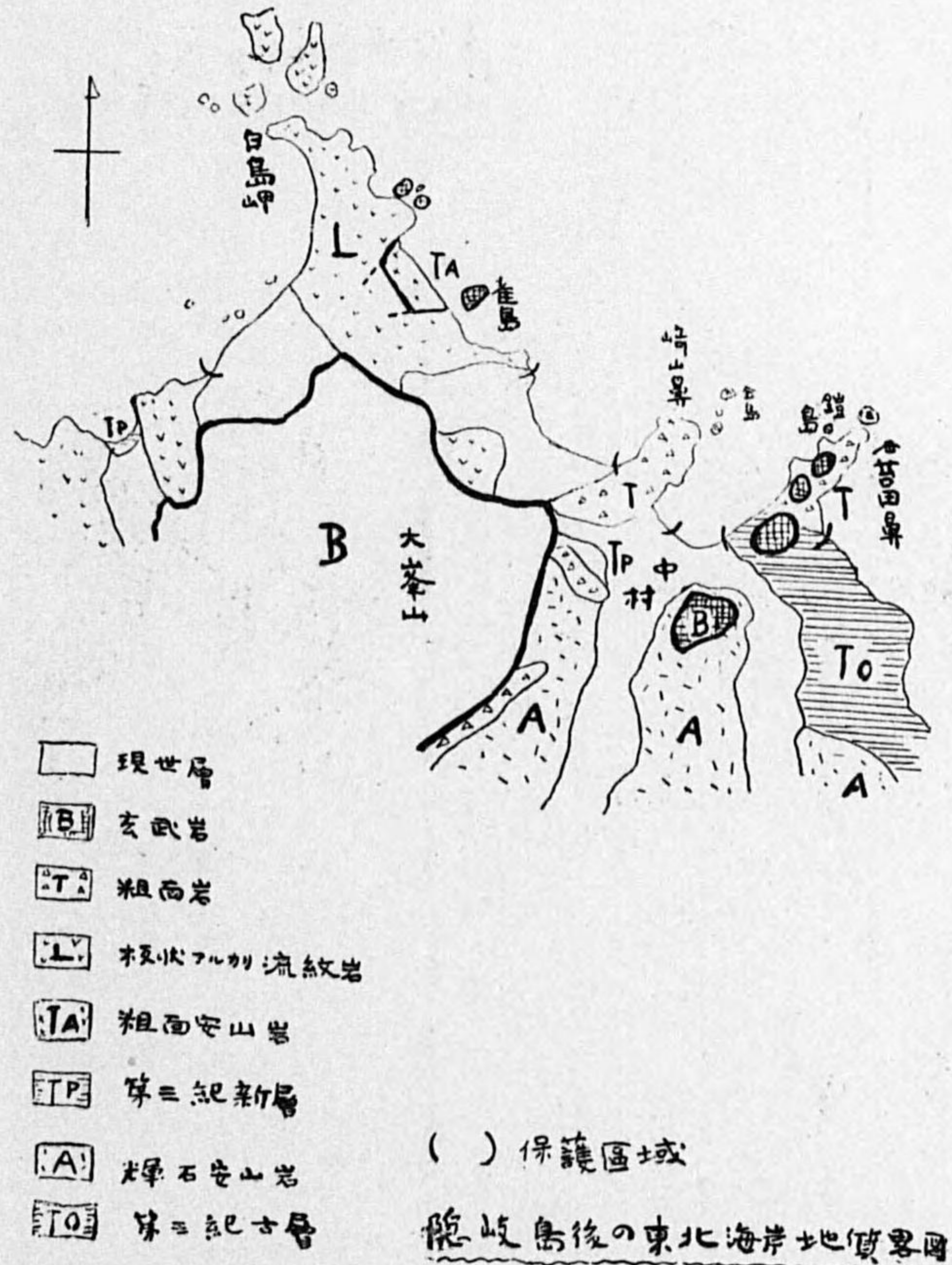
#### 四、保存の必要

海苔田ノ鼻は、學術上意義の多い資料に富み、殊に天然紀念物として保護すべきものがあり、全時に景勝の地域であるから名勝として保存すべきものと信ずる。

#### 五、保存の方法

岩石を破壊せぬこと、樹木の伐採を禁すべきことである。現在海苔田鼻の尖端部に近く狭い場所に於て、牧畑の行はれてゐるのは、何等支障の無いことであるけれども、若し牧草の發育を促す目的を以て、邊りの松樹を濫伐するならば、小利を見て大計を誤るものであるから、注意すべきであらねばならぬ。況や土地の保存上からいふも必要であるにより、誤解なきを肝要とする。





### 第三 隱岐白島海岸

#### 一、位置及地域

從來一般の人々が景勝の地、白島といふは島後の最北端白島岬附近の一局部を稱するのである。然るに此處に指定を目標としていふ表題の地域は、中村の大字西村に於て、一突角笠崎といふのが岩石に特色あるにより、之れを區域の南部境界とし、北は所謂白島を経て、同村大字伊後の現世層の西端までを限定し、海岸の一帶と諸島嶼をいふのである。

#### 二、交通

島後の最北端に偏するにより、陸上の交通殊に海岸部は甚だ不便であるから、海路によるの外は無い。然るに此方面の海上は、例年晩春の頃から仲秋までを除くの外概して風浪の妨げが多く、本土からの遊覧者が甚だ少いのは遺憾である。

#### 三、地質及地貌の概畧

地域の南端笠崎は、板状流紋岩である。熔岩として迸發した時、性質上粘稠のものであるにもかゝらず、波状に屈曲すること甚しくあつて、白色部と黒色との交互に偏ることや、蜿蜒たること、餘りに大規模であることは驚くの外は無い。

屏風岩といふには、洞門が三ヶ處もあり、岩石はアルカリ粗面安山岩であるから、赤褐色を呈し、

特殊の光景である。そして薄層の凝灰岩を夾んで、板状流紋岩に被覆せられるから、學術上からいふも意義の多いことである。

雀島、帆掛島及長島等は皆玄武岩で就中長島に對する沿岸には板状流紋岩を貫いて迸發した部分も見え、又廣く被覆することもよく分る。帆掛島に對する部分も亦全斷である。要するに附近に於ける玄武岩と共に、獨立的に一小區域に於て、火山的活動を爲したものである。

狹義の所謂白島といふのは板状流紋岩が特に海からの風波を受けて變質し、白く見えるからのことである。そして板状節理を爲すのであるから、各硬質部の中間は、浸蝕を受けて切れ込み海岸にも各島嶼にも、岩石面には異様の觀を呈する。偶々此部に洞穴や洞門を生成した場合には、取り残された岩柱は、象の鼻や足にも似て居るから、之れによつて命名せられた處もある。

附近にある龜島、松島、田島、沖ノ島、其他數々の島嶼、岩礁等は皆特異の外形を保ち、總じて豪壯の風景を爲すと共に、繊細の織り込みをも併せて具備するは、誠に得難い光景である。加之松樹が能く繁茂して、之れに景趣を添へるのは、將に天下の名勝地たるに背かぬ地域といふべきである。之れが成因としては、斷層に附隨した出來事、即ち斷層の動きと海蝕とであると信ずる。

寫真に撮つた松島の水道から西へ廻ると、流紋岩の絶壁が続くのである。高さは一〇〇米乃至二〇〇米の斷層崖で延長は一五キロ米許にも及ぶのである。これから西は伊後の濱であるが、之れ又斷層による陥落地帯に外ならぬ。

#### 四、保存の必要

白島の海岸は、板状流紋岩による景勝の地であると共に、安山岩や玄武岩も各所に存し、各特殊の光景を呈する。そして是等の岩石は或は獨立的に、或は斷層と深い關係があつて、學術上意義の多いことであるから、之れを併せて名勝及天然紀念物として保護すべきであると信ずる。

#### 五、保存の方法

岩石の採取と樹木の伐採を禁ずることである。又今後遊覽者の爲め施設を爲す場合には、場面の對照上考慮を加へ、俗化を防ぐことが肝要である。

## 第四 重栖の岩壁

### 一、位置及地域

島後五箇村大字福浦の中、重栖灣頭中央突出部の絶壁を主とし、之れに背景を爲す山々の光景や、絶壁の黒曜石と成因上に關係の深い凝灰岩の部や、又灣頭に突兀たる辨天島等を併せていふのである。

### 二、交通

西郷町から五箇村北方までは自動車の便があり、それから徒歩約二キロ米で重栖灣の沿岸に達し、表題の地域に到達する。但岩壁の大觀を眺め、之れに隨伴する景勝を探らんには、漁船に賃して、灣内を巡り、辨天島の一周を爲すべきである。

### 三、地質及地貌の概略

地質は一般に板狀流紋岩であり、重栖灣の入り口に向つて突出する部分は、特に黒曜石が發達し、數條の層狀構造を爲すのである。岩石の漸移によるものであるから、黒色の條理を現すの外、褐色乃至凝灰岩の混入により、灰色の部分もあつて、質は甚だ不純なものである。道路に沿ふて延長約八〇米に及び、絶壁の高さも亦畧全斷であるが、黒曜石の實在は高さ約六〇米であつて、俗に黒瀧と呼ぶのである。重栖河畔を過ぎ、絶壁の部に達すると、之れが北側には、流紋岩の周縁部を被覆

して玄武岩が迸發し、小形の柱狀節理を爲すを見る。蓋し基盤を爲す第三紀層との接觸部を通じて迸發したものであらう。全村大字久見の字ヤンバラの海岸にも、黒曜石の絶壁があるけれども、大觀は表題のものに劣るのである。以上記載した黒曜石は、共に第三紀凝灰岩の層上を、不整合的に斜に被覆するのであるが、凝灰岩も亦當時爆烈作用の激甚であつたことを物語るもので、熔岩の迸發する前奏曲である。

彼の古來隠岐の馬蹄石といはれた純黒の黒曜石は、東郷村の津井の池附近に於て、流紋岩質凝灰岩の中から、角礫又は圓礫として産するのであるが、近來噸に稀であるといふ。表題の地に於ける凝灰岩中にも少しく混入するを認めるけれども小破片のみである。

舊時は海岸に沿ひ、凝灰岩を削つて通路を作つたのであるが、冬季海上から襲來する風浪に對して、危険であるから、近頃新に舊道に平行して、隧道式に作ることに一四〇米通路が曲つてゐるから、二ヶ處に明り窓を設け頗る奇觀を呈する。以上に記載した通り海岸には絶壁、背景には奇巖怪石で嶮岨を極め、更に凝灰岩中には技巧を加へて、耶馬溪に於ての洞門のやうに變轉あらしめたことは、對照上趣味の多いことである。

灣内に立つ辨天島は、周圍約六〇〇米高さは八〇米許、全島板狀流紋岩で洞窟もあり、又絶壁の上には松樹が鬱蒼として天日を遮り、對岸の黒曜石による絶壁と共に特異の光景を呈する。

#### 四、保存の必要

本地域は驚嘆すべき黒曜石の絶壁を有するのであるから、天然紀念物の候補地として充分である。然るに之れに隨伴する風景も亦非凡であるから、宜しく名勝天然紀念物として保存すべきであると信ずる。

#### 五、保存の方法

岩石を採取せぬこと、樹木の伐採を禁ずることである。將來道路を改修し、若しくは築港を爲す等のことあるも、現在の風光と天然紀念物に觸れぬ範圍に於て爲すべきことである。



### 第五 油井ノ池

#### 一、位 置

隠岐島後都万村の西海岸、油井の部落附近にある。

#### 二、交 通

西郷町から陸路を海岸に沿ふて行くも、可能であるけれども、海路發動船によるが最も便利である。

#### 三、地質及地貌の概略

島後の西部は地質構造上所謂周縁部を爲す板狀流紋岩の地域である。本村と中條村、及五箇村との三ヶ村が相接する部の高地は横尾山で、標高五七三米高い臺地狀地帯中の盟主である。之れから標高約四〇〇米餘の高地が放射狀に延び、其の中最も著しいのは油井ノ池の南東を劃るものである。池の北方に當り、油井の部落との間を限る高地は、之れが支脈であつて、恰も包圍するが如き地形を爲すのである。そして流紋岩が迸發した後、次で熾烈な爆發作用が現在池のある地點を中心として起つたのであるから、東側から南側にかけて、山體が裂け、絶壁を作つたのである。此の光景は現時海上から見ても物凄いことである。船を海岸に繋いで上陸し、瓜先き上りに約六〇米も登ると急に平低の地域となる。高地の裾に沿ふて行くと、暫くにして再び一つの輪廓に達す。

るのであるが、其間には半月形の畑や、濕地が介在し、油井の小池などいふも其一つである。現在は水なく、皺のやうに出来た高地間の命名である。斯くして内側にある輪廓上に達したならば、眼下に表題の池を瞰下し得られる。之れが内側の傾斜面は、摺鉢形で圓く、殆ど模式的のものである。現在には桑畑や麥畑に利用せられ、前期輪廓を爲す高地上の松林帯との對照が頗る面白い。

油井ノ池は稍楕圓形を爲し、少しく南北に長い。周圍は約一〇〇〇米、現在は水を湛える。由來此方面は水田としての耕地に恵まれぬことであるから、池の畔岸に沿ひ近時水田化せしめんと努めつゝあるを見る。然るに最も注意するに値するは、池の中央に於て、更に小形の内廓が存することである。調査の際此處に達することは、不可能であつたけれども、前期水田の部とを劃する爲め「こりやなぎ」の類を植付けてゐる。都万村小學校訓導野津兼茂氏の實測によれば、之れが周りは二八三米であつて、此部の内は水深は底が分らぬといふ程であるから、成因も考察せられる。そして周圍の傾斜地から天水が流れ込み、常に水量が多きに過ぎるにより、外部の池畔から一條の放水路を作り、排水を海の方へ導くのである。

さて油井の部落のある方向に道を取り、麥畑の間を蛇行して、斜面を上り、摺鉢の縁にも譬ふべき輪廓上に達すると、此處には凝灰岩の好露出があり、池の成因を裏記する要所であるを感じられる。

要するに板狀流紋岩々臺の一例が、現在油井ノ池のある部分の爆發に遇ひ、現在見るやうな地貌を形成し、爆烈口の部は池となり、爆發の際岩石の破壊せられた石屑は、池の周りに於て輪廓を

作り、岩石としては凝灰岩を爲すのである。依て油井ノ池は正に「マール」であるは確實と信ずる次第である。

#### 四、保存の必要

油井ノ池は火山學上或は一般地質學乃至地文學上からいふも、意義の多いことである。殊に板狀流紋岩の部に於て之れを見るは、注意すべきであらねばならぬ。依て天然紀念物として保存せられんことを切望する次第である。

#### 五、保存の方法

油井ノ池の内部に於ける水田作業は、現在の程度に止め、中央部は用水の供給と、學術上の意義を保つが爲め、人工を加へぬことである。周圍一帶の松林は、自然の風致を添へ、且降雨の際一時に池の中に水が流れ込むを緩和する必要上、一度に伐採することを禁すべきである。又池の周りの傾斜面を維持して自然の儘保存する必要がある。猶將來附近の通路を改修する場合もあるも、池の外圍を爲す輪廓狀高地は現在の儘として、地貌の變化を爲さしめぬことが肝要である。



## 第六 壇鏡瀧

### 一、位置及地域

島後都万村大字那久にあつて、横尾山(標高五七三米)の山頂から、僅に一三〇〇米許の距離にある。附近の臺地上から流れ来る溪流を聚め、絶壁に懸るのである。之れが地域は瀑布に直接關係ある絶壁と、瀑壺附近及壇鏡神社の境内一帯の地域を限定せんとするものである。

### 二、交通

西郷町から都万村の中心部落を経て登る道と、中條村の原田、皆市等を経て登る通路の二筋があるけれども、西郷町から發動船に乗り、下那久に上陸し、徒歩約四キロ米で、現地に達するが最も便利である。

### 三、地質及地貌の概略

地質は一般に板状流紋岩の部に屬し、周圍一帯の高地は標高三〇〇米乃至四〇〇米の高度を保つ臺地である。そして其間に深い溪谷を爲し、下那久から本地域に達する沿道では、溪谷の壁は概して緩であるけれども、溪の奥に達し行き詰つた本地域に於ては、懸崖を形成し、瀑布の高さは六〇米で此處に懸るのである。

懸崖の下部に就て見ると、流紋岩の下には第三紀層が殆ど水平の層を爲し、前者によつて被覆

せられた境界線も亦同断である。第三紀層は瀑布の落下によりて水蝕を受け、浅い不規則な形に瀑壺を爲すのであるが、寧ろ瀑壺ともいひ難い程である。要するに崖の上の臺地に於て、樹木の繁茂が少く、随つて水源が貧弱で水量の少いことに基因する。元より季節によつては、水量の増すことあるも、平時は絶壁の偉大なのに伴はず、僅に落下するのであるから、瀑布の水は落下の中途空中に於て、雨滴のやうに離散し、下に露出する第三紀層を洗ふのである。即ち之れが絶壁は瀑布によつて形成せられたのではなく、平行裂罅から迸發した流紋岩の隙間である。そして第三紀層は不斷の濕りを受けて、分解してゐる部分があるから、此處に路を作り、遊覽者は段階状の足場を得て、瀑布の背面から、素練を眺め得るのである。之れが爲め空中には常に虹蜺を現し、周圍にある老杉の緑と相俟つて、閑寂の感を催さしめる。以上は雄瀑に就いてのことであるが、崖下の一側には壇鏡神社の鎮座せられるがあり、特に崇巖の氣色が生ずるのである。之れと直交の向きに雌瀑があり、水量は比較的豊であるけれども、崖の傾斜が幾分か緩であるにより、瀑布の水は右に又左に、岩石の節理を辿り、屈曲轉々して流下するから、前者との對照上却て趣味の多いことを感じられる。

#### 四、保存の必要

前記の通り瀑布としては、水量の關係上幾分か不足の感じがあり、又樹木が一層多くて且繁茂するならば、天日を蓋ふて境内が濕めやかであらうといふ氣分を免れぬのであるけれども、壇鏡

瀧は全隱岐島内の神秘境といはれ、舊曆八朔に行はれる神社の臨時大祭には、島民擧つて業を休み蟻行して詣るのであり、信仰の的である。之れが地域を岩石地質學的にいふ時は、意義の多いことであるから、名勝として保護すべきであると考へる。

#### 五、保存の方法

地域内の岩石を破壊し或は採掘せぬこと、樹木の伐採を禁ずることである。否寧ろ積極的に樹木を植え付けて、一層閑寂の感を催さしめるに努むべきである。又瀑布の水は現在にては、他に利用する程のものでは無いけれども、將來崖地上の高い臺地上に植林が盛んに行はれ、水源が涵養せられて、水量が豊富となつたとしても、水力電氣等の事業は、之れを避くべきである。猶神社の境内はいふに及ばず、附近一帯の地域が俗化せぬやうに注意せねばならぬ。

## 第七 隱岐國賀海岸

### 一、位置及地域

一般に國賀といふは隱岐島前浦郷村の西側で外海に面する延長約三キロ米の海岸であるけれども、名勝天然紀念物として區劃すべきは、船曳運河から外海に出た處、即ち行政上では黒木村高崎鼻から浦郷村鯛岬の西端まで、約二五キロ米の間の海岸と、附近の島嶼及岩礁等をいふのである。

### 二、交通

前記の地域は陸上から絶對に行くことが出来ぬのであるから、浦郷か又は黒木村別府で漁船を雇ひ、運河を経て舟行するが最も好いのである。陸上には右の兩地から自動車の便はあるけれども、運河から先きは船によるの外は無い。

### 三、地質及地貌の概略

島前地質の基盤を爲すは、第三紀層であつて頁岩、砂岩及礫岩の累層であり、別稿知夫港内の島津島や黒木村の中別府附近及美田附近等に好露出があつて、貝化石を産出する、之れを貫通して迸發したものが粗面玄武岩で、島後の古期玄武岩に相當し、焼火山や高平山等を除き、他は殆ど總

ての地帯を被覆する。そして更に後からアルカリ粗面岩が迸發し、多くの岩脈を爲して貫き、溢れ出て熔岩流を爲すのである。

國賀の海岸は、南西から北東に走る一大斷層線に相當し、著しい斷層崖を爲すのであるが、前記の地域内に於ても、幾多のアルカリ粗面岩々脈が存し、之れに隨伴して各種の地貌や、風景を構成するは趣味の多いことである。

船曳運河も亦元岩脈のあつた處で、後から自然に分解して、内海と外海との双方から彎入した部位である。斯くて地勢が狹隘且平低であつたから、人爲作業が加つて掘り切つたものである。そして此處を過ぎると間もなく表題の地域に入るのである。

此地にある白鳥といふは、粗面岩の岩脈が海蝕を受けて半は削り取られ、特に波浪の作用を受けて、白く變色した綺麗な島である。

龜島も亦同斷の成因により、粗面岩が波浪の機械的作用を受けて、島體の一部が節理から破壊され、亀が頭を上げたやうな形を爲すといふのである。

國賀風景の主體を爲す偉大な絶壁は間もなく展開する。高さは約一五〇米から、特に高い部分は二〇〇米許と目測せられる。偉大な斷層崖であり、延長約一キロ半も續き、玄武岩の特色として黒褐色乃至後の酸化作用により、赤褐色の部分もある。往々層狀構造も見え、文士の所謂隱岐の赤壁である。島後の白島海岸には松樹が風致を添へるのであるが、此處には一本の小松もなく、之れに代つて海岸性の灌木類と、特殊の草本類が彌が上にも茂り、綠葉と黄花の色彩美は、稀に見る植

物景觀である。大觀は斷層崖による崩巖の峭壁であるけれども、海上から眼を放つ時之れが側面を見透し得る處もある。之れが背面の臺地上は、隱岐の有名な牧畑の本場であつて、多數の牛馬が、放牧せられるも見え、豪壯な風景の側面に、極めて柔和な平和境を見るは、景の對照上名勝の嘆聲を禁することは出来ぬ。

赤壁の正に盡んとする所に赤門といふ天然石橋がある。層狀構造を爲す玄武岩が、海蝕を受けて出来たものである。外に稍不完全な洞門や、洞窟が六ヶ處も並び、岩石の構造と海蝕との關係も首肯せられる。少し崖を隔て、海中に恰も東屋を立てたやうに、四隅に岩柱が残り、下方には互に直交の向きに大きな洞窟を作つて相通じ、殆ど人工の加つたやうなものがある。其他附近には數々の島嶼岩礁等に、奇抜な形象を現すものがあるけれども、未だ命名なく隨つて記載に苦しむ次第である。近く識者の來遊せられるを俟つて、命名の指示を受けるは、獨り地元當局者のみではなく、一般人の渴望する所である。

既に命名せられたものに獅子岩、佛岩、鎧岩などいふ岩礁がある。いづれも奇抜そのものであり、景趣を作ること多大である。

附近の海岸に土壺ドムツボの名あるは、特に岩脈が多く、其中には分解して崩壊したものもあり、自然に低濕の地域を爲すのである。

之れと反對に嶄然として海中に立つは、大神の立岩である。下方には玄武岩が島體を作るのであるが、上には粗面岩が明に境界線を劃して被覆する有様は、島後海苔田鼻に於ける鎧島の奇景

と正に反對の關係である。島といはんよりは寧ろ突兀たる岩柱である。

前記の所謂隱岐の赤壁を半過ぎる頃から、岩壁に多くの岩脈を見るのであるが、岩石はいづれもアルカリ粗面岩であり、小は幅一米に足らぬものから、大なるは實に三米に達するものがある。そして單に一定の幅を保ち、真直に通ずるもの、外斜に走るもの、枝を分つもの、網狀に分れて又再合するもの、層脈を爲すもの或は岩壁に平行して、廣く岩脈の側面を現すものや、或は蜿蜒蛇行するもの等、岩脈の研究を爲すべき自然の教室である。そして玄武岩と相接する部に海蝕が加はり、遂に洞門や洞窟を生成するのである。

地域中南端に近い處に大神の窟といふのがある。西から船を通じて東南の口から抜け出るのである。西側窟の入口の幅は約四米許りであり、高さは約三〇米、洞窟といはんよりは寧ろ玄武岩の裂罅であつて、前期の如く岩脈のあつた跡とは見えぬ。恐らくは斷層に關係ある裂け目ではあるまいかと思はれる。窟内に船を進める時は、水路が少し曲つてゐるから、光線の射入を遮り、全く暗黒界に入るのである。燭火を點するも殆ど効なく、漁夫は手探りで岩壁を辿り、辛うじて難所を過ぎると、突然側方即ち東南の口から、日光の間接に射入するののである。此處に注意に値あるは、東南口へ急角度で曲る部分の成因のことである。即ち西側からの裂罅と直交の向きに、粗面岩の岩脈があり、海蝕を受けて、大に分解し去り、遂に洞窟とまで進展したのである。は、東南口窟の天井に之れを遺すことが、餘りに明瞭であるから、疑ふべき餘地の無いことゝ信ずる。

#### 四、保存の必要

國賀の海岸は粗面玄武岩の地域であるから、地上は臺地型で概して柔和な地貌を爲すも、第三紀末葉の頃斷層崖を生じ、地塊運動によつて、奇抜な島嶼や岩礁を爲したものである。殊にアルカリ粗面岩が幾多の岩脈を爲し、之れに海蝕が加つて洞門洞窟等を作つたのであるから、學術的に見るならば天然紀念物に相當し、又之れから出發して出來た豪壯美の風景は正に天下の名勝地と稱すべき價値が充分である。依つて保存規則により、名勝及天然紀念物として、保護を加へられるやう實施せられんことを望む次第である。

#### 五、保存の方法

前記地域に於て、岩石を破壊せぬことゝ植物景觀を自然に委することである。猶絶壁の上から背面に於て、適當の區域に先づ適當の灌木類を植え、次で其間に松樹を植え込み、漸次松樹をして之れに代らしむべき手段を取ること、一段と光景を添へるのであるから實行すべきである。現在には牧畑であるから、牧草の成育上一見樹木の繁茂を不利とするも、絶壁の上端に沿ひ、相當の幅を保つて植林するは、崖地の危険地帯との中間帯を爲し、背面の傾斜地に對しては、水源の涵養即ち農業地の乾涸を防ぐことゝなり、間接に牧畑作業を有利に導くものである。

## 隱岐國賀海岸「鯛鼻より、老屋崎（三度）」まで

### 一、名稱

國賀海岸指定地域の擴張部

### 二、地籍及地目

地籍、個人の私有地、但し岩壁は之れに伴ふも、實用上の價值なきものとして取扱を受く。

地目、背景畑地の附屬地であるけれども、前記の理由により、地目としては記されぬ。

### 三、位置及交通

浦郷村の背面にある國賀海岸の續きである。鯛鼻から老屋崎までは約一キロメートル、猶斷崖の地域である。依つて陸上との交通は甚だ不充分であり、僅に三度に上陸し、山路赤ノ江を経て、浦郷に到着する小徑と村道があるだけである。そしてその間は約七キロメートルもあるから、遊覽者は全く舟行するの外は無い。依つて發動船により船引運河を通過し、國賀の名勝區域を経て行くか、或は赤灘瀬戸から船を進めるか、若しくは海上靜穩の日を選び、隱岐知夫赤壁を嘆賞し、次で表題の地域に達すべきである。

### 四、地貌及地質の概畧

地質は一斑にアルカリ玄武岩と、その集塊熔岩や同凝灰岩とによつて成立し、別稿隱岐知夫赤壁と同様に一度隆起した後、斷層によつて外海側に迂り落ち、此處に斷層崖を爲したのである。故に國賀の地域と同一成因、同一實在のもので、要するに豪壯にして且奇抜なる光景の續きである。されど地勢は南するに隨つて、幾分か緩和せられ、山頂からの切り落しは、外海側山腹よりの夫れと變り、絶壁の高さも、摩崖の半を保つに過ぎぬ。アルカリ粗面岩の岩脈が多く、それが凝灰岩に接する部分に於て、海蝕が加はり、洞窟の多數を生成したことは特に著しい。中には洞窟の天井から、白い岩脈の一端が見え、蛇行して崖地に登るが如く見えるから、昔の人の嘖に上る等、珍しくないことである。

### 五、保護の必要

表題の地域は、岩脈や洞窟が多く、風景としては國賀に於けると同一であるから、名勝天然紀念物として保護せられるが妥當と信ずる。

### 六、保存の方法

石材の採掘を禁止し、畑地の耕作は、何等の支障なきも、將來不調和的施設を爲さぬことである。

## 第八、隱岐知夫灣

### 一、位置及地域

隱岐島前知夫里島の東部に位し、日本海に南面して彎入する知夫港の一部から、之れと直交の位置にある薄毛灣にかけていふのである。由來海水の浸蝕によつて出來た地域であるから、之れに取り残された島嶼が景の主體を爲すのである。依て之れが區域は薄毛灣の南側と、島津島の低地附近から西へ突出する部分、竝に島嶼一圓を含むのである。

### 二、交通

隱岐各港廻りの汽船によつて、直に知夫港に上陸するか、或は島前の浦郷、別府若しくは菱浦から發動船により、來居に上陸し、徒歩約三キロ米で知夫港に達する。

### 三、地質及地貌の概略

表題の地域に於て、現實に見るべき最下位の基盤は、第三紀鮮新統の地層で、凝灰岩、砂岩、及礫岩等によりて成り、之れを貫いて迸發したのは粗面玄武岩である。之れが好露出を見るは、島津島の北部低地の一側にあり、更に其の上を被覆してアルカリ粗面岩のあるのも、共に同所に於て觀察される。第三紀層の露出は、僅の地域であるが、玄武岩は別稿「國賀の海岸」に於て記載した通り、燒火山一帯の地域を除外して、島前の大體を形成するのであり、又粗面岩は岩脈として迸發し、或は溢

れて熔岩流を爲すのである。此地域に於ける岩脈の方向は、畧南北に走るものと、之れに對して直交に近い方向にあるものとあつて、共に平行して露出する。そして玄武岩に接する部分に於て分解し、陸上に於ては低地や溪谷となり、海中に於ては浸蝕作用を受けて入江を爲し、現在の地形と、地貌を現すに至つたものである。

來居から知夫へ達する通路も前記の理由により、地盤に弱點あるを相して人工作業となつたのである。要は粗面岩の岩脈に由來し、一部は熔岩流を爲すのである。そして玄武岩の裂罅より迸發した好露出は、知夫小學校の前を過ぎ、港の西側に於て民家の盡きる附近の崖に見える。

薄毛灣は、知夫港と灣入の方向が、正に直交の向きに發達するのであるが、前記同斷の理由により、浸蝕の結果である。

附近に散在する島嶼の中、渡り神船島笠島渡津島等は、共に粗面岩の岩脈によつて島體を爲すのであるが、いづれも浸蝕を受けつゝ、現在まで維持し來つた殘骸である。

島津島は、西へ突出する一部分を除くの外は、殆ど玄武岩である。港口にある淺島は、同じく玄武岩であるが、北へ傾斜する面に沿ふて、粗面岩が被覆するやうに見えるけれども、實は岩脈の一侧が僅に残つたものである。そして相接する部分の中、常に海水を受ける所は、著しく浸蝕せられて、縊れる。總じて粗面岩の部は、低くあるから、淺島の名を得たのである。

港外にある神島も亦同斷である。標高が稍高く、兀然として海上に峙つのであるけれども、後の浸蝕作用の爲め、特に粗面熔岩流の大部分が削り去られた結果である。此島にも淺島にも樹木は

無いけれども、島津島や港内の諸島嶼には、松樹が鬱蒼として茂り、靜穩な入江の漣に影を映するは、誠に好い調和であつて、柔和な光景である。要するに、溺れ谷や、突然隆起と松樹の景觀等によつて景の特徴を爲すのである。

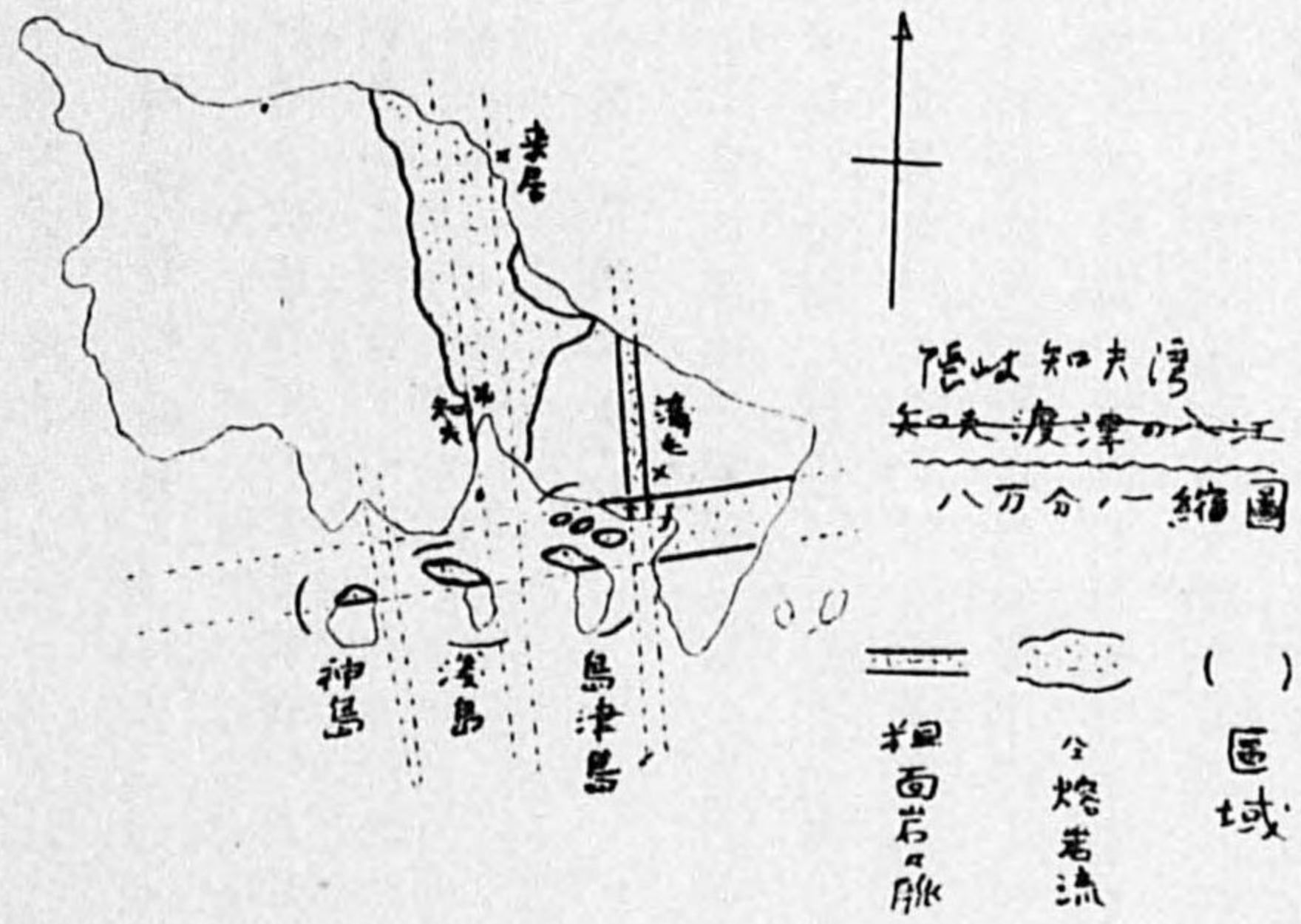
#### 四、保存の必要

本地域は斷層と沈降作用による溺谷の光景であつて、熔岩流や、岩脈の成立と、分解の結果を見るべき天然紀念物に相當するのであるが、之れに隨伴して景勝の地域を形成するのであるから、名勝として保存すべきものと信ずる。

#### 五、保存の方法

本地域内に於ては、樹木の伐採を禁じ、岩石の採掘や地上物件の變動を爲さしめぬことである。附近には著明な史蹟や、傳説に富む所があり、埠頭の鎮守の境内には、水仙や大根の自生地がある。又少し隔つて廣さ二十町歩にも餘る玄武岩の臺地があつて、牧畑の行はれる隠岐隨一の廣場があるから、今後學徒や遊覽者の來遊するもの多きを加へるは、察するに餘りあることである。隨つて將來道路の改修或は築港等實社會に對する施設が行はれるであらう。本地域には之れに觸れて問題となる恐れある部分を、除外したのであるけれども、其他の部分に於ては、宜しく現状を自然の儘に保存すべく注意すべきであらねばならぬ。





### 第九 隱岐知夫赤壁

#### 一、名 稱

隱岐知夫赤壁

#### 二、地籍及地目

地籍、村有地及山脇松若外數名の私有地。  
地目、背景の地域は畑地、絶壁には地目なし。

#### 三、位置及交通

知夫村の西南端立ヶ崎と、赤灘瀬戸に臨む帯ヶ崎との中間断崖の一带を隱岐知夫赤壁と稱する。

既に名勝の指定地となつた知夫灣頭の淺島及神島と、陸上の第一突角長尾鼻や、第二突角の見越鼻等の間に船を進め、断崖の灣と崎とが交互に出入する南海岸に沿ひ、西南端の立ヶ崎から、針路を北に轉じて、表題の地域に達する。所謂隱岐知夫赤壁と稱するは、立ヶ崎から断崖の一部離れ、附近までを稱するも、地學の見地によつて之れを擴め、前記帶ヶ崎に達する三キロメートル餘の海岸を併せて、この名稱を與へ、絶壁の下から順次鑑賞するを妥當と信ずる。そして景の由來を調べ、或は背景を爲す臺地の勝を探らんとするには、南海岸の仁夫から上陸して羊腸たる坂路を登

り、海岸の向きに通ずる小徑を辿つて、斷崖の特に出入する處から、表題の光景を瞰下し、側面觀察を爲すことが可能である。そして懸崖の一例が缺けたといふので名を得た懸崖の後期玄武岩が、柱狀節理を爲すを左に見て、赤禿山に登り展望するならば、四近の大觀を一眸の下に聚め得た好位置たるを知るのである。

#### 四、地貌及地質の概略

由來知夫村は、アルカリ玄武岩及同質凝灰岩から成るは、西ノ島の浦鄉村と同斷である。そして東半出入の多い部分と、西半の臺地狀の部分とに分れる。地層の向きは元より部分的に多少の相違を見るも、表題地域中の「離レ」に於て測る時は、走向北二〇度東、傾斜は東東南へ約二〇度である。前記の神島や南海岸の汀線附近に於ても、畧同様であるから、木村地帯の一般として考へられる。故に表題の地域に於ては、地盤が大に隆起した後彼の浦鄉村國賀の海岸と同様に、斷層によつて迂り落ちた後の光景であるは確實である。斯くて斷層崖の相續く間に於て、特に絶壁の高い部分、即ち懸崖の部や、立ヶ峯及その續きの鷲ヶ尾等に於ては、後期進出のアルカリ玄武岩が、赤禿山を爲す粗面安山岩質玄武岩の一部分を被覆して、柱狀節理を爲すのであるが、既にその大部分は分解又は崩壊して、現在は僅に殘壘を存するのみである。然かも猶幼年の光景を保ち、海岸性灌木類の繁茂と共に特異の景觀を呈するにより、海上より見上げるならば、彼の國賀の「鬼ヶ城」に彷彿する感じを與へる。高さは約一五〇メートル内外を目測される。その他の部分に於ては遙に低く、五

〇メートル乃至一〇〇メートル位の處が續き、地域の兩端部附近は、特に低い崖地である。岩壁には節理の外、大斷層線と直交する幾多の小斷層線があり、又粗面岩の岩脈が多いのであるから、この部に海蝕が加はり、深い入り込みや、浅い洞窟等も伴ふのである。此處に特筆に値あるは、玄武岩質凝灰岩の層を貫通して、粗面岩の進流や、岩脈が大小幾筋も成立し、或は層脈狀を爲し、或は層を横ぎり、特に岩壁に對して平行に近い向きにある夫れが、斷層によつて斜斷せられ、廣く且薄い岩脈を實在的に示すは、誠に趣味あることである。一般玄武岩の熔岩や、同質集塊岩乃至凝灰岩の間に、往々粗面安山岩質玄武岩に由來する凝灰岩もあり、鐵分の酸化により、之れが分解度の進むと共に益々赤色が顯著となり、或は分解の結果として、鐵明礬を生じ、表面に黄色色彩を現はすもあり、粗面岩岩脈の白色や、一般玄武岩による黒色絶壁等、相交錯して色とり／＼に色彩美を呈するは、誠に珍らしい好景である。

隱岐知夫赤壁に於ては前記の地貌的變化乃至色彩的異様の岩壁を嘆賞すべきであるが、更に地質學的見地からいふならば、各種岩石の現出に就て、その前後關係が、誠に明に觀察し得られることである。即ち玄武岩が先づ第一地域を形成し、その當時から前後數次に、粗面安山岩質凝灰岩も之に互層するを見るは、後から大に進發した同岩石が、熔岩として進發するその前提に相當する。次に粗面岩の岩脈は、玄武岩質凝灰岩同集塊熔岩の累層を横ぎるによつて、より後期のものであるを知られる。赤い帯のやうな層や、斜に大に現はれる赤色凝灰岩の部も、亦粗面岩々脈によつて貫流され、或は亂されてゐるから、粗面安山岩質玄武岩の凝灰岩なるものは、やはり粗面岩より

も以前から時々に出來たことを思はれる。又赤禿山を爲す粗面安山岩質玄武岩によつて前記の總てが被覆されてゐるから、熔岩として大に迸發したのは後のことであるも肯かれる。更に最後に迸發した後期玄武岩のために、赤禿山の中その一部即ち粗面安山岩質玄武岩の其一部分が被覆された順序も、明瞭に知り得られる。そこで玄武岩質の熔岩は極めて流動し易い性質であるから、赤壁の絶壁上にも見える通り、蜿蜒と屈曲して、他種岩石の間を潜り、立ヶ崎の一部にては、遂に上に出で、突兀たる光景を呈し、立ヶ峯をも成すは注意すべきである。

猶表題の地域に於て、部分的に著しい實在を列擧するならば、概ね左記の通りである。

龍騰りゅうたけり といふは、粗面岩が岩脈として、下方に狭く、上昇するに随つて次第に幅を増すと共に、蜿蜒屈曲の状態も見え、異様の觀があるからの命名である。そして特に兩側の接觸變質の部には、冷却面に直角に型の通り節理を生ずるも、岩脈の内部では岩壁に平行した節理があり、外觀上の命名に對して、感じを興へたものであらう。

龍宮乙姫の赤帯 といふは、黒褐色を爲す玄武岩質凝灰岩の累層間に、或は平行的に、或は之れを斜斷して細く且長く續く赤い層をいふのである。之れは前記の通り粗面安山岩質凝灰岩の分解により、鐵分が酸化した結果である。

鷲ヶ尾 は立ヶ峯の玄武岩が、柱狀節理の部に於て、崩壞した後の絶壁をいふのである。實際鷲が往來するといふのと、危険な絶壁といふをかけて斯く命名したのである。

男池及女池 隱岐知夫赤壁の成因に對して、至大の關係ある南北方向の大斷層に沿ひ、絶壁下

に於て、海水を湛へた池形の凹みである。兩者共に直徑僅に數メートルで甚だ深いといふのであるが、現在は石礫で大に埋つたのは事實である。蓋し斷層の出來た一大地變に伴ひ、陥落した跡である。

深浦 といふは、斷層崖に對して、之れと直交の向きに幅狭く且深く陸上に喰ひ込んだ地域である。二ヶ處ある中に、その一は粗面岩の岩脈が海蝕によつて、浸蝕された跡であり、陸上に於てその行き詰りを見ると正にその成因を確め得られる。又その二は、平行する斷層と節理から、海蝕が加はり、楔狀に入り込んだ場面である。そして彎入した地域の更に側面に於て、即ち大斷層崖と平行の向きに、粗面岩の白い岩脈が雜草の間に見えるのがあり、斯る岩脈が縦横に此地方を貫通するを想察される。

離レ といふは互に直交する四條の斷層線に由來し、海蝕を受けて地盤とも離れ、之れが水平的一局部の斷層のやうに動いて脱離するに至つた小島をいふのである。自然の營力を受け、上方には地層の傾斜面に沿ひて、漸次崩壞し、現在は少しく陸地續きのやうに爲つたのである。

達磨岩 岩石の節理に沿ひて海蝕し、左右と後方竝に窟の天井下に空隙を生じ、洞窟の内部に残つた岩石の一部が、恰も達磨の据つた形に似るといふのである。そして上方に雨覆のやうに天井が出來てゐるから面白い。

帶ヶ崎 赤灘瀬戸に臨む突角をいふのである。附近は特に波浪が荒いから、凝灰岩の層が大に浸蝕され、玄武岩の熔岩が帶形に凹んだ間に、殘壘狀に並ぶからの命名であらう。

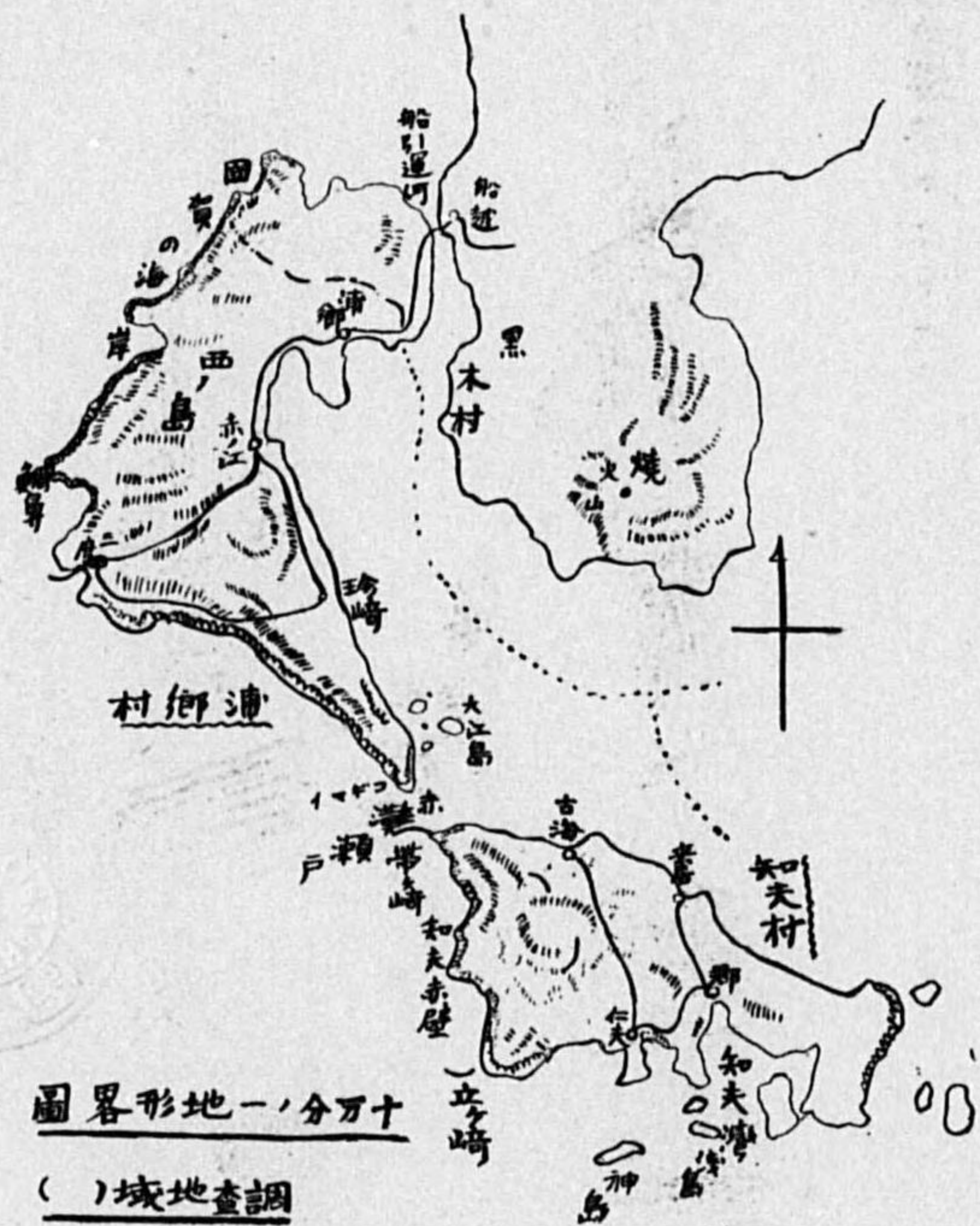
背景を爲す赤禿山は玄武岩の特性上、岩臺状を爲すにより、一名赤平山とも稱する。標高三三〇メートル、粗面安山岩質玄武岩のベテオニテであつて、後期玄武岩の被覆を免れた部分である。恰も章魚の足を伸ばしたやうに分岐し、緩な放斜谷が、その間に成立し、高みの部分と共に一面の芝生である。處々に海岸性灌木類が、特殊の群落を形成し、隱岐全島を通じての廣い牧畑である。山體を爲す岩石が、特に分解の進んだ處では、赤褐色の土壤を、綠色の芝生の處々に露し、一見異様に見えるも、岩石の種類上正に然るべきことである。そして前記赤壁に於て見るべき赤色と全く同様の視感あるも、所謂似而非なる物の一つである。即ち赤壁に於ける所謂赤帯は、凝灰岩の分解なるに對し、此處に於けるは、熔岩として迸發したものが、分解したのであるから、その本源を同じうするも、前後の事情を異にするは明である。赤禿山の展望は、島前一帶を一眸の下に聚めた廣大な光景である。

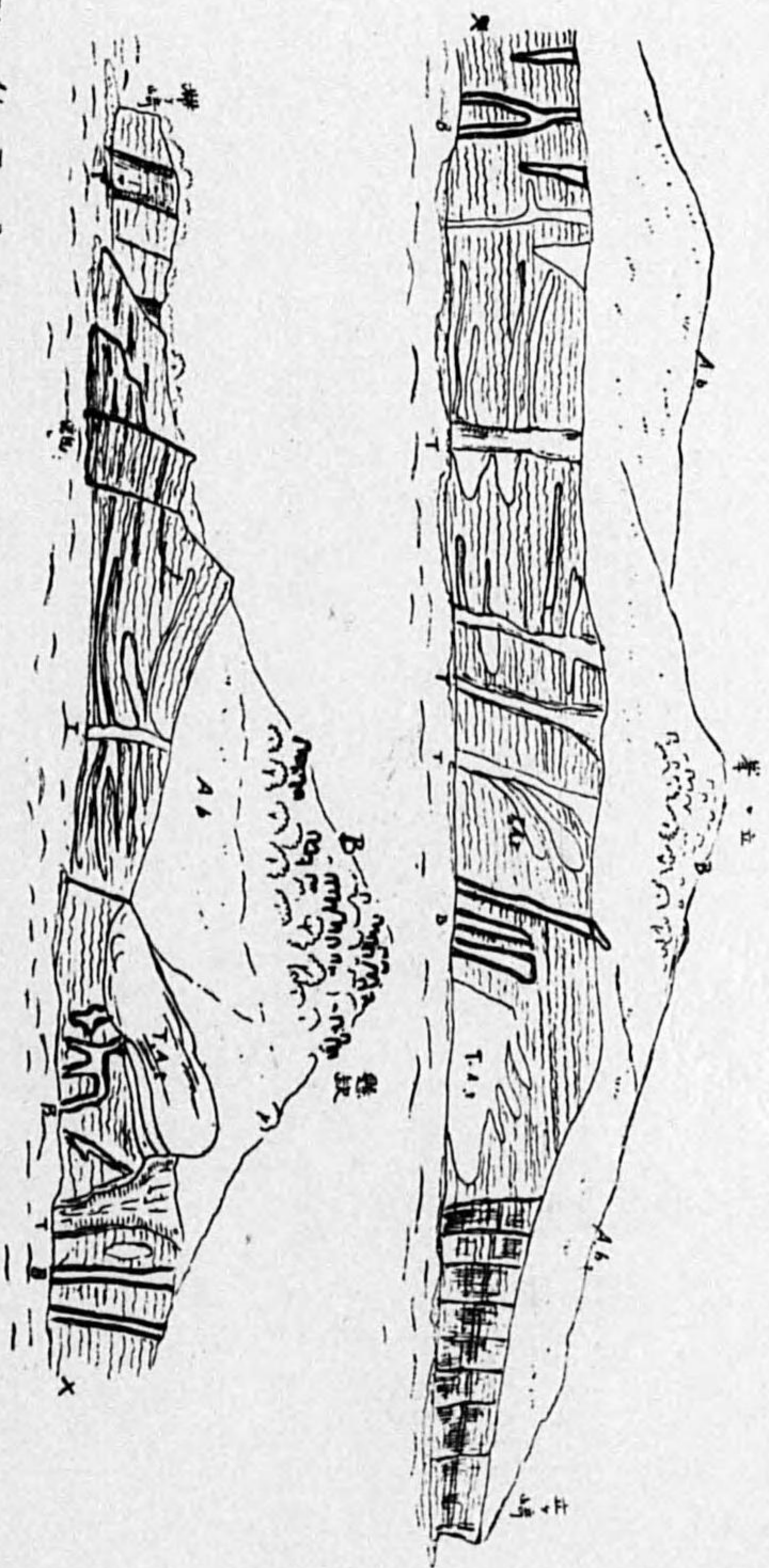
五、保護の必要

前記の通り赤禿山の柔和的光景は、赤壁に於ける豪壯的光景との對照上、趣味の多いことであり、殊に後醍醐天皇の御遺蹟を存し、冬期スキー場ともなる等、各種方面も考慮中に加へて、名勝天然紀念物として、完全に保護すべきものと信する。

六、保存の方法

岩壁も背景も、共に現狀をその儘に保存すれば充分である。そして樹木の伐採と、岩石の採掘とを禁じ、自然に添はぬ設備を爲さぬことである。





第九 隱岐知夫赤壁  
 圖 1  
 圖 2  
 圖 3  
 圖 4  
 圖 5  
 圖 6  
 圖 7  
 圖 8  
 圖 9  
 圖 10  
 圖 11  
 圖 12  
 圖 13  
 圖 14  
 圖 15  
 圖 16  
 圖 17  
 圖 18  
 圖 19  
 圖 20  
 圖 21  
 圖 22  
 圖 23  
 圖 24  
 圖 25  
 圖 26  
 圖 27  
 圖 28  
 圖 29  
 圖 30  
 圖 31  
 圖 32  
 圖 33  
 圖 34  
 圖 35  
 圖 36  
 圖 37  
 圖 38  
 圖 39  
 圖 40  
 圖 41  
 圖 42  
 圖 43  
 圖 44  
 圖 45  
 圖 46  
 圖 47  
 圖 48  
 圖 49  
 圖 50  
 圖 51  
 圖 52  
 圖 53  
 圖 54  
 圖 55  
 圖 56  
 圖 57  
 圖 58  
 圖 59  
 圖 60  
 圖 61  
 圖 62  
 圖 63  
 圖 64  
 圖 65  
 圖 66  
 圖 67  
 圖 68  
 圖 69  
 圖 70  
 圖 71  
 圖 72  
 圖 73  
 圖 74  
 圖 75  
 圖 76  
 圖 77  
 圖 78  
 圖 79  
 圖 80  
 圖 81  
 圖 82  
 圖 83  
 圖 84  
 圖 85  
 圖 86  
 圖 87  
 圖 88  
 圖 89  
 圖 90  
 圖 91  
 圖 92  
 圖 93  
 圖 94  
 圖 95  
 圖 96  
 圖 97  
 圖 98  
 圖 99  
 圖 100

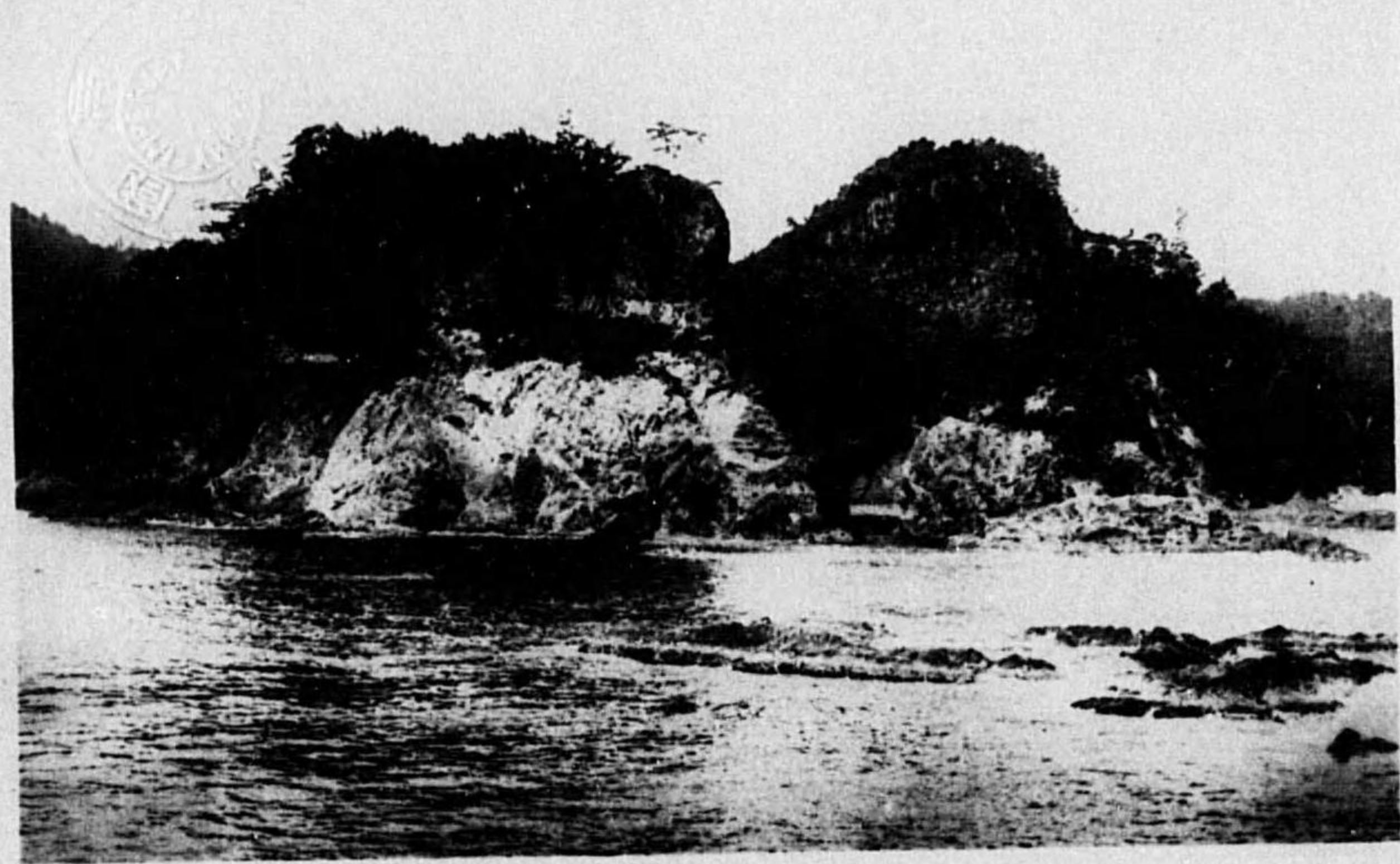
圖 版

岸海施布岐隱 一第



(一ノ續枚ニルアニ右ノ版圖ノ下) 岸海ル至ニ島長リヨ岬山崎

岸海施布岐隱 二第



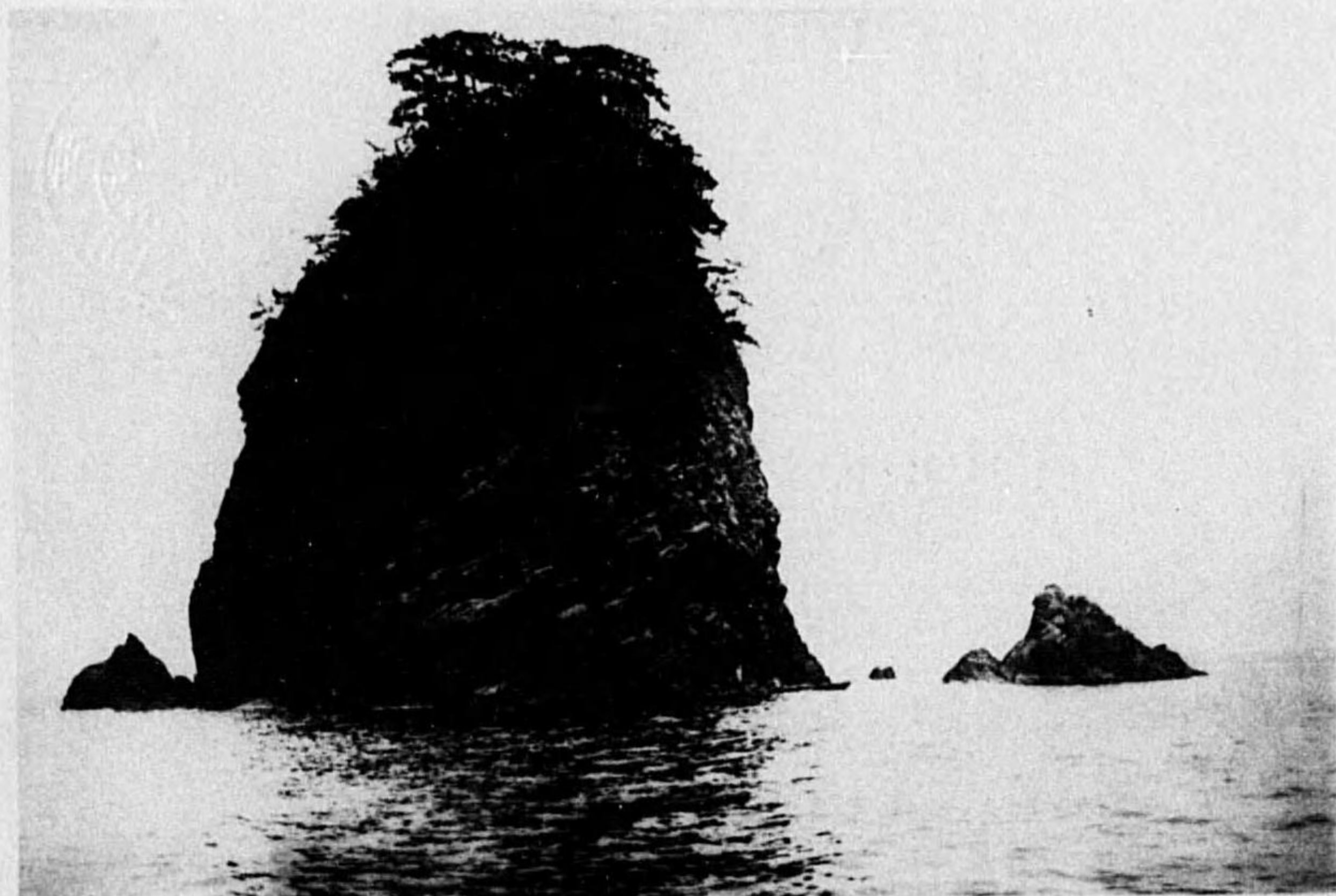
(一ノ續枚ニルアニ左ノ版圖ノ上) 岸海ル至ニ島長リヨ岬山崎

岸海施布岐隠 三第



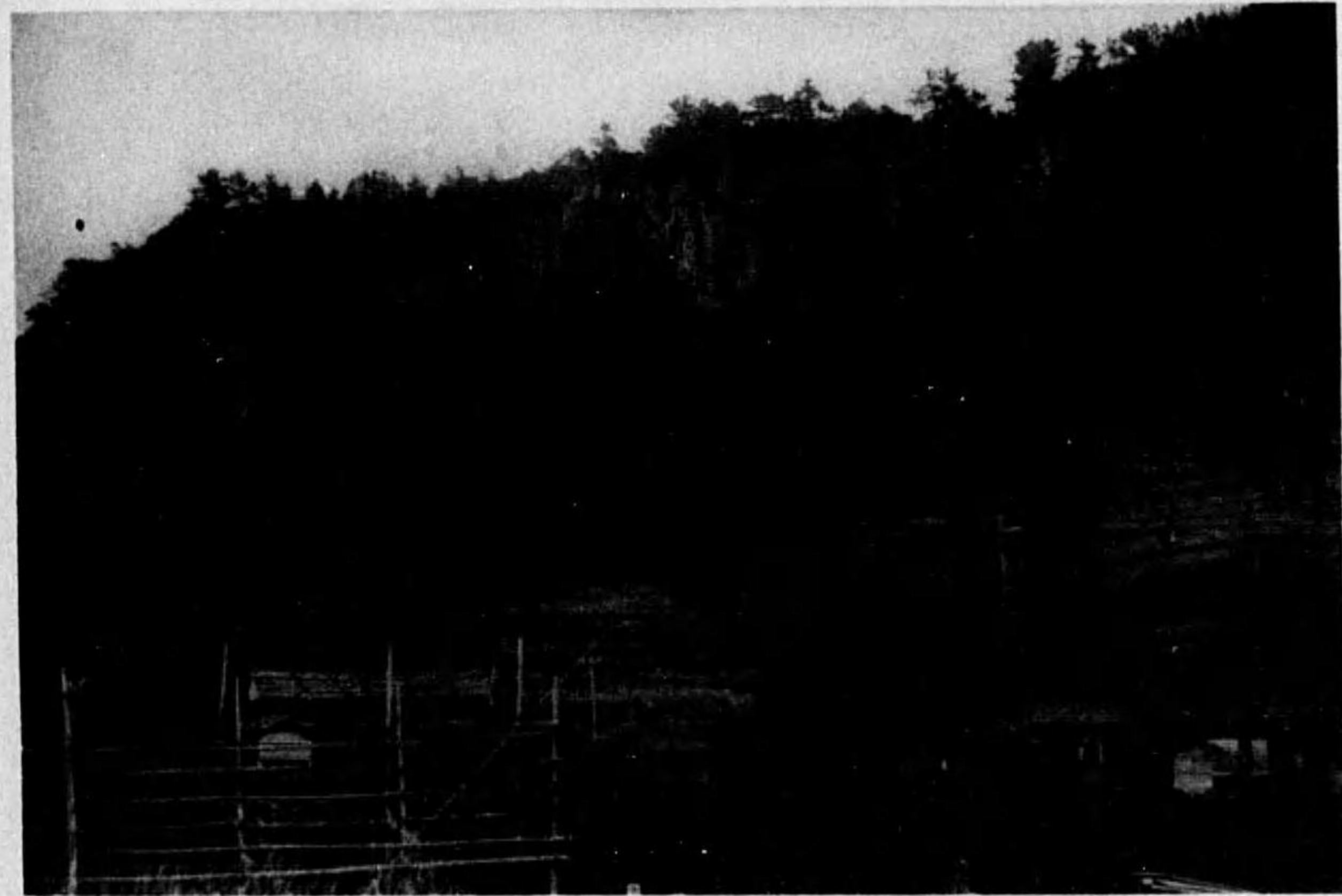
崎美飯ノ口港美飯

岸海施布岐隠 四第



ル見リヨ端南ヲ島峯小

鼻ノ田若海岐隠 五第



崖の水ヲ佐ナル在ニ鼻ノ田若海

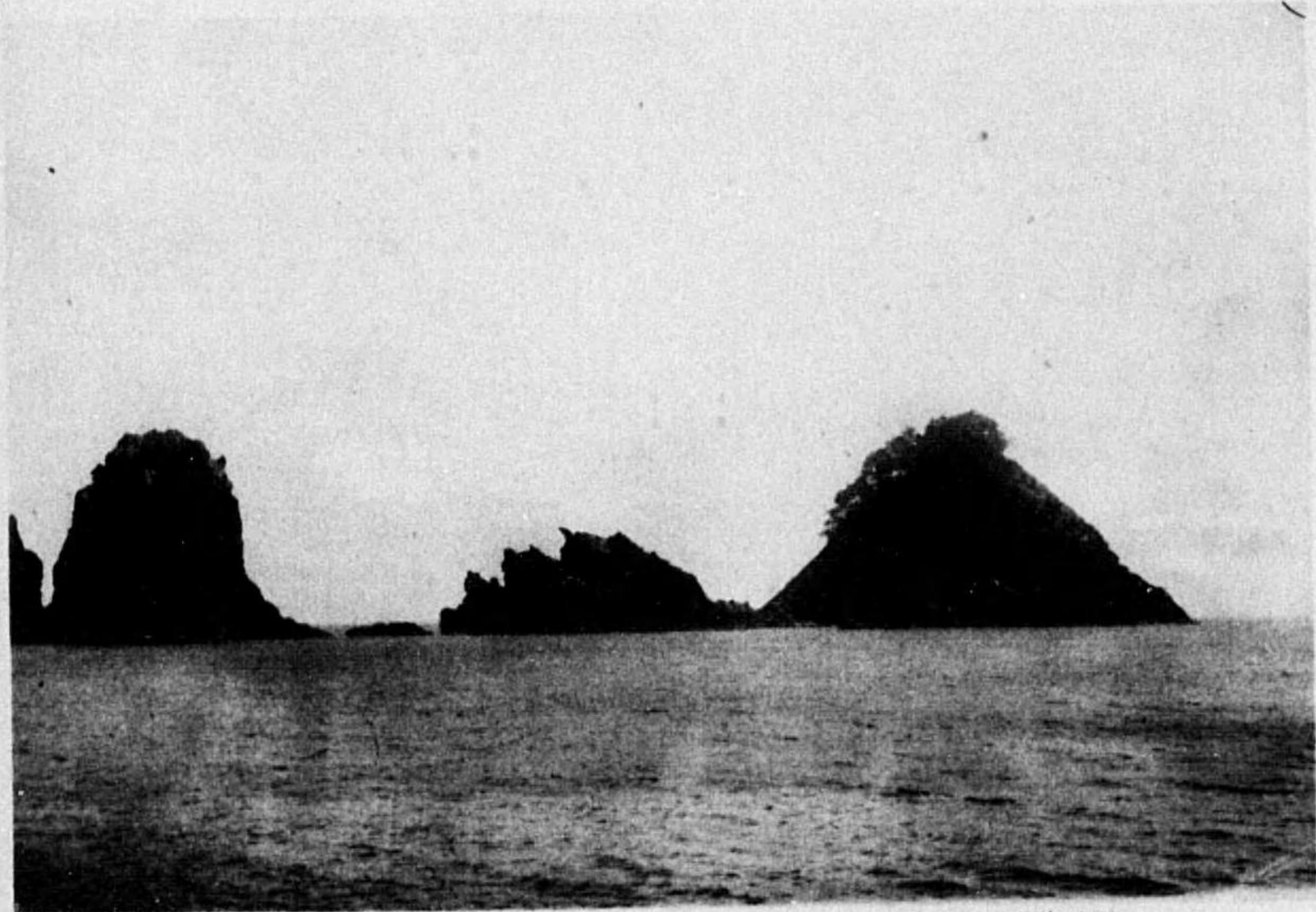
鼻ノ田若海岐隠 六第



ム岨ヲ岸灣村中リヨ鼻ノ田若海



鼻ノ田苔海岐隱 七第



(リヨ左)△望ヲ島釜島龜島子朝島キ近ニ鼻山崎ルアニ近附鼻ノ田苔海岐隱

鼻ノ田苔海岐隱 八第

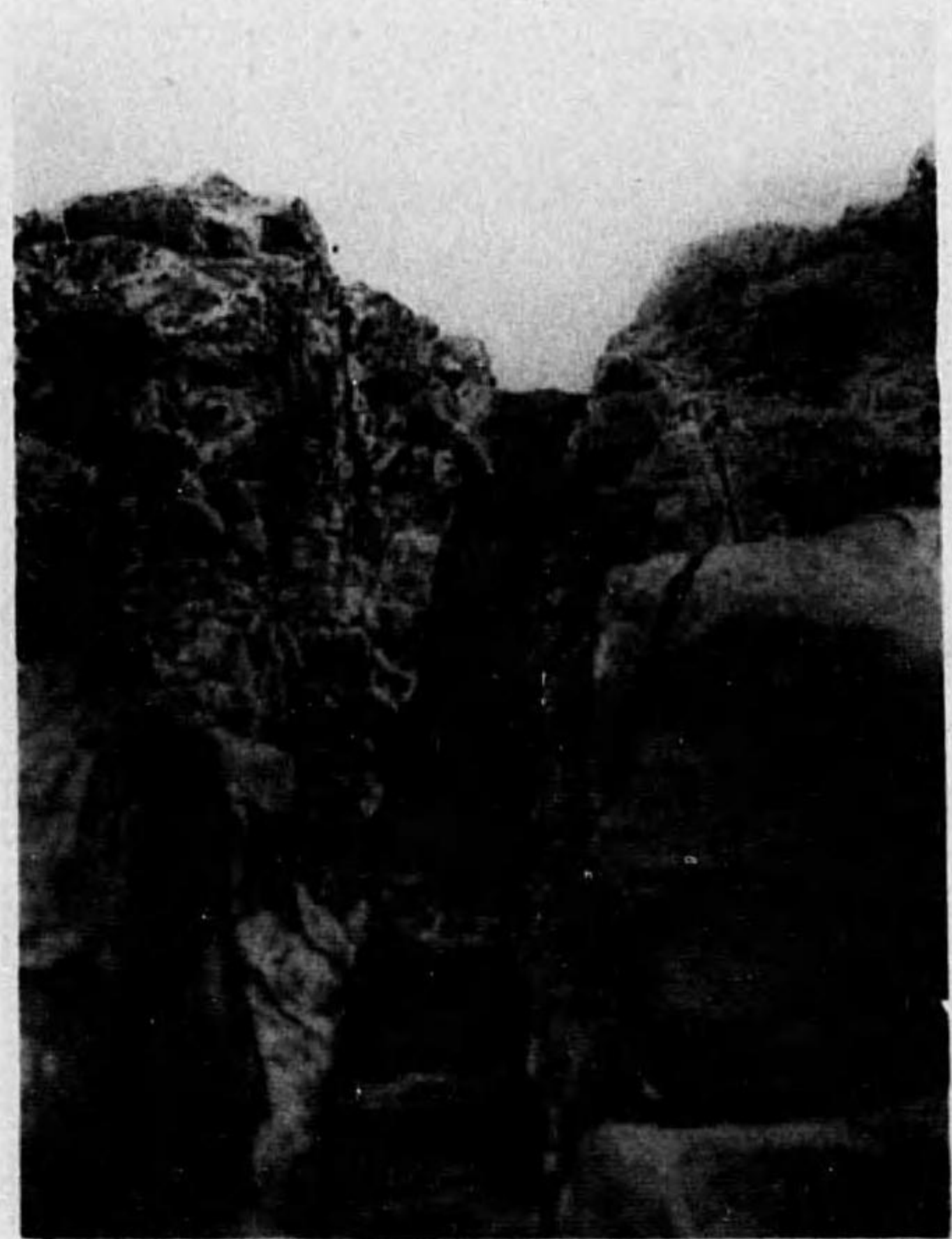


島琴ル在ニ鼻ノ田苔海

第九 隱岐海苔田ノ鼻



海苔田ノ鼻ニアル岩

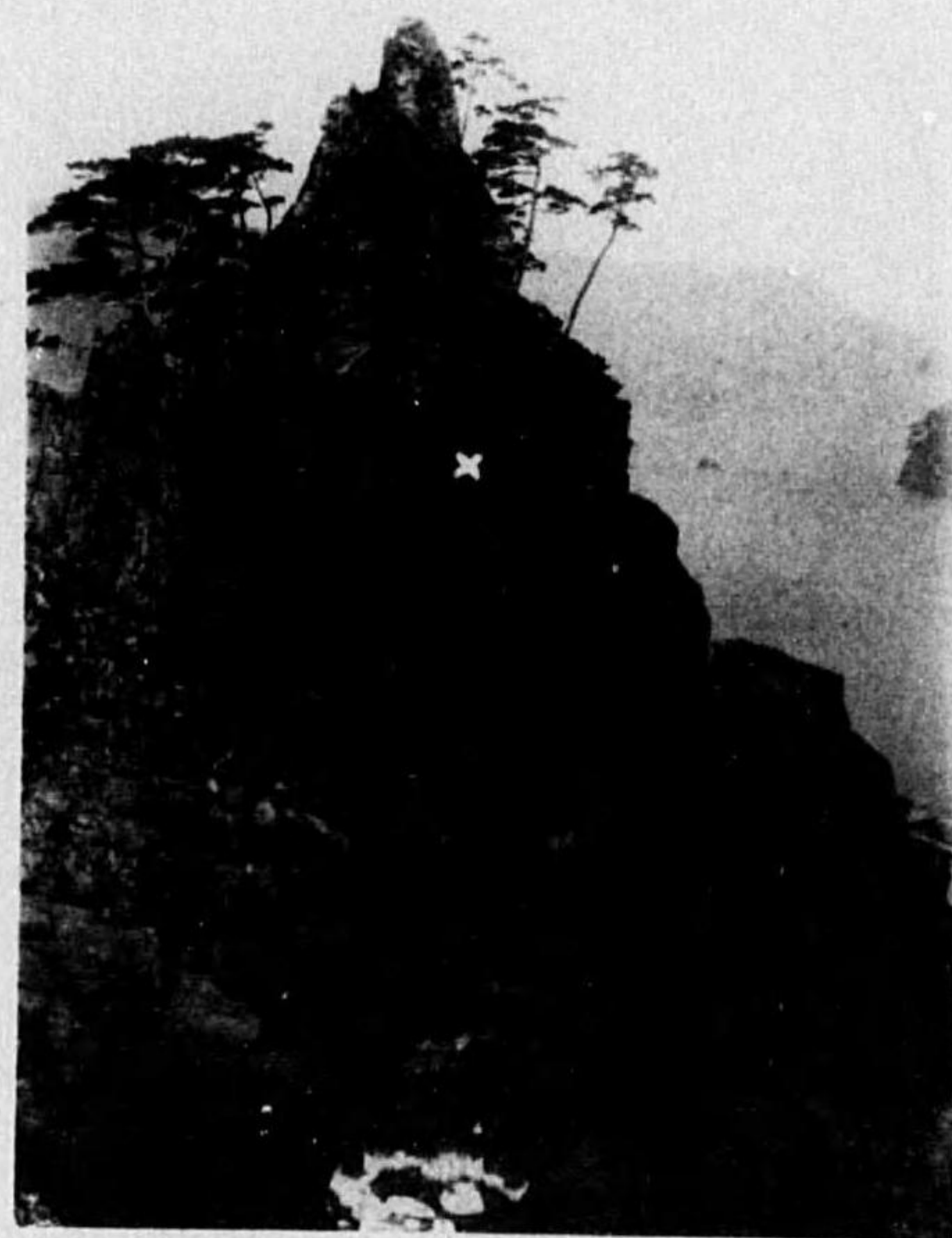


岩ノ鼻ノ海苔

第十 鼻ノ海苔隱岐



第十一 隱岐海苔田ノ鼻



海苔田ノ鼻北側ニアル鰐島

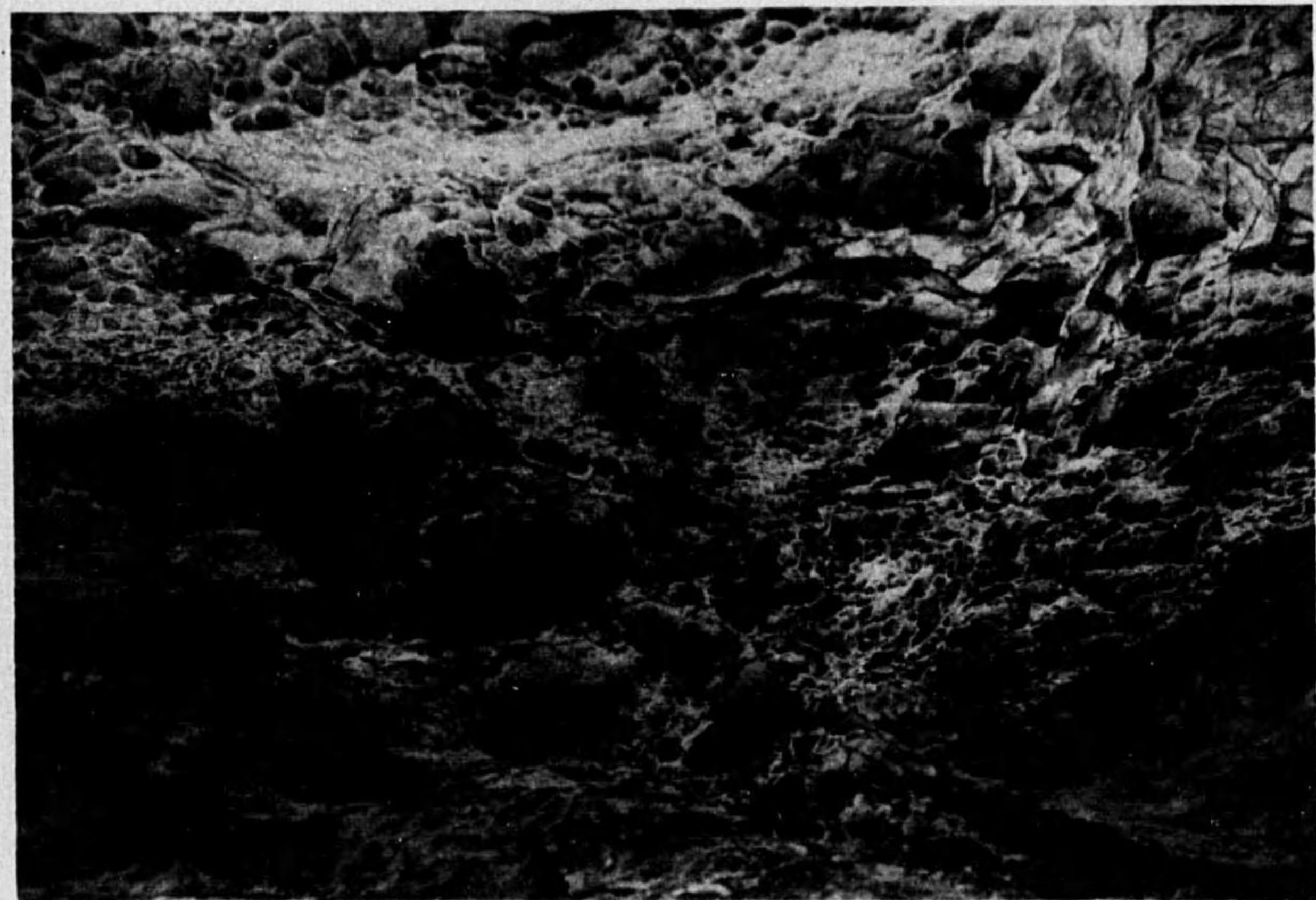
第十二 隱岐白島海岸



▲望ヲ岸海島白ニ透リヨ頂山岸灣村中



岸海島白岐隱 三十第



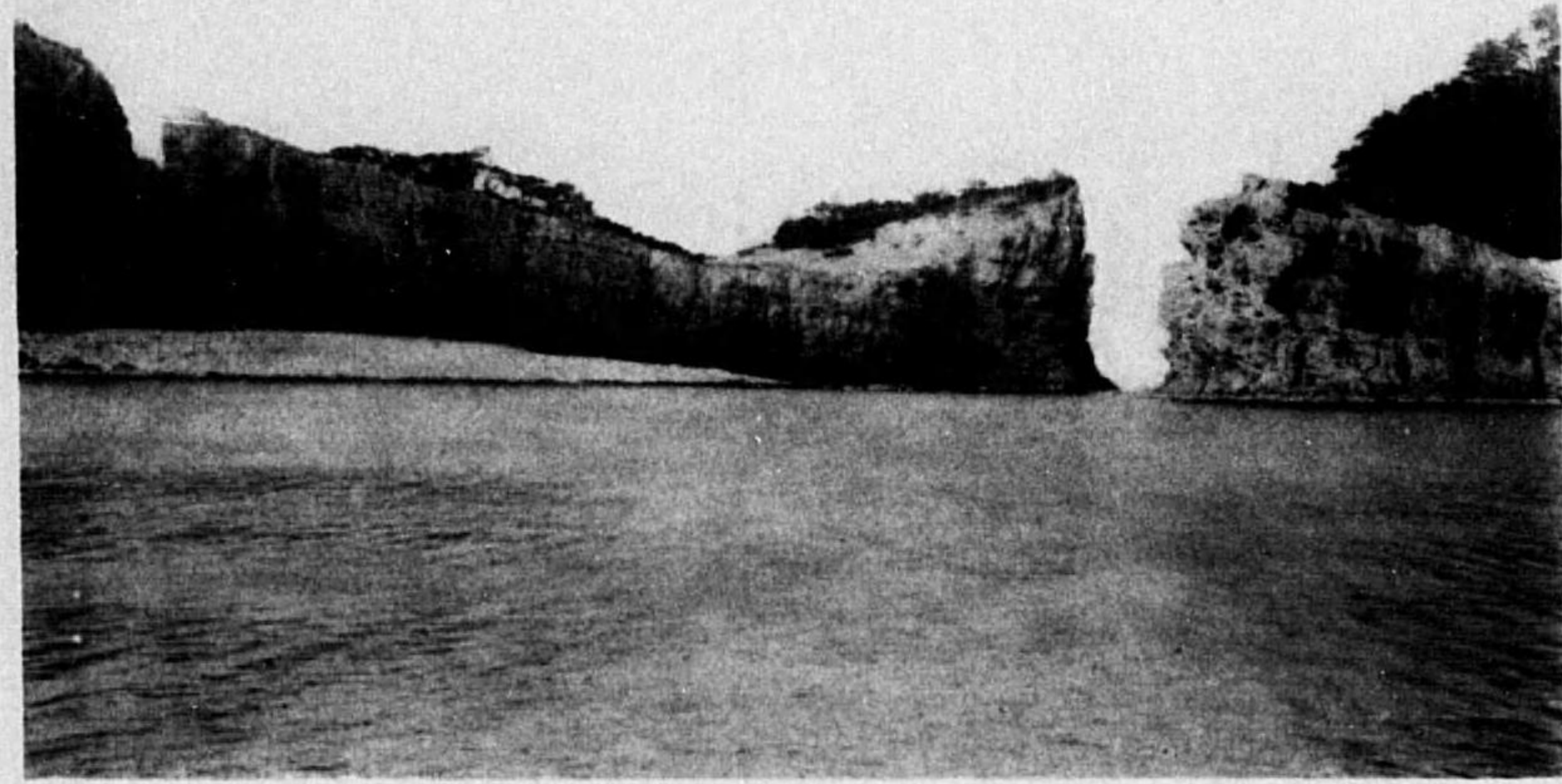
蝕海ノ上岩面粗島白

岸海島白岐隱 四十第



蝕海ノ島白

岸海島白岐隱 五十第



ム望ヲ道水島松リヨ端一ノ島田

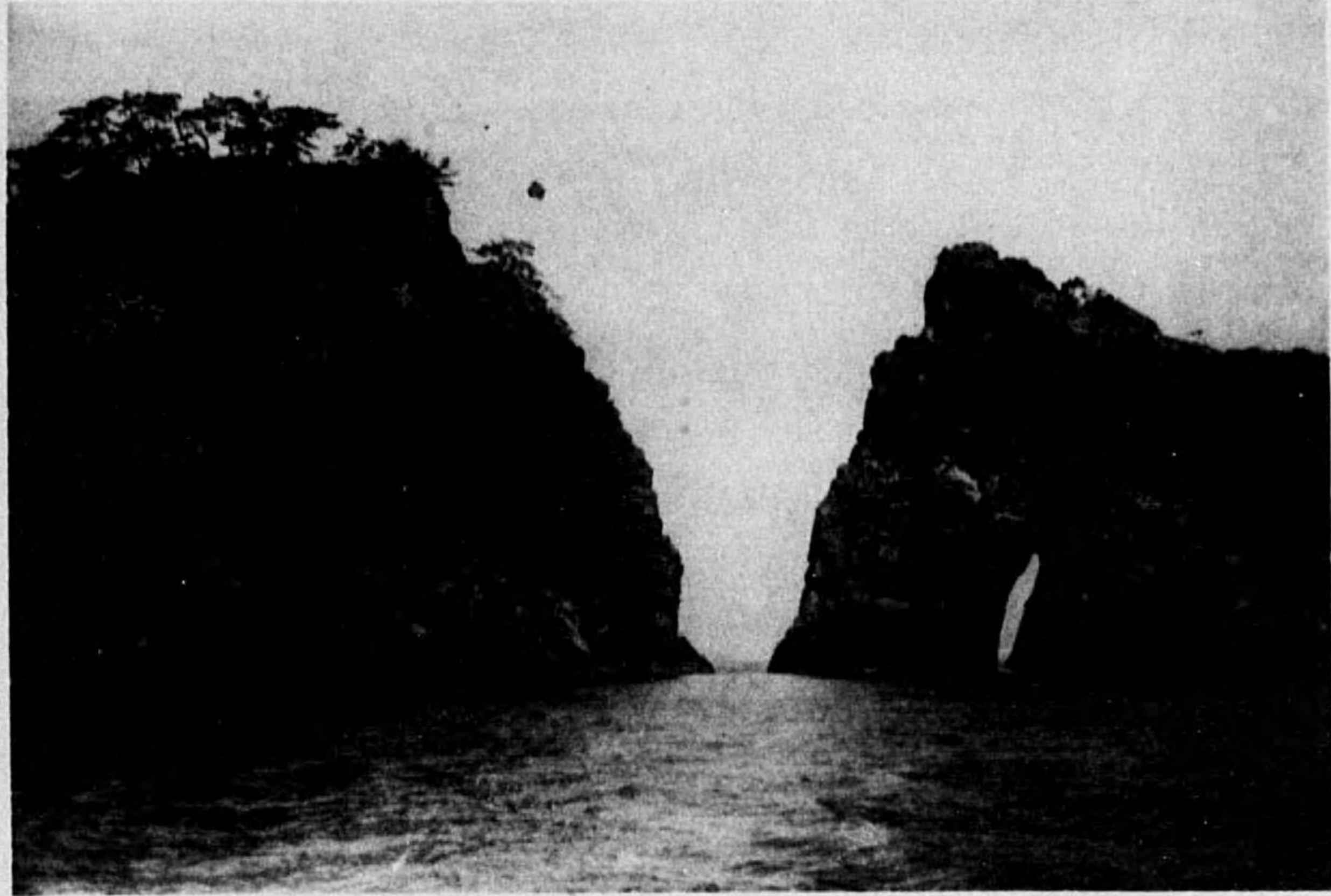
岸海島白岐隱 六十第



蝕海ノ島白

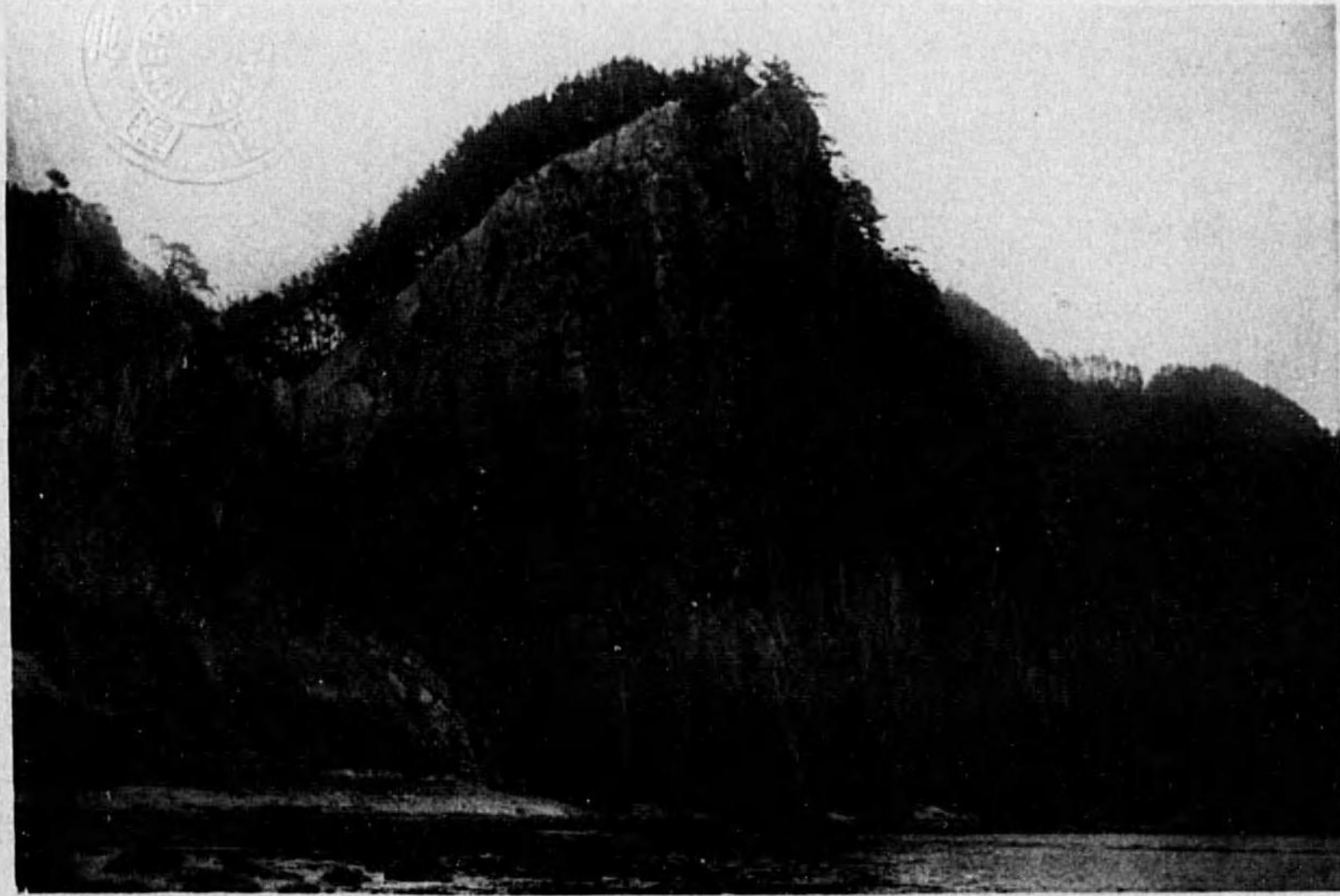


岸海島白岐隱 七十第



▲望ヲ島白沖リヨ道水島松

岸海島白岐隱 八十第



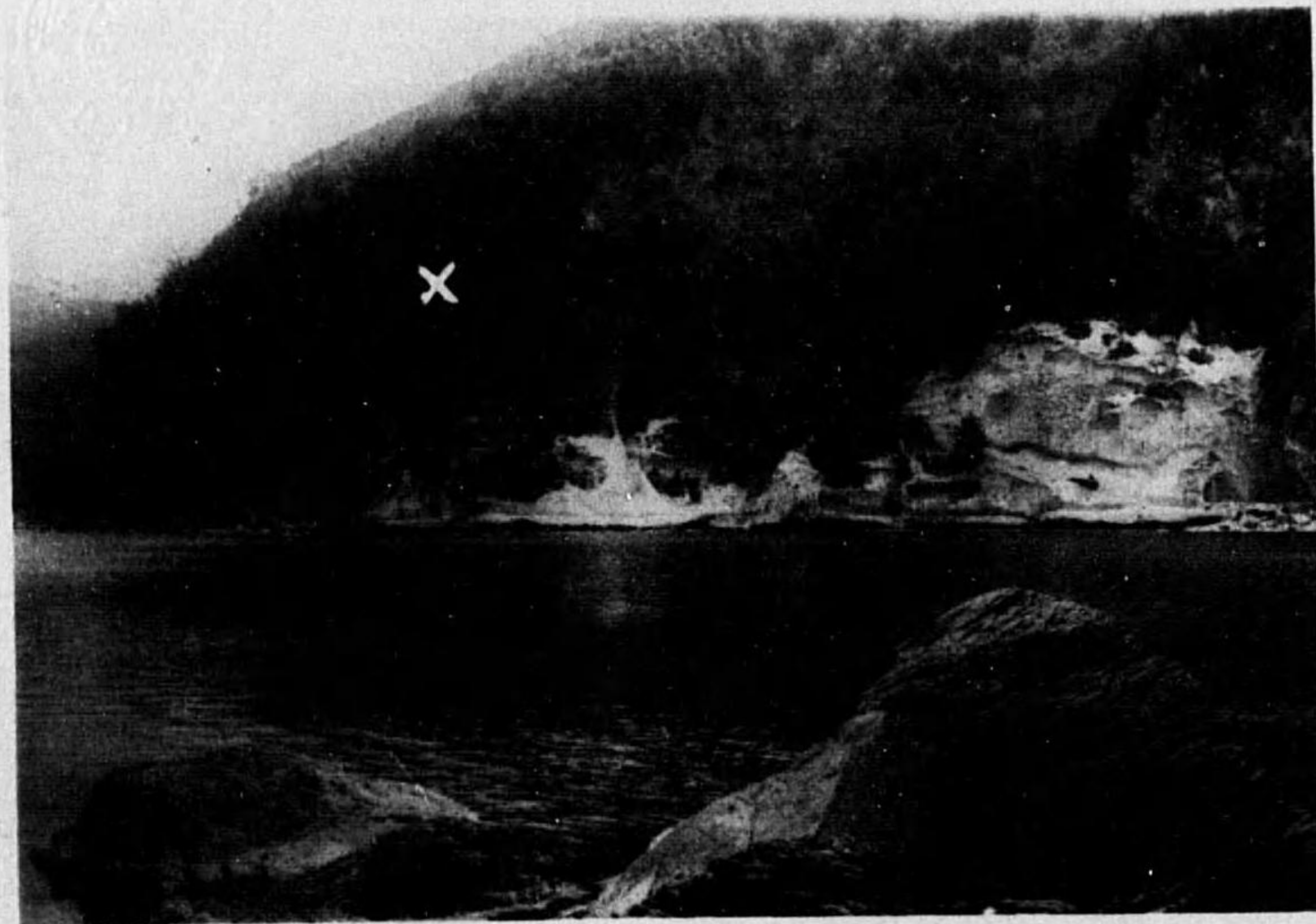
濱老不ト崖山壽

岸海島白岐隱 九十第

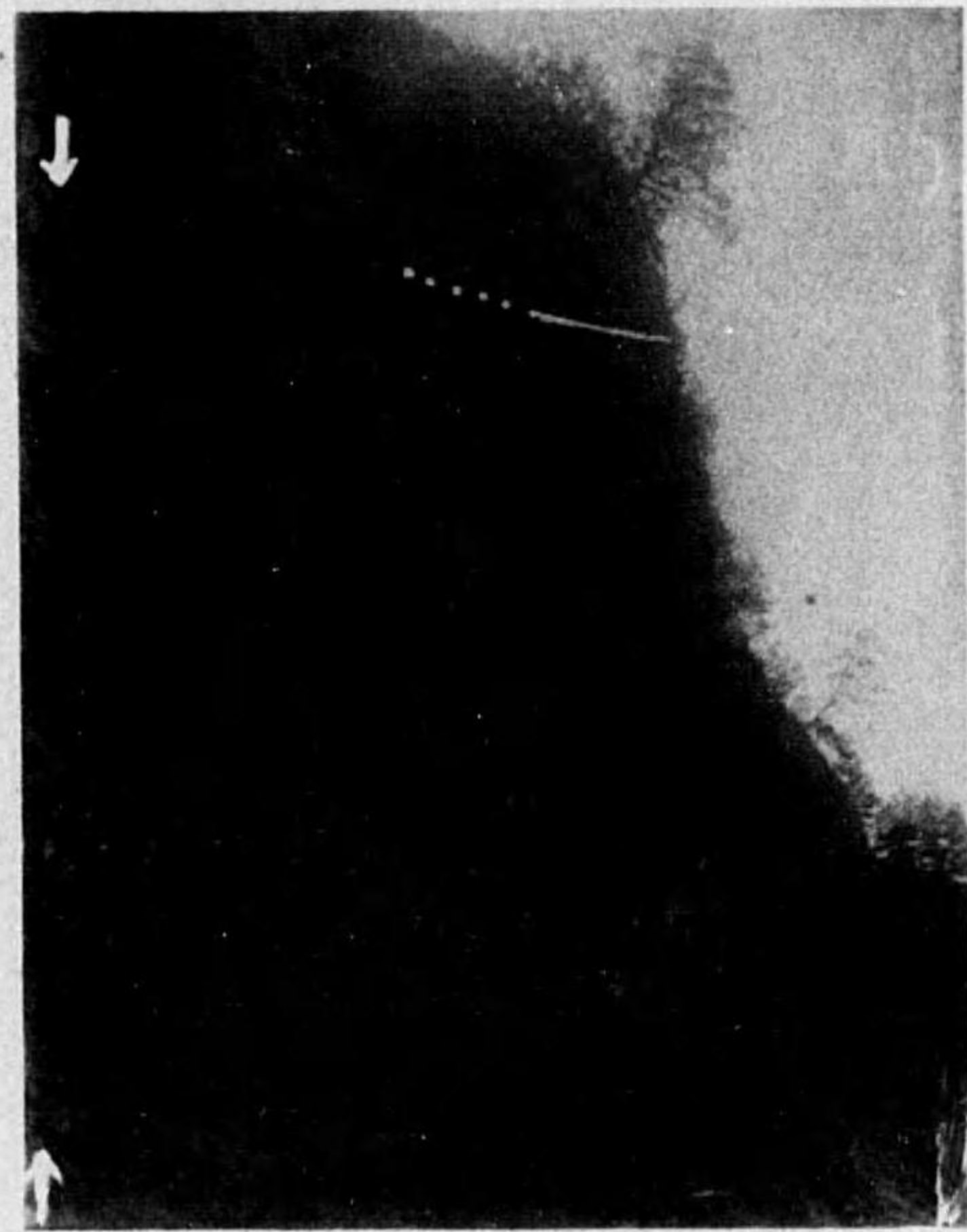


蝕波ラカ面理節ガ(岩紋流狀板)石岩ノ色白  
標有ルセ解分テケ受ヲ

壁岩ノ栖重 十二第



ム望ヲ壁絶ノ石曜黒リヨ島天辨内港栖重



第二十一 重柄の岩壁

黒曜石ノ絶壁

池ノ井油 二十二第



跡ノ口裂塔



第二十三 壇鏡ノ瀧

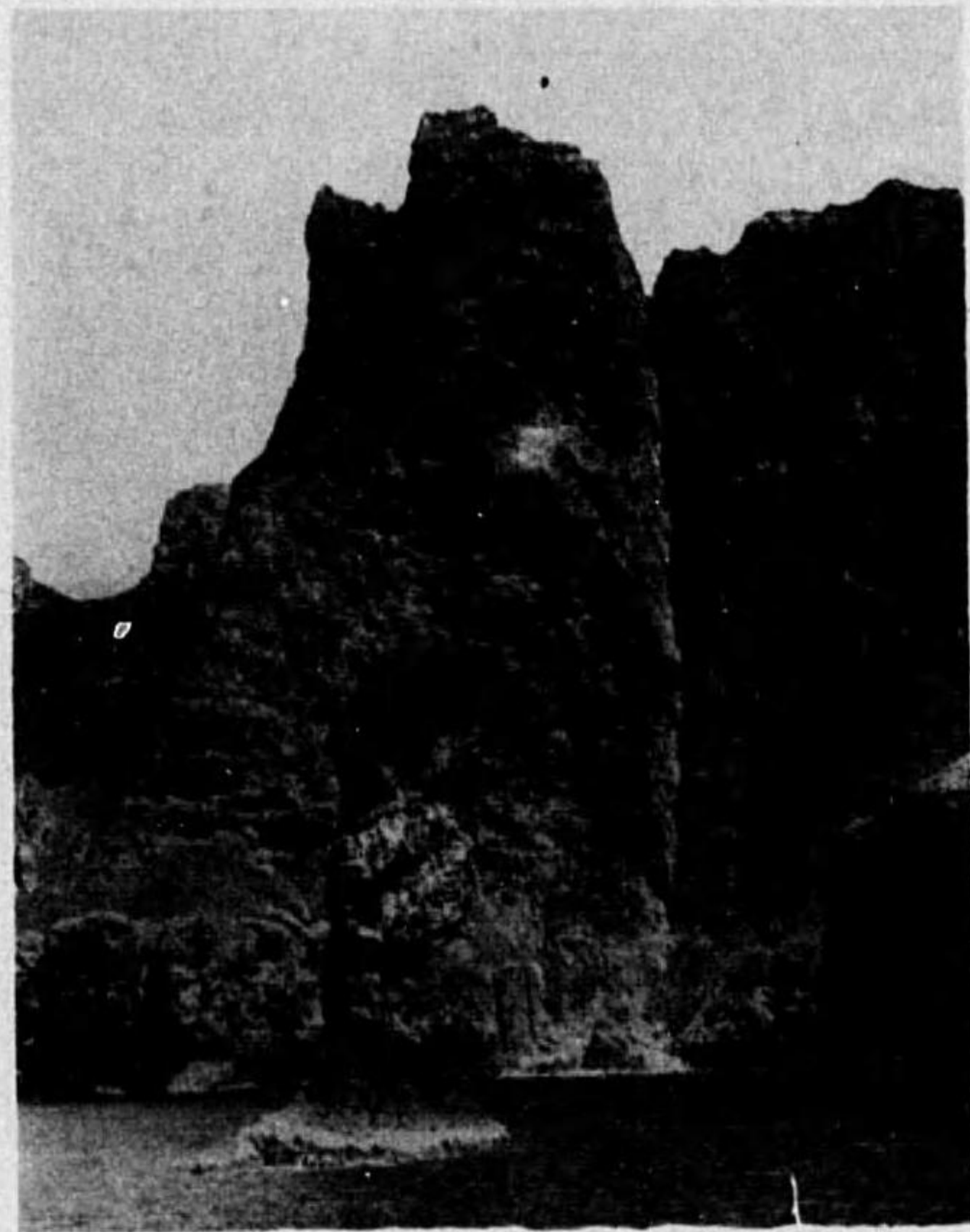


壇鏡瀧(雄瀑)ノ全景

第二十四 壇鏡ノ瀧 雄瀑背面ノ絕壁下部 (T.L. 板狀流紋岩 第三紀新層)

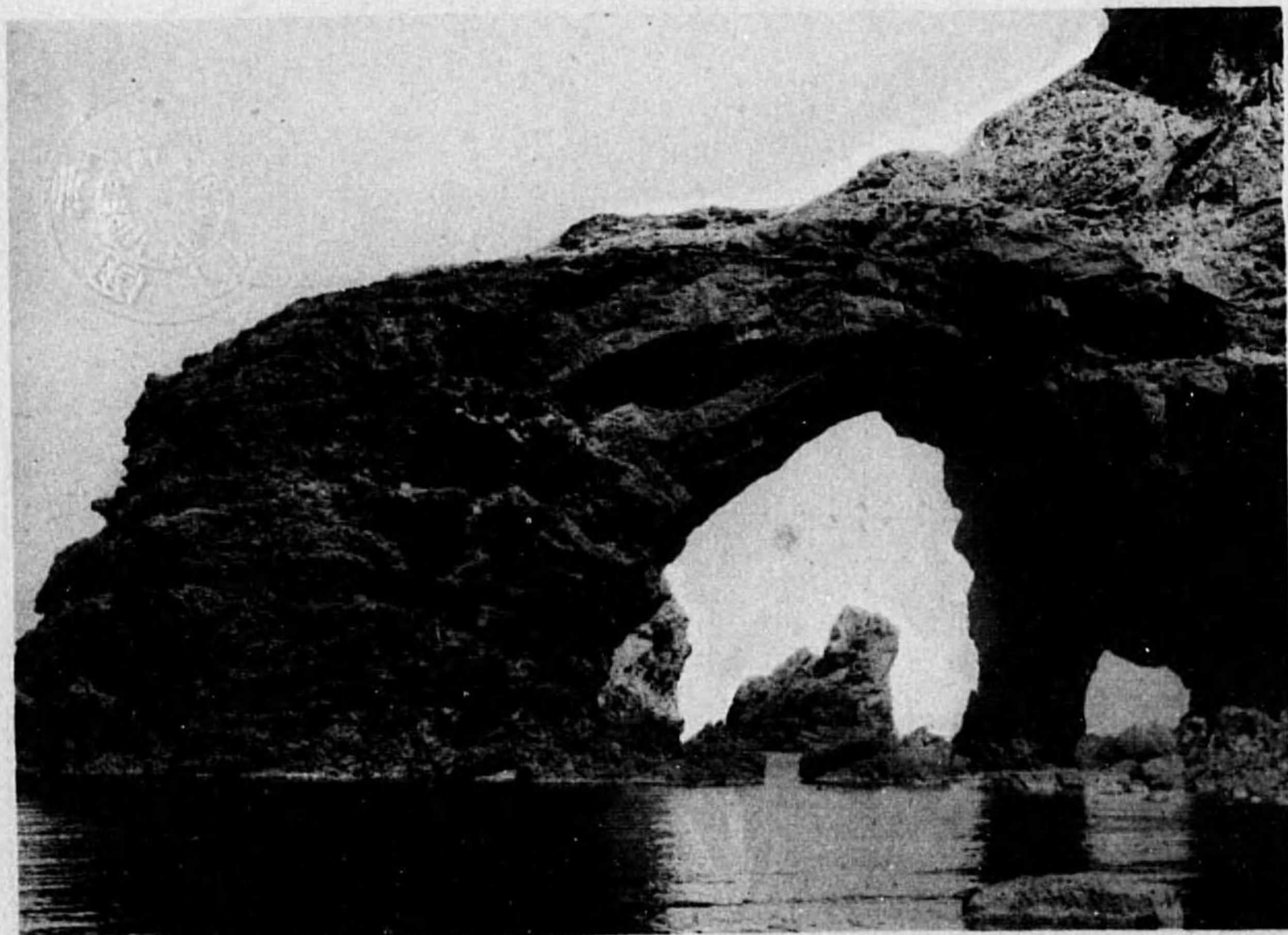


第二十五 隱岐國賀海岸



斷崖ノ一部「鬼ヶ城」ノ大觀ト金棒岩(前方)

第二十六 隱岐國賀海岸

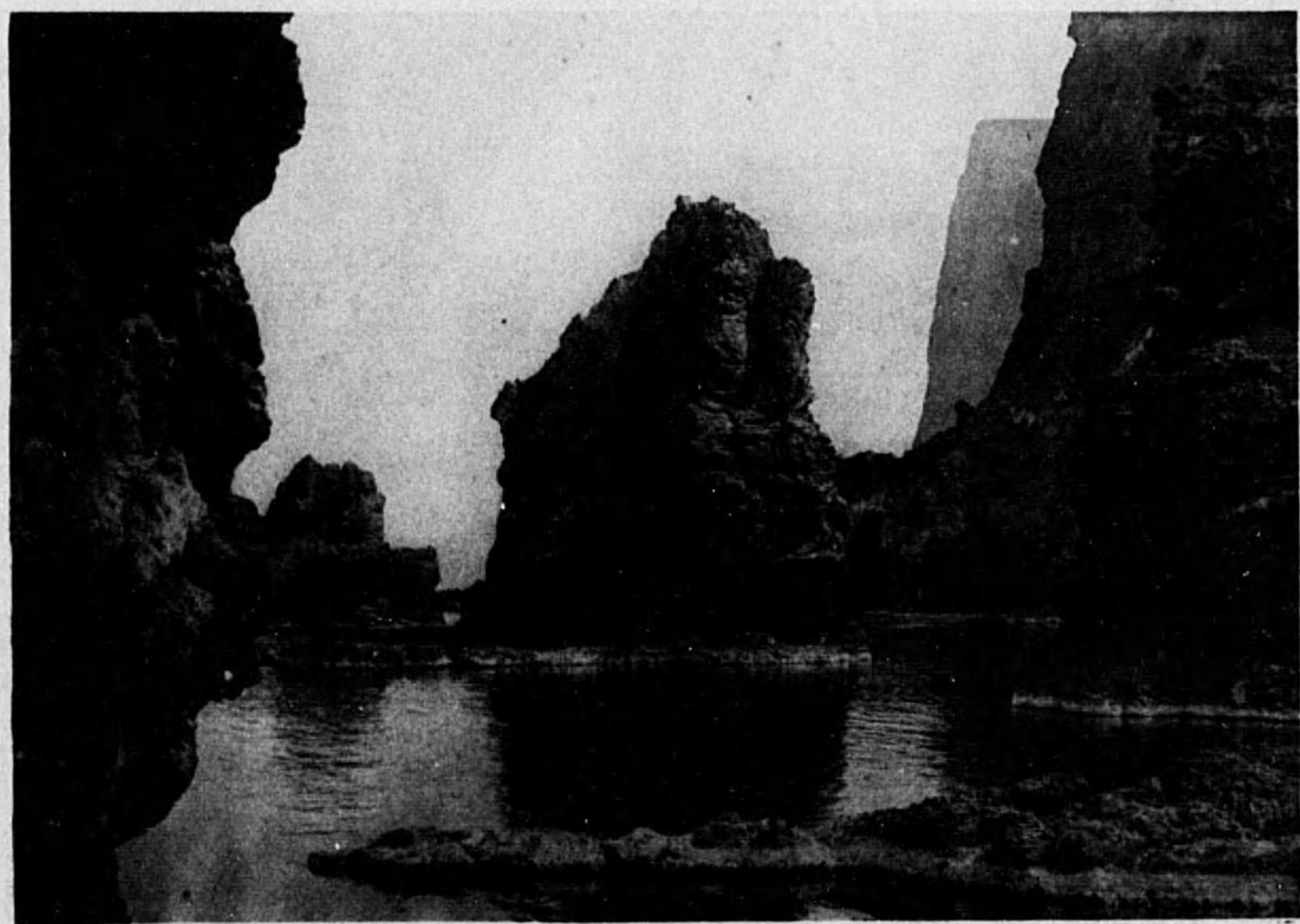


ル見リヨ面方界上天ノ方南ヲ(橋石然天)橋天通



摩天崖ノ大觀、背面ハ隱岐特有ノ牧畑

第二十七 隱岐國賀海岸

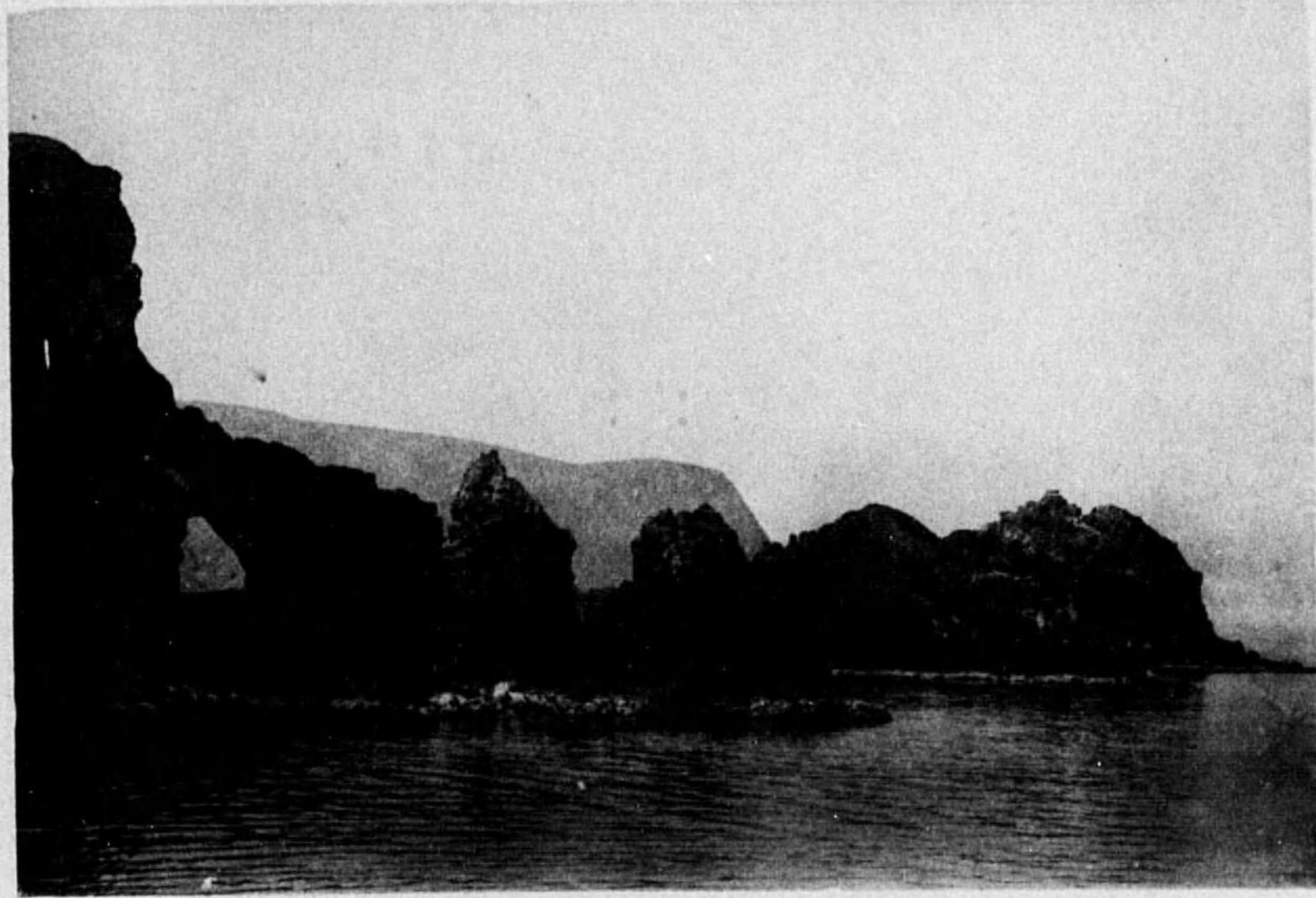


第二十八 隱岐國賀海岸

景近ヲチンベ起降態狀ノ岸海近附ト岩巒ノ界上天  
ム望ヲ崖天摩ク遠レト

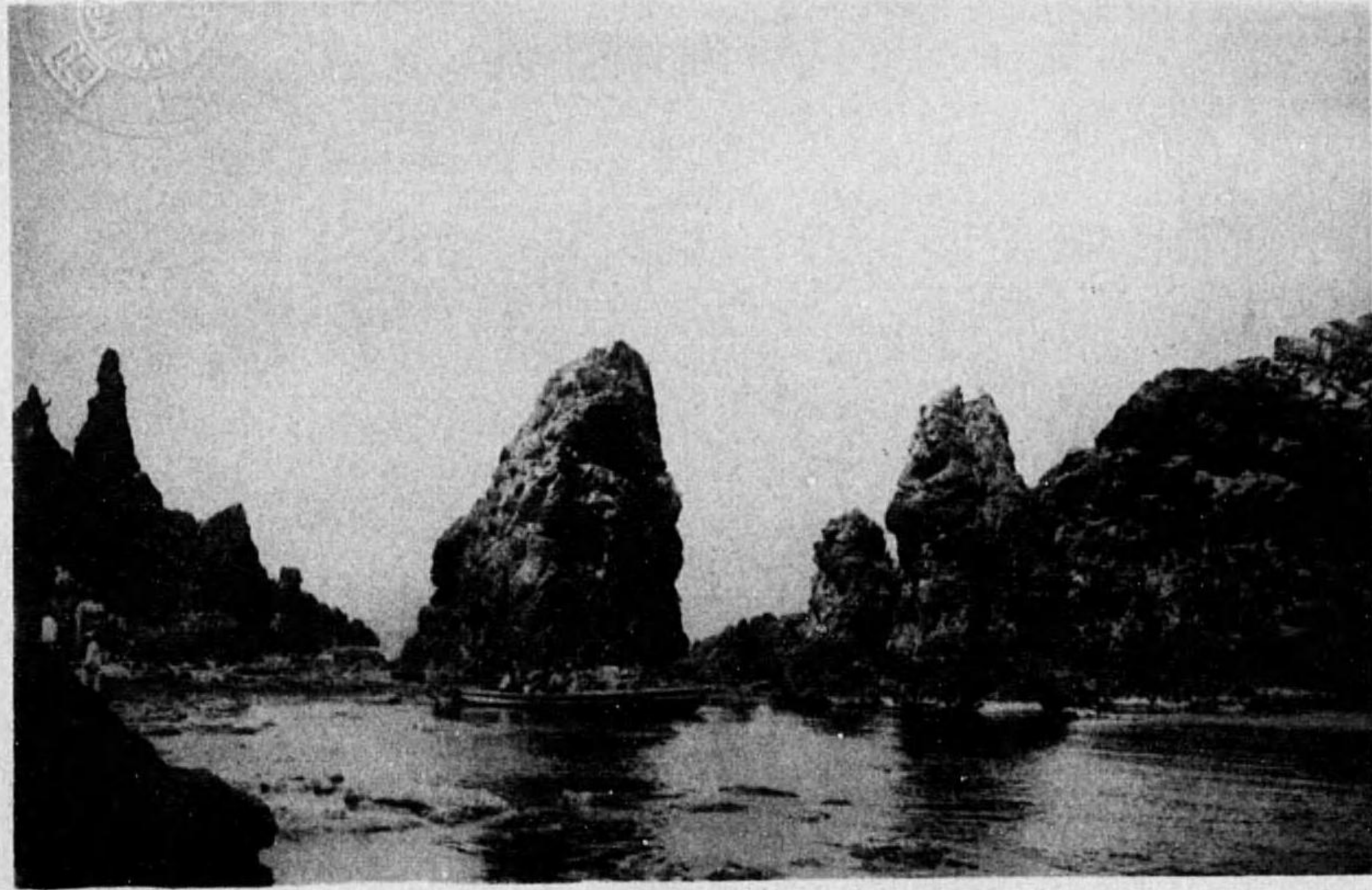


岸海賀國岐隱 九十二第



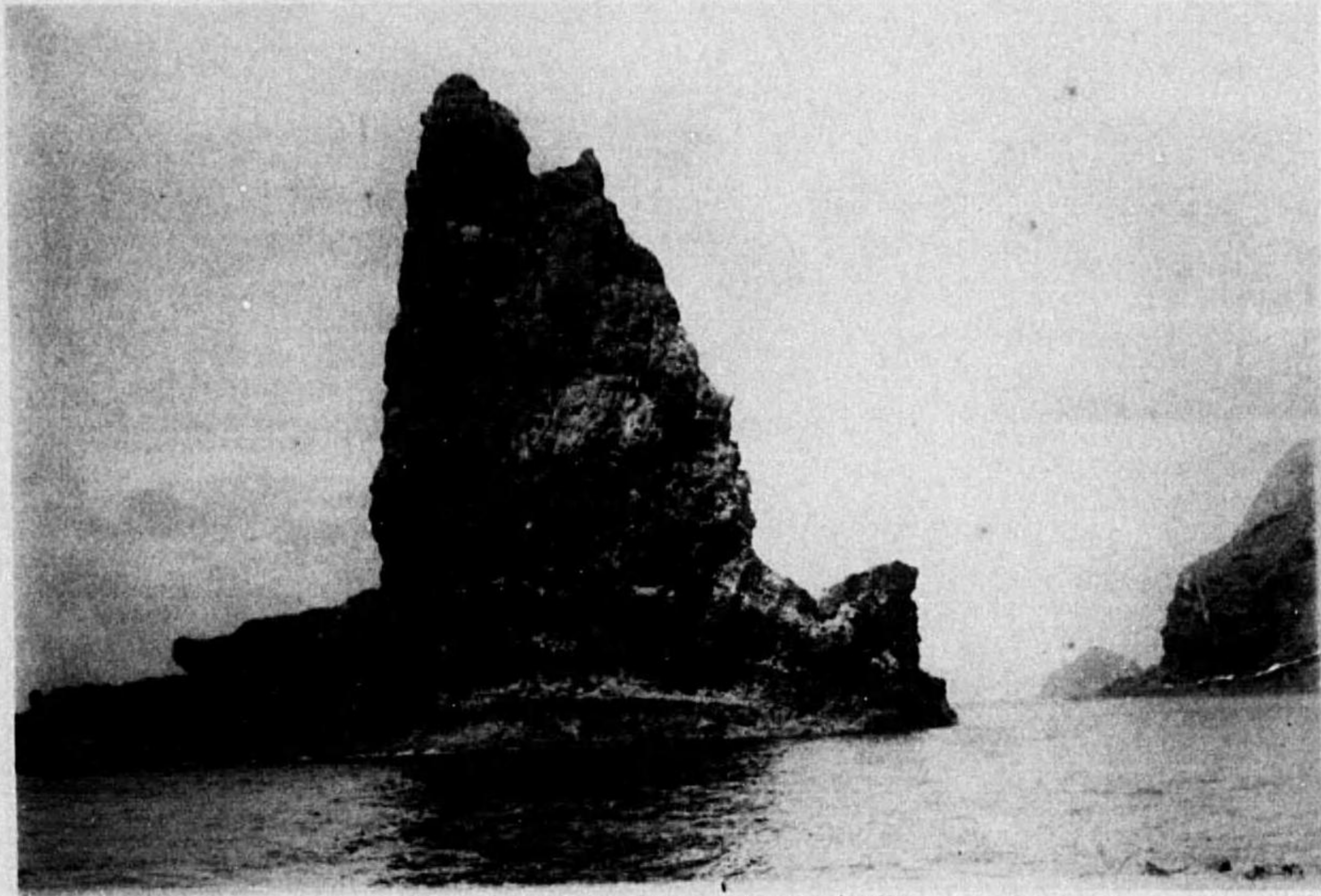
キ横ノ壁絶ト帯一廓外ノ界上天リヨ近附橋天通

岸海賀國岐隱 十三第



テ部局一タレ入罅ニ方南ノ橋天通群島小ノ界上天  
ルアガ觀ノ地天別ニカ穩ハ面海

岸海賀國岐隱 一十三第



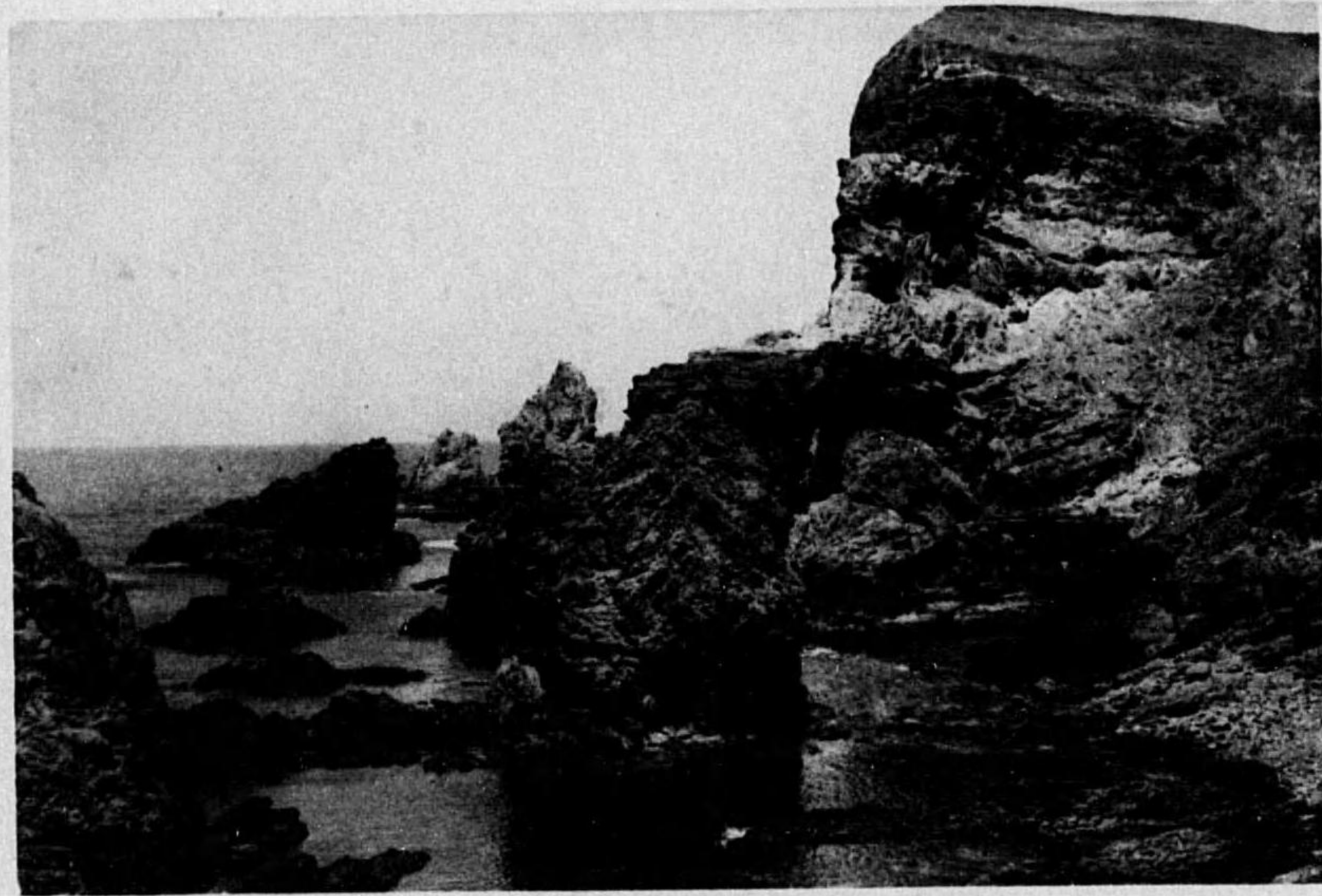
岩立ノ神大ルアニ方前ノ「窟の暗明ヲ」

岸海賀國岐隱 二十三第



帶一近附窟洞蝕波タ來出ニ分部ルアノ脉岩小ヤ理節ノ石岩  
ヲイト「穴六十二の走<sub>レ</sub>矢ヤ」ヲ窟洞ヒ云ト城宮龍ヲ

岸海賀國岐隱 三十三第



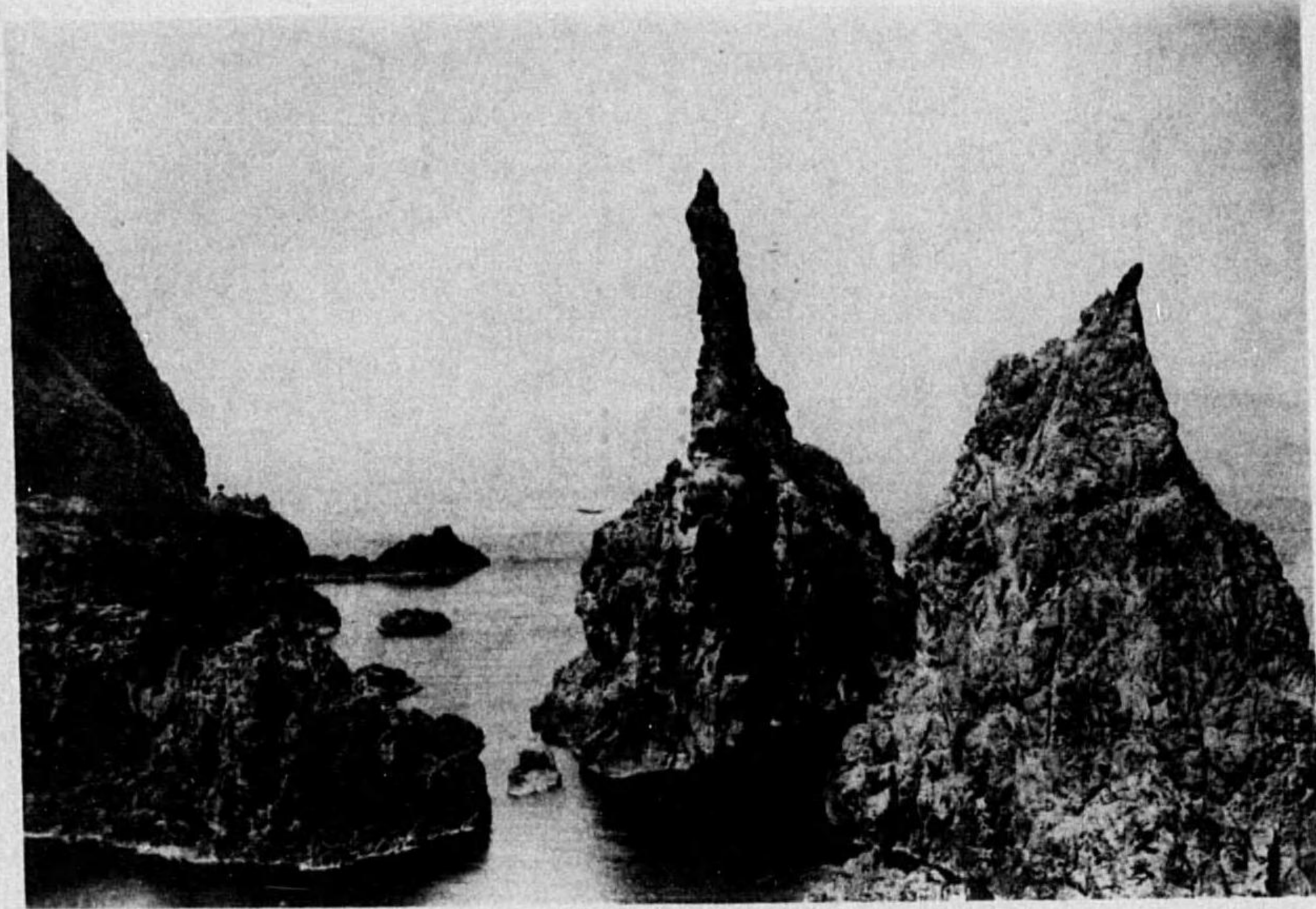
ル見ヲ橋天通=僅ト部一ノ壁絶群島小ノ近附橋天通

岸海賀國岐隱 四十三第



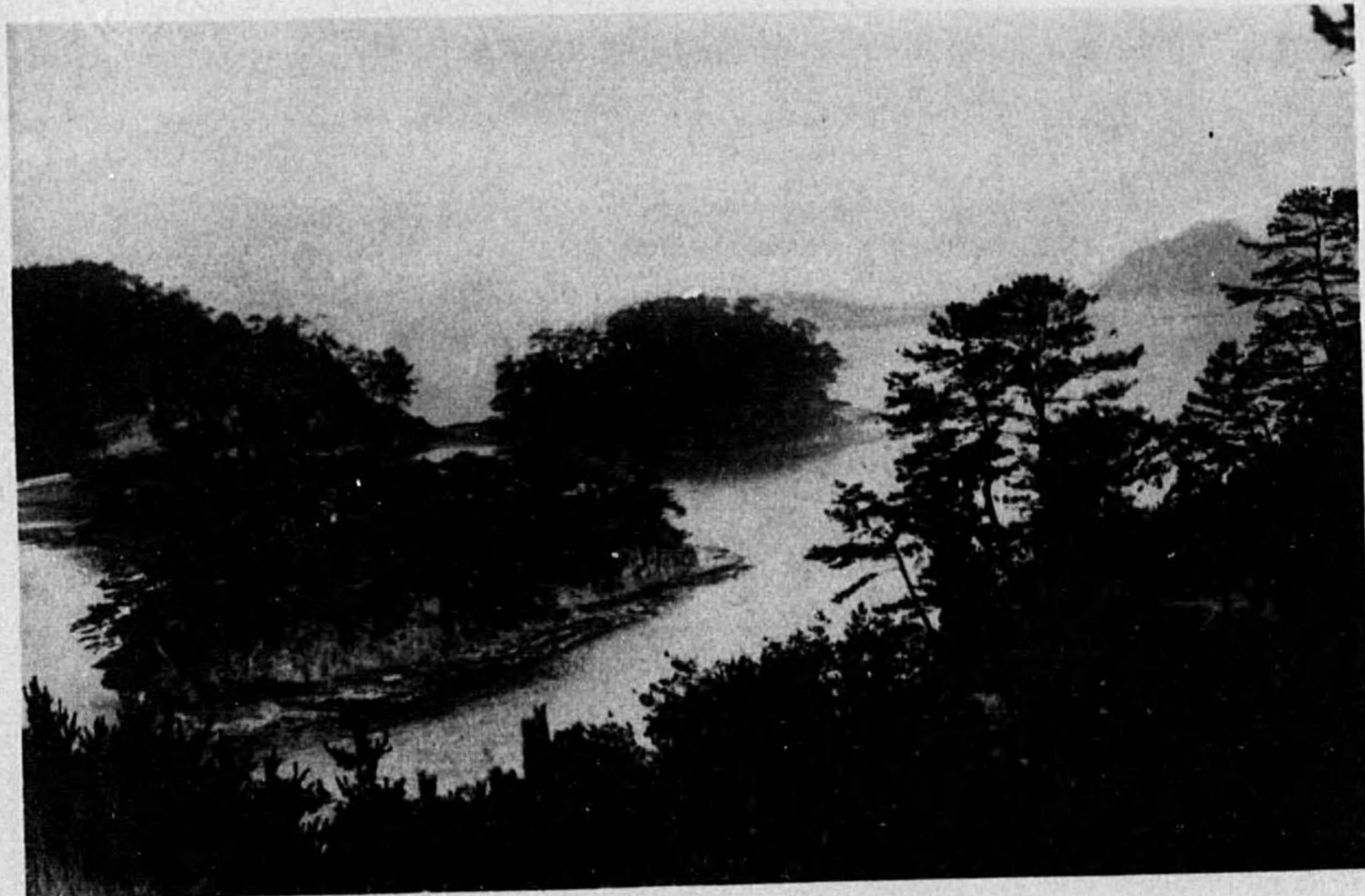
岩立ノ神大ト壁絶ク續へ南ハ景遠群島小ノ界上天

岸海賀國岐隱 五十三第



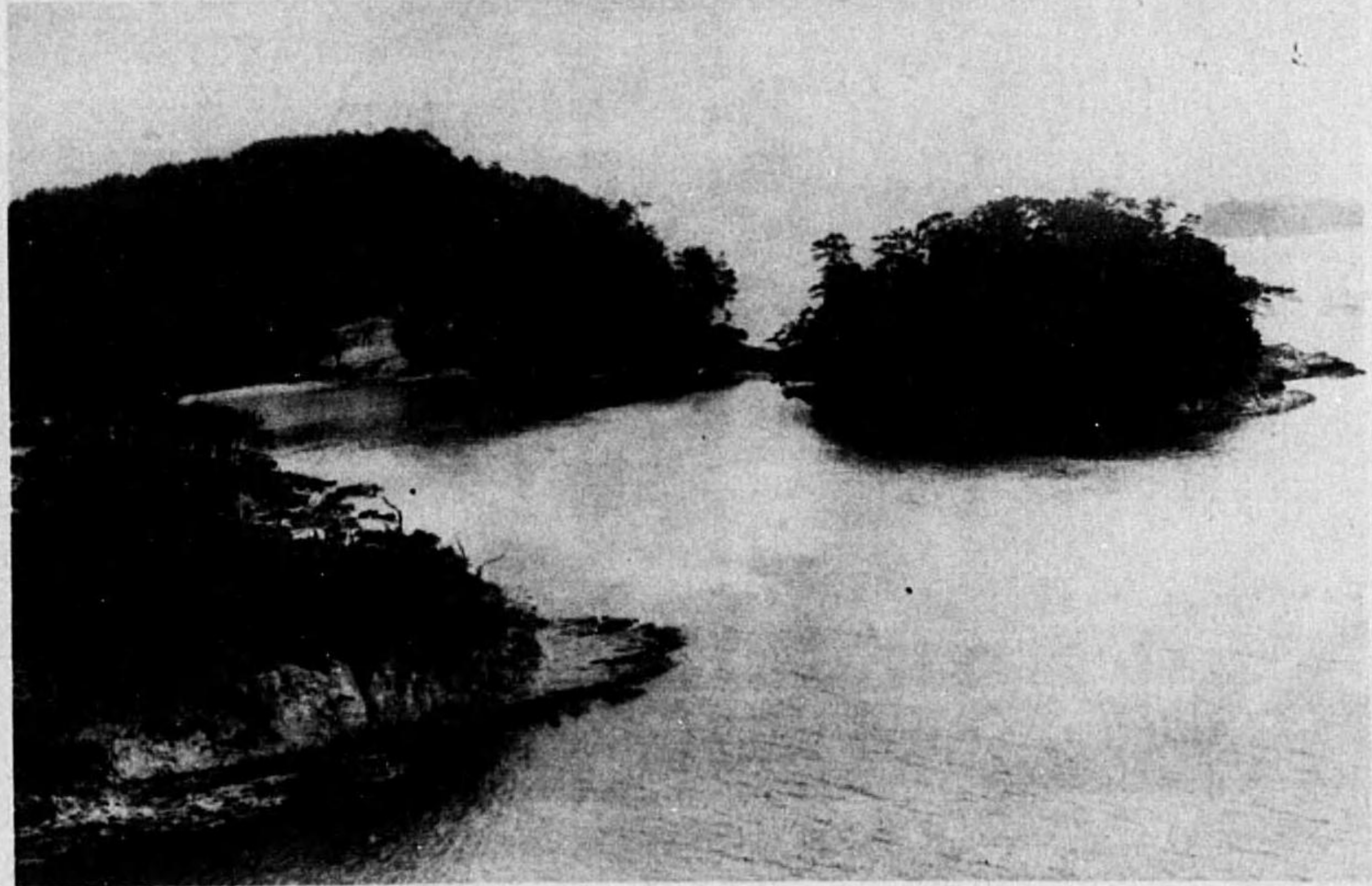
(央中) 岩佛ノ界上天

灣夫知岐隱 六十三第



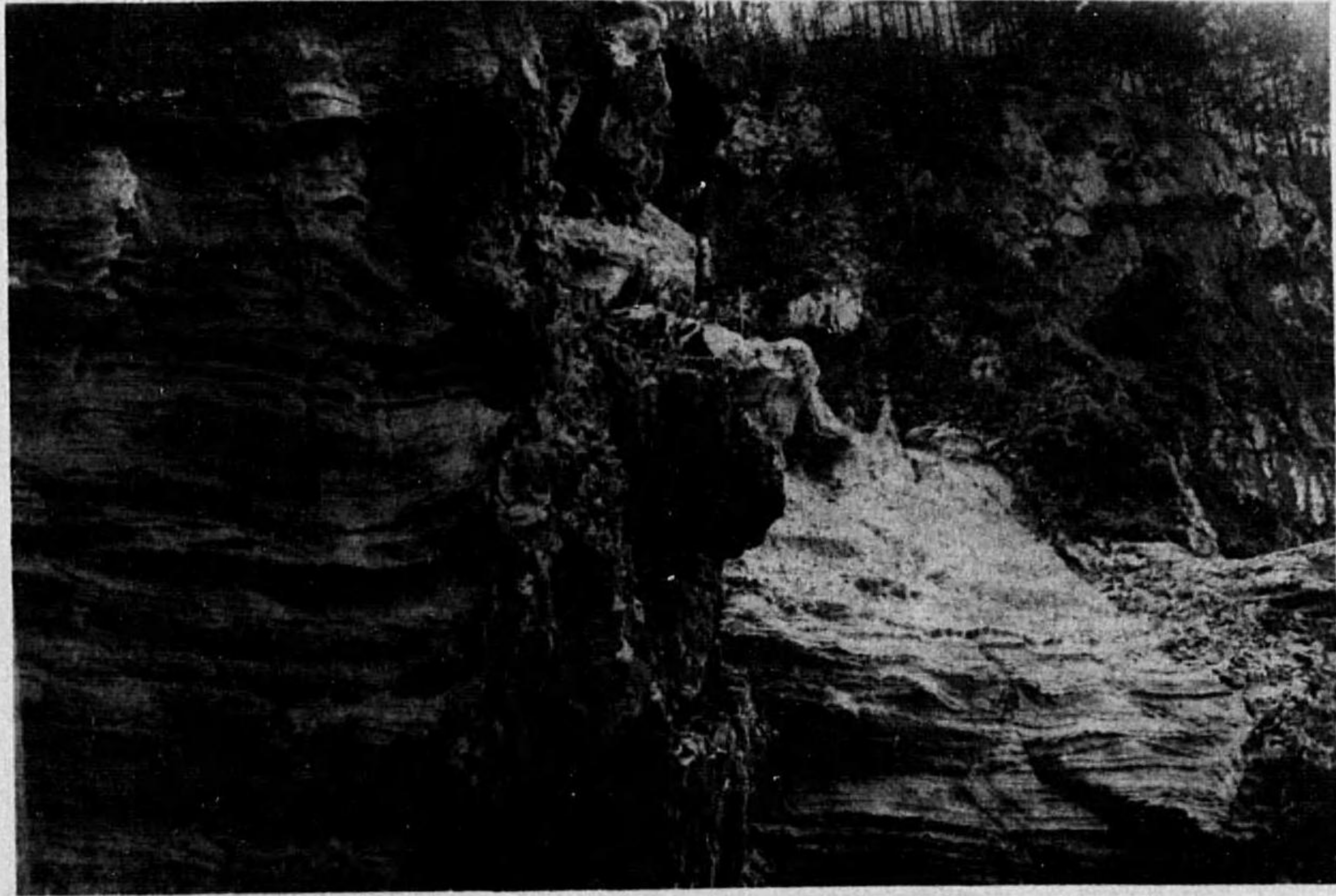
ル歌リヨ臺ヲ管ヲ宇ウヲ景全ルヨニ「谷レ溺」

灣夫知岐隱 七十三第



ル見ヲルス達發ノチンベ起隆ニ帶一岸海近附及島津渡

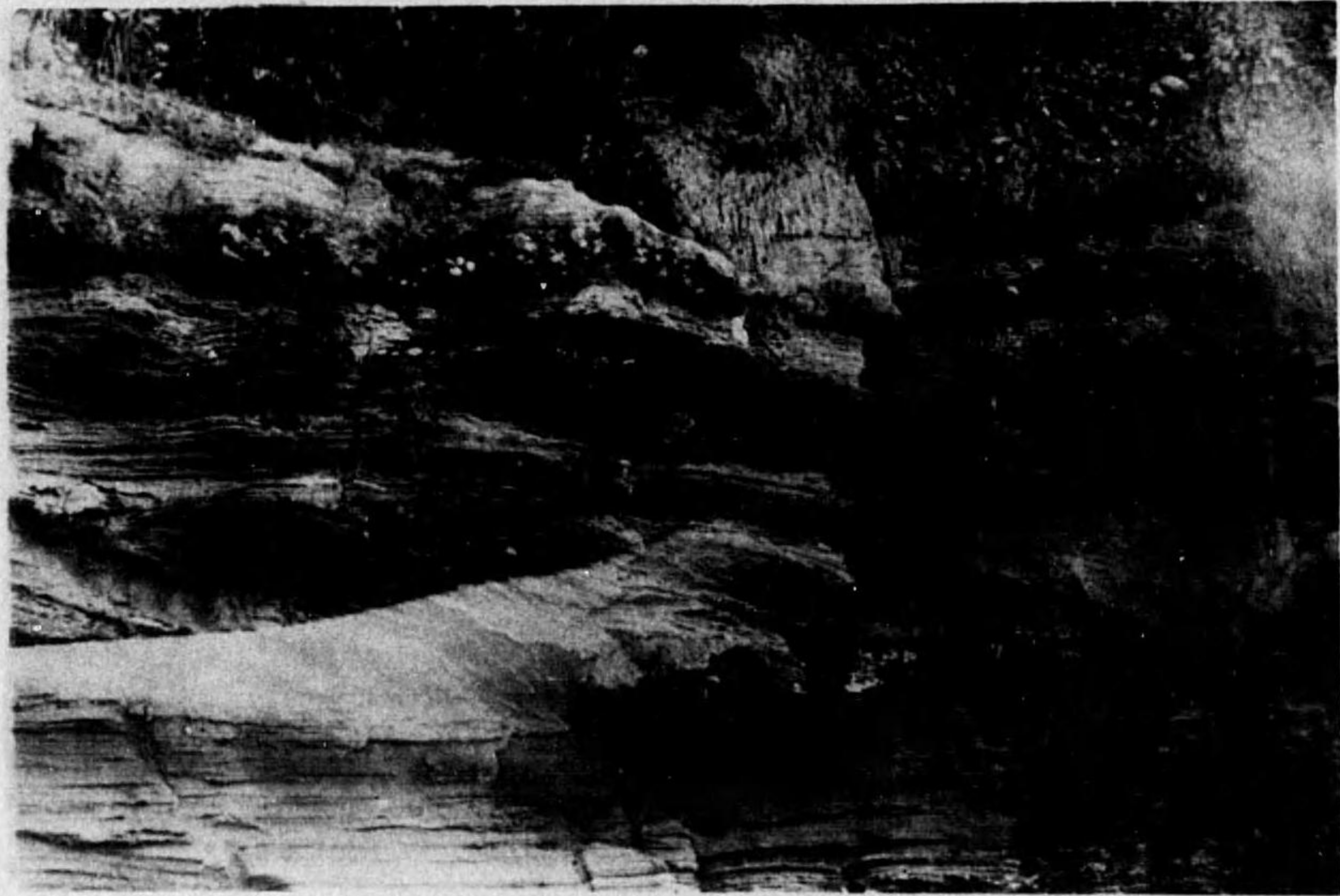
灣夫知岐隱 八十三第



脉岩岩面粗ノ中層紀三第ルケ於ニ島津渡

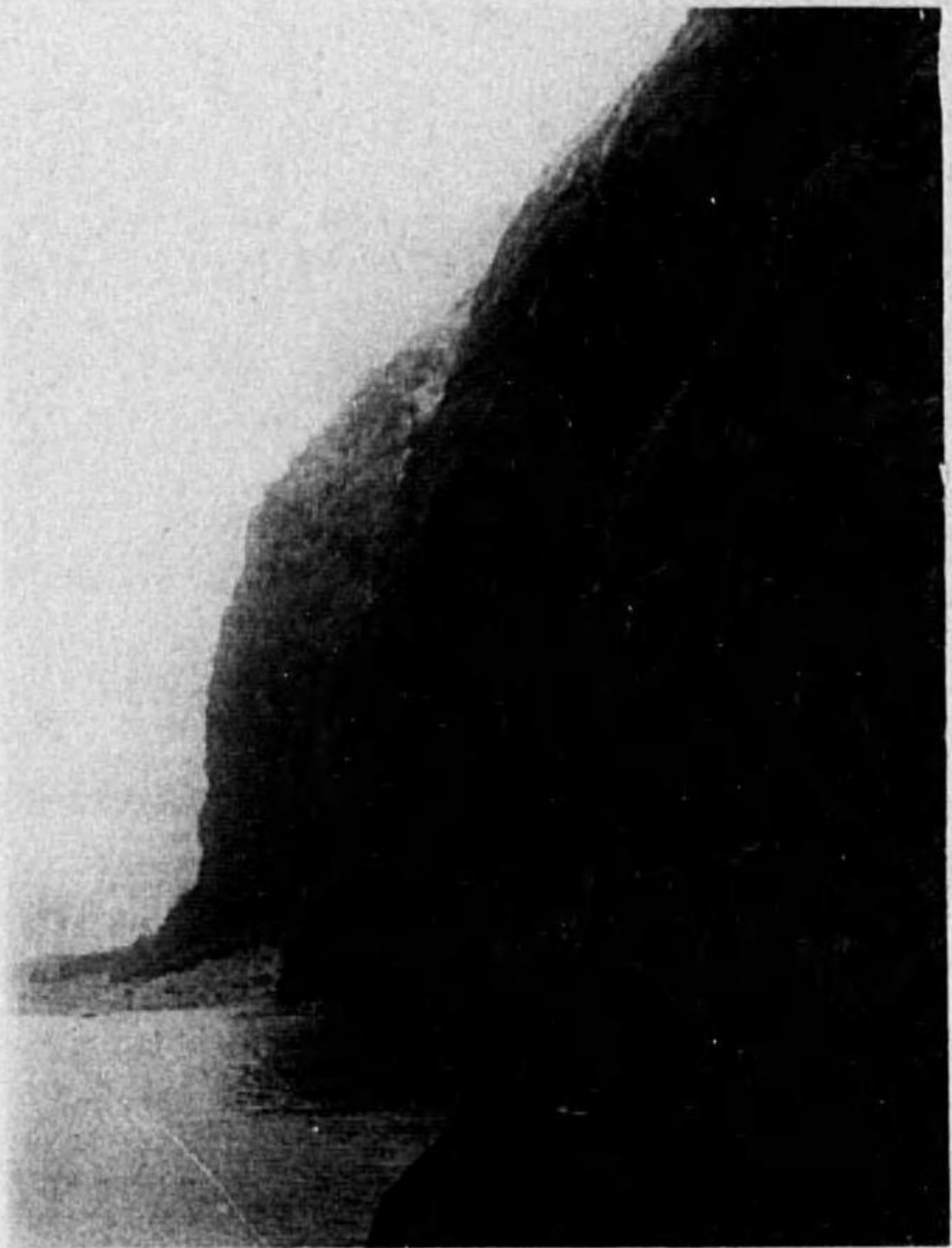


灣夫知岐隱 九十三第



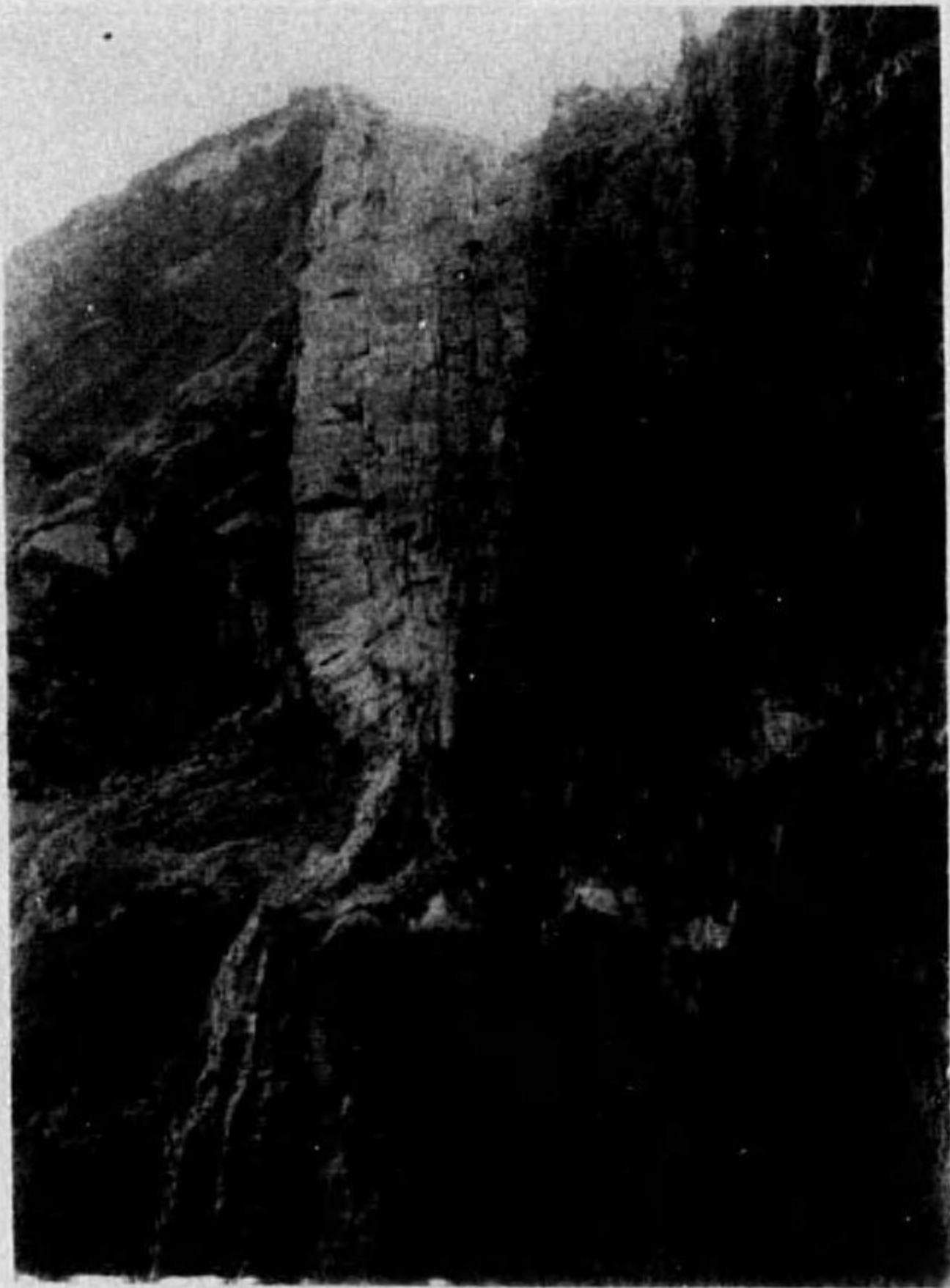
層累ノ岩礫及岩砂、岩灰凝)層紀三第ルケ於ニ島津渡  
(イシ著ガ層低ニ特テ於ニ部ノ岩砂デ

第四十 隱岐知夫赤壁



斷崖ノ大觀、海上南方ヨリ北ニ向テ撮ス、右上方斜ニ見エルハ  
赤色凝灰岩、左方海岸ニ見エル白色部ハ隆起ベンチヲ爲ス熔岩流

第四十一 隠岐知夫赤壁



昇龍岩（粗面岩岩脈）ノ上部、右ニ少シ隔テ無名ノ小岩脈  
ガアリ下方デハ合流スル

壁赤夫知岐隠 二十四第



テ懸状ルアニ面背ノ塊地層斷ヲイト「レ離」（左）岩龍臥  
「レ離」ハ印× ルエ見ガ面側其ニ特

壁赤夫知岐隠 三十四第



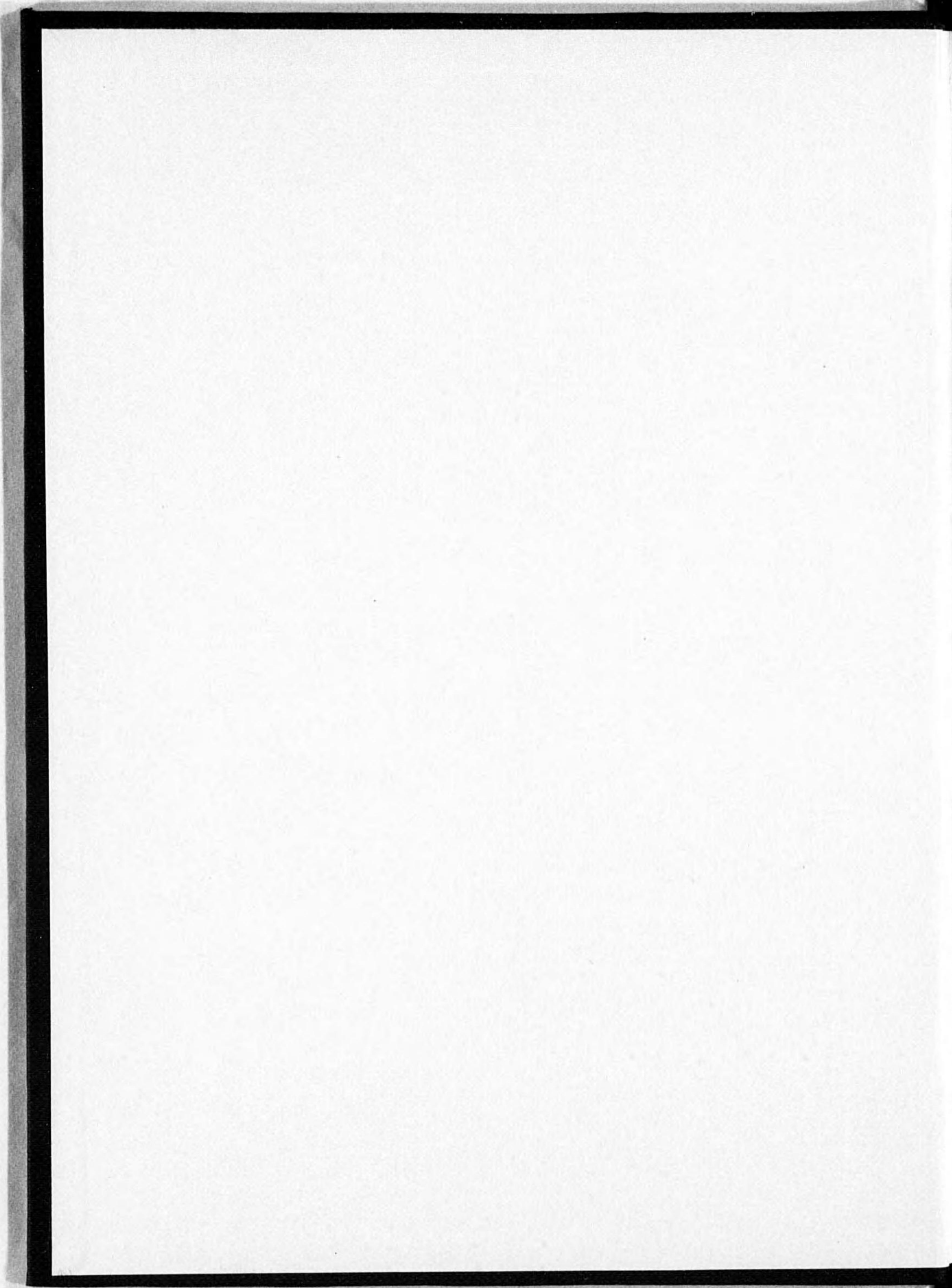
昇龍岩ノ下部ト凝灰岩ノ間ニ波蝕ヲ受ケタル状態



昭和十一年二月十五日印刷  
昭和十一年二月二十日發行

島根縣

松江亭町三番地  
印刷人 渡部民也  
松江亭町三番地  
印刷所 渡部印刷所  
電話一〇五二番



終